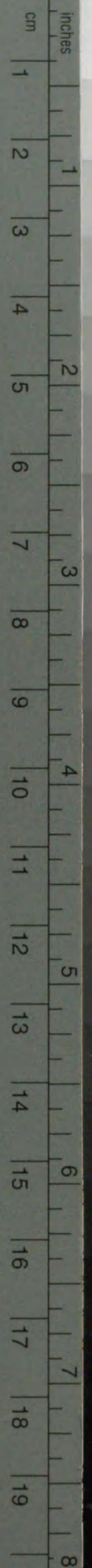


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



315
241

315-241
1200701771700

早稻田大學第三十二回
文學科講義錄
十八史略講義
桂五十四郎著

四
九

早稻田大学教授

桂五十郎述

十
史
畧
谷
三
世
義

13256
13257

早稻田大学出版

早稻田大学出版

315-241



十八史畧講義

早稻田大學教授

桂五十郎述

早稻田大學出版部藏

大正
6. 5. 17
製本

P150

P173

P176

P.P 135 136 卷下

昭和三年四月廿二日

身

余不好此乃捨之

然

1956



八史略講義

早稻田大學教授

桂

五十郎講述



堯治天下五十年不知天下治歟不治歟億兆願戴已歟不願戴已歟
問左右不知問外朝不知問在野不知乃微服游於康衢聞童謠曰立
我烝民莫爾極不識不知順帝之則有老人含哺鼓腹擊壤而歌曰
日出而作日入而息鑿井而飲畊田而食帝力何有於我哉

字解

堯。五帝の一人にして支那第一の聖帝。億兆。多くの人民。外朝。周制

に天子有四朝。一曰外朝。決罪聽訟之朝也とある。故に外朝は今の裁判所の如き
もので常に人民に接する役所である。康衢。路の五達を康と云ひ四達を衢と云
ふ。即ち人の通行のはげしき町。童謠。兒童等が歌ふ。我烝民。衆民。衆民
歌は其土俗地の風や人情を知る事が出来る。烝民。衆民。衆民。衆民。衆民。衆民。
指す。極。最善至極の極。噴食物。食。口に入ることを。取腹。腹を拍する

りながら叩くこと。此の合嘯鼓腹の四字は、天下太平の象を形容したものである。

解釋 堯帝は天下を統治したことが五十年の久しきに及んだ。しかる堯帝は

下が太平に治つて居るか、治つて居ないか、又人民は自分を尊として推戴

を願つて居るか、願つて居ないかを知らなかつた。依つて之を左右に居る侍臣

問うたけれども分らなかつた。之を外朝の役人に問うたけれども分らなかつた。

又之を在野の百姓に問うたけれども分らなかつた。然し堯帝は是非之を知らう

と思ひ、そこで微賤の人の着る衣服を着て、帝王であることを人に知れぬ様に、康

衢に遊んで童謡を聞いた。其童謡に曰ふのに、我々衆民をして安樂に生活を立

てることが出来る様にしてくれたのは、皆堯帝至極の徳の賜である。故に我等は

何事も識らず知らずの中に、帝の法則に順つて居るのである。

さて此の歌は堯帝の徳を賛美したのであるから、堯帝も定めし安心したのであらう。

又老人が有つて、食物を喰べつゝ、腰を叩き、土壌を撃つて歌の調子を取つて歌て曰

ふのに、我等は毎日、日が出ると仕事に取りかかり、日が西に入ると休息する。又

井戸を掘つて水を飲み、田を耕して食うて居る。此の様に我等は自分の力で自由

に仕事をして居るから、天子の力が、どうして我等に關係があらうか、天子の力は我

等に少しも關係が無いのである。此の歌も亦堯帝の徳を賛美したものである。

凡そ國民が安穩に生活することが出来るのは、皆上に聖天子があつて仁政を施し

てくれるからである。今此の老人は之を知らず、帝力何を我に有んやなどとい

て力んで居る所は、如何にも太平の民でこれによつても、堯帝の徳化の偉大なるこ

とを知ることが出来る。

觀于華、華封人曰、嘻、請祝聖人、使聖人壽、富多男子、堯曰、辭、多男子則

多懼、富則多事、壽則多辱、封人曰、天生萬民、必授之職、多男子而授之

職、何懼之有、富而使、人分之、何事之有、天下有道、與物皆昌、天無道

修、德就、間、千歲厭世、去而上僊、乘彼白雲、至于帝鄉、何辱之有

字解 觀、遊ぶこと。呂氏春秋高誘が註に、觀、遊也とある。封人、

人。嘻、喜んで發する歎辭。間、閑に同じ。

解釋 堯帝は嘗て華といふ所に遊びに往つた。此の時華の封人が

ふのに、さて、請ひ願くは聖徳ある我が君の將來をお祝ひ申さん

人をして壽命長久にして富貴ならしめ、且つ月の子を多く有らせたい

と。堯帝が曰ふのに。それはお断り申す。何せならば、男の子が多くある心配すること多く、富みて財寶があると、事が多くなつて煩はしい。又壽命と辱が多いからであると。封人が曰ふのには、天は萬物を生ずると、必ずその職業を授け與へることである。故に聖人も之に倣ひ、男子が多くあるに職業を授けたならば、何んの懼れ心配があらうか、懼れる事は無いのである。富みて財寶が多くなれば、之を人に分ち與へたならば、何んの煩はしい事があらうか、煩はしい事は無い。又天下に道德が盛んで、太平に治まつたならば、萬物はすべて共に昌えて盛美になるから、壽命が長くても辱を受ける心配は無い。若し不幸にして道德が衰へ、天下が亂れた時には、獨り自ら其德を修養して閑地に就き、隱遁すればそれで事足るのである。又千年も生きて後、此の世がいやになつたならば、仙人と爲つて天に上り、彼の白い雲に乗つて天帝の郷へ往けばよいのである。故に壽命が長久であつたとしても、何んの辱が有らうか、辱は無いのである。これも封人が堯帝の德を頌揚したのである。

舜崩禹乃踐位。聲爲律。身爲度。左準繩。右規。饋十起以勞天下之

民。出見罪人。下車問而泣曰。堯舜之人。以堯舜之心爲心。寡人痛之。古有醴酪。至禹時。儀姓各自以其心爲心。寡人痛之。古有醴酪。至禹時。儀之曰。後世必有以酒亡國者。遂疏儀狄。收九牧之金。德以享上帝。鬼神會諸侯於塗山。執玉帛者萬國。中人懼禹。仰天歎曰。吾受命於天。竭力而勞萬民。猶蝦蟇。顏色不變。龍俛首。低尾而逝。

字解

準。大工等が物の平面のゆがみを見ると、工が物のゆがみを見る時、又は板などに直線を引、形を畫く具、ぶんまはし。矩。さしがね、曲尺。が無いものである。饋。食事をする事。寡人。少い人といふ意。醴酪。甘酒なり、師古の註に、醴、醉人、酪亦醴類とある。儀は姓、狄は名。九牧。の州に區劃し、各州に牧、即ち長官を置いた。上帝。は公侯伯子男五等の諸侯の持つて居る者。

諸侯及び附屬の君が天子に謁する時は、玉帛タマヒトを奉り、桓圭クワンケイ、信圭シンケイ、躬圭クウケイ、穀璧コクヘキ、蒲璧ホヘキの別があり、帛には玄クニ、クロ、纁ヒメ、やもり、守宮、逝シ、サルと訓ず、去るなり。

解釋 舜帝が崩じたから、禹は天子の位を踐んで帝

律に叶ひ、その一身の威儀動作は、自然に法度とな

手に持ち、規矩を右の手に持つが如く、一舉一動イツキョウイツドウ

た。又一度の食事をする時でも、十遍も起つて政務

又外出して罪人を見ることがあると、すぐ車から下

第を尋ね、且つ涙を流して曰ふには、古へ堯舜の世の

心を以て自分の本心としたから、一人も不善の人は無か

なつてからは、百姓等は寡人の心を顧ず、各自分の心を以

て犯す人があるのである。これは、畢竟寡人の徳が少い爲

に之を残念に思ふと。かく泣いて悔い、益々その徳を磨い

酒ばかりあつたが、禹の時に、儀狄といふ者が始めて酒を作つ

んで甘いものであるとして曰ふのに。後世には必ず此の酒に溺れて、國

があるだらうと。それから以後は、儀狄を疎遠にし、之を近づけなかつた。又禹は

九州の長官から金を收め、之を以て九個の鼎を鑄造した。而してその鼎の三本の

足は、正直、剛、柔の三徳に象り、又その鼎は、上帝や神様を祀る時に享し供へることに

した。又或る時、諸侯を塗山といふ處へ會合せたが、此の時、玉や帛を執つて謁見

を請うた諸侯、及びその附屬の君は、一萬人の多きに及んだ。嘗て江水を渡つた時

に、黄色の龍が禹の乗つて居る舟を脊に負うたから、舟は將に覆没せんとした。依

て舟中の人々は皆懼れて、顔色が無かつた。獨り禹は自若として懼れず、天を仰い

で歎じて曰ふのに。我は天帝の命を受けて天子と爲り。有らん限りの力を盡し

て萬民を勞り、萬民の安寧を計つて居るのであるから、何物も我を害する筈が無い

のである。故に龍などは懼るゝに足らない。且つ人間が此の世の事に當るに

るのは、丁度寄留して居ると同じことで死するのは、丁度生

である。故に假令此の龍が舟を覆したからとて、

ひて龍を見ること、丁度守宮の様で、少しも顔色

の威徳に服したのだらう、首を俯し、尾を垂

孔甲之後、歷王、皐王、發、王履癸號

有施以末喜女焉。有寵所言皆從。爲傾宮。可以運船。槽堤可以望十里。一鼓而牛飲者大崩。湯伐夏。桀走鳴條而死。

字解

貪虐。貪は物をむさぼりて厭くところを知らず、虐は人を慘

鐵鈎索。鈎は鐵の勾り、金索は繩、故に鐵索は鐵のくさり。傾宮。傾は瓊に、玉は玉。瑤臺。瑤は玉の美しきもの、故に傾宮瑤臺は美玉をちりばめた宮殿樓臺。

解釋

夏は孔甲といふ天子から皐發の二王を経て履癸といふ王に至つた。此の王は別に號して桀と曰うた。性質が貪虐で、力は飽く迄強く、手で鐵のくさりを引き延ばす程であつた。嘗て有施氏といふ諸侯を征伐した、有施氏は末喜といふ美人を送つて其歡心を買つた。桀は頗る此の美人を寵愛し、その言ふ事は皆何んでも従つた。これより桀は姪樂に耽り、傾宮瑤臺を造つて人民の財産をしばり取り、生肉を山の如く、乾し肉を林の如く、澤山に蓄へたり。或は酒で池を造り、その池には船を運轉することが出来る程廣大に造つたりした。又その酒の糟は十里の長さの堤防を築くことが出来る程であつた。そして一たび鼓を鳴して合圖をする

と、三千人の宮人は立に集り、丁度牛が水を飲む如く、酒の池に口をつき、がふくと音を立て、飲んだ。末喜は之を見て甚だ樂みとした。さて桀は此の様な暴君であつたから、國民は恰も山の崩るゝが如く離れ、一人として桀に味方する者は無かつた。そこで湯といふ聖人が天に代つて桀を征伐したから、桀は鳴條といふ處へ遁げて行つて死んだ。

桀殺諫者關龍逢。湯使人哭之。桀怒召湯囚夏臺。已而得釋。湯出見有張網四面而祝之。曰。從天降。從地出。從四方來者皆罹吾網。湯曰。嘻。盡之矣。乃解其三面。改祝曰。欲左左。欲右右。不用命者入吾網。諸侯聞之。曰。湯德至矣。及禽獸。伊尹相湯伐桀。放之南巢。諸侯尊湯爲天子。

字解

網。鳥を捕へる網、ひるてん。祝。神に祈ること。

解釋

夏の桀王は諫官の關龍逢といふ忠臣を殺した。依て湯は人を遣はして、逢の死を弔はせたところが、桀は反て怒り、湯を召致して夏臺といふ獄舎に投囚然し、湯は間も無く赦された。湯は嘗て外出した時に、網を四方に張つて神に祈つて居る者を見た。その祈りに。天から降るもの、地から出づるもの、及び四方

來るものは、皆吾網に罹れと。湯は歎じて曰ふのに。さて、此の様では鳥を捕へ盡すもので、如何にも慘酷であると。そこで自ら其張つてある網の三方を解き、改めて神に祈つて曰ふのに。左の方へ行かんと思ふものは左へ行け、右へ行かと思ふものは右へ行け、唯我が命令を用ゐざるものは吾が網に罹れよと。湯の博愛の心が流露したのである。そこで天下の諸侯は此の事を傳へ聞いて、皆湯に歸服した。それから伊尹といふ賢者が、湯の宰相と爲つて湯を佐け、遂に桀を征伐して、之を南巢といふ所へ追放した。そこで天下の諸侯は湯を推尊して天子とした。

大旱七年。太史占之曰。當以人禱。湯曰。吾所爲請者民也。若必以人禱。吾請自當。遂齋戒。剪爪斷髮。素車白馬。身嬰白茆。以身爲犧牲。禱于桑林之野。以六事自責曰。政不節。歟。民失職。歟。宮室崇歟。女謁盛歟。苞苴行歟。讒夫昌歟。言未已。大雨方數千里。

字解

太史。天文を掌る役人。齋戒。物忌をして身心を清めること。白茆。茆は

茅に通ず、白いかや。犧牲。神を祭るとき、神に供へる畜いけにへ。こゝは湯王が畜に代つていけになつたのである。女謁。婦女の秘密の頼み事。苞苴。賄賂。讒夫。正字通に、崇飾惡言、毀善害能、謂之讒とある。故に讒夫とは、人の能を誣ひて罪におとすこと。

解釋

湯が帝位に即いてから七年間、旱魃が続いた。そこで湯は太史に命じ、雨の降ることを占はせた。太史が占つて曰ふのに、これは是非人間を犠牲にして禱らなければいけぬと。湯王が曰ふのに、我が雨を請ふ所以は、人民の爲めである。然るに若し必ず人を以て禱らなければならぬならば、請ひ願くは吾れ自ら犠牲にあらう。可憐の人民を犠牲にすることは出来ない。遂に齋戒し、斷ち、白い車に白い馬を附けて之に乗り、又身に白茆を纏ひ、桑林の野に行つて禱つた。その時に、六ヶ條の事を以て、我が政事は節度が無く、亂れて居るか。我が人民は居るか。我が住んで居る宮殿は餘り立派すぎるか。居るか。賄賂が行はれて正義が減んで居るか。居るか。かく自ら責めて神に謝したところ

が沛然として至り、四方數千里の地城

帝辛名受。號爲紂。資辯捷疾。手格猛獸。象箸箕子歎曰。彼爲象箸。必不盛以土簋。將藜藿衣短褐。而舍茆茨之下。則錦衣九重。高臺廣足矣。

字解

資辯。天性の能辯。捷疾。舉動が敏捷。手格。手で撃つ。玉杯。はかはらけ土器。簋は黍稷を盛る具。即ち黍稷を入れる土器。玉杯。有兩耳者とある。故に玉杯は玉で造つた美しき羹を入れる具である。之を玉のかづきと解するは非なり。藜は野菜。藿は豆の葉。共に賤者の食するもの。短褐。短き毛織の着物。茆茨。かやといばら。稱。カナフと訓す、相應すること。

解釋

帝辛の名は受で、號して紂と曰うた。此の人は天性の雄辯家で、且つ舉動は敏捷で、特に腕力が強くて、無手で猛獸を殴り殺す程であつた。又その智力は諫言を辯駁して之を斥けることが出來、辯舌は自分の非理非道を飾つて、反て之を正理

の様にこじつけることが出來。實に剛愎であつた。嘗て始めて象牙の箸を造つた。叔父の箕子が之を見て嘆息して曰ふのに。彼れ紂は象牙の箸を造つたが、既に象牙であるからには、必ず食物を盛り入れるのに土簋を用ゐないで、玉杯を用ゐるだらう。既に玉杯や象箸があれば、亦必ず藜藿をあつものにして喰ひ、短褐を着て茆茨で葺いたきたない家に住まないであらう。必ず着物を錦にし、宮殿を興築し、高い樓や廣い室を、此の象牙の箸に相應する様に造るであらう。果して然らば天下の財寶を取り盡しても、此の慾を満たすことが出來ない。實に困つたものであると、歎息した。

紂伐有蘇氏。有蘇以姐己女焉。有寵。其言皆從。厚賦稅以實。毛臺之。盈鉅橋之粟。廣沙北苑臺。以酒爲池。懸肉爲林。爲長夜之。諸侯有畔者。紂乃重刑辟。爲銅柱。以膏塗之。加於炭火之上。緣之。足滑。跌墮火中。與姐己觀之。大樂。名曰炮烙之刑。淫。子數諫不從。去之。比于諫。三日不去。紂怒曰。吾聞聖人之而觀其心。箕子佯狂爲奴。紂囚之。殷大師持其樂器。祭器。

乃九侯鄂侯爲紂三公。紂殺九侯鄂侯爭并脯之。昌聞而歎息。紂囚昌。姜里昌之臣散宜生求美女珍寶進紂大悅。乃釋昌。昌退而修德。諸侯多叛。紂歸之。昌卒。子發立。率諸侯伐紂。紂敗于牧野。衣寶玉自焚死。

字解

麗臺臺の名財寶を藏する所。鉅橋倉の名米穀を藏する所。苑臺苑はその園臺はうてな樓臺。畔叛也そむく。刑辟辟は法刑罰の法。膏あぶら油。炮烙苑あぶる炙。烙やく焼。心ムネと訓す胸。竅あな孔。三公太師太保。

解釋

紂は有蘇氏といふ大名を征伐した。有蘇は誅を恐れ姐己といふ美女を贈つて紂にめあはした。紂は頗る此の姐己を寵愛しその言ふこと願ふことは皆従つた。是れより紂は賦税を澤山に取り立て鹿臺には益財寶を充實し鉅橋には益米穀を蓄積した。又沙北といふ所にある園を擴張しそこにある樓臺を増築し或は酒を以て池を造り肉を懸けて林の如くし姐己と共に晝夜の別なく宴飲に耽つた。紂はかくして政事を放棄したから百姓は皆怨を抱き諸侯には叛する者があつた。然るに紂は之を以て刑罰の輕き爲めであると思ひ爾來は刑法を重くし實に慘酷なることをした。今其一例と言へば。銅の柱を造つて油を塗り之を炭火

の上に横に渡しその上を罪人に渡らせた。そして紂は罪人が油がとろけた爲めに足がすべりつまづいて火中に墜ちて悶死するのを見姐己と共に面白い見物であるとして樂んだ。そして之を炮烙の刑と曰うた。且つ姪亂を恣にし暴虐に甚だしき故庶兄の微子が數諫めたけれども従はなかつたから微子は己を得ず紂の朝を去つた。又比干といふ忠臣は三日間紂の側を離れずに諫めた。紂が奴つて曰ふのに。吾は嘗て聖人の胸には七個の孔があると聞いて居る故に今之を實験せうと遂に比干を殺して其の胸を割いて見た。紂はかく亂暴で手がつけられないから叔父の箕子は伴つて發狂のまねをして奴僕と爲つた。けれども紂は之を囚へて獄舎に投じた。般の大師即ち樂官は般の音樂の道具や祭祀の器具を持つて當時聖君として名高い昌の國即ち周へ遁げて行つた。さて此の周侯の昌と名、諡して文九侯と鄂侯とは紂の三公の役であつた。紂が九侯を殺したから鄂侯は其不可を諫争した。ところが紂は怒つて鄂侯を殺し其屍を乾し燥した。昌が此の事を聞いて紂の無道を歎息したところが紂は又昌を姜里といふ所の舎に投じた。此の時昌の臣の散宜生といふ者が主人を救はうと思ひ紂の好むる美女と珍寶とを贈つたところが紂は大い喜んで昌を赦した。これより昌

封内に退居し、徳を修めて仁政を施したから、天下の諸侯は多く紂に叛いて昌に歸服した。昌が死んでその子の發が立つて後を嗣ぎ、遂に諸侯を率ゐて紂を征伐した。紂は牧野といふ所で大敗し、寶玉を身に纏ひ、自ら火中に投じて焚け死んだ。

昌立。爲西伯。西伯修徳。諸侯歸之。虞芮爭田。不能決。乃如周。入界見。畔者皆遜。畔。民俗皆讓。長二人慙。相謂曰。吾所爭。周人所耻。乃不見西伯。而還。俱讓其田。不取。漢南歸西伯者四十國。皆以爲受命之君。三分天下有其二。

字解 西伯、西の方の諸侯の長。如、行也。遜、讓也。畔、田の界あせくろ。受命之君、

天の命を受けて萬民に王たるべき立派な君。

解釋 昌は立つて周の王となり、遂に西伯と爲つた。西伯は自ら徳を修めて仁政を施したから、天下の諸侯は皆歸服した。當時虞と芮との國の人民が田の畔を争うて之を解決することが出來ず、相談の結果、周の西伯の裁決を仰ぐことに一致し、相携へて周へ行つた。いよく、周の國界へ入りて、田を畔す者を見ると、皆互に畔を譲り合うて互に取らず、又人民を見ると、幼者は長者を尊敬して之に道を讓つて居た。そこで此の二國人は大に耻ぢ、又互に話し合うて曰ふのに、吾々が争うて居る事は、周人の耻として爲さるる所である。吾々は實に周人に對して面目が無いと。遂に西伯に面會せずして國へ歸り、互にその田地を譲り合うて取らなかつたといふことである。これによつても、西伯の徳化の偉大なることを知ることが出来る。さて西伯はかく仁政を施したから、漢水といふ河から南で、西伯に歸服した國は四十ヶ國もあつた。そして此等の國民は皆思ふには、西伯こそ、實に受命の君であるから、吾等は之を推戴せねばならぬと。かくて西伯は、天下を三分して其二を領有した。當時支那は九州あつて六州は西伯に歸し、三州だけが紂に屬居たのである。

有呂尙者。東海上人。窮困年老。漁釣至周。西伯將獵。卜之曰。非熊。非羆。非虎。非貔。所獲霸王之輔。果遇呂尙於渭水之陽。曰。自吾先君太公曰。當有聖人。適周。周因以興。子真是邪。久矣。故號之曰太公望。載與俱歸。立爲師。謂之師尙父。

字解 呂尙。呂は氏尙は名。羆。龍の角あるもの。羆。熊に似て

獸。貌。豹に似た猛獸。陽。北なり、凡そ川

は南を陽と爲す。師尙父。師として尙ぶ

解釋

呂尙といふ人があつた。此の人は東海上の

になつたから、隠遁しようと思つたが、西伯が仁政を以て

を釣りながら周へ行つた。此の頃、西伯は將に獵に出でんと

た。ところがその兆に曰ふのに。今日の獲物は、龍で無く

も無ければ貌でも無い。獲る所の物は諸侯の長と爲つて

子の輔佐たる賢人であると。果して此の占の通り、西伯は

河の北で出會うた。そして相語りて大に喜んで曰ふのに。

吾が先君たる祖父の

太公が話されたことがあつた。それは必ず聖人があつて

が周は此の聖人に因て興り榮えらる。想ふに貴下は此の

公は貴下の來るのを待つて居たことが久しい間であつた

り呂尙の來りしを喜び、その太公が待つて居たのに因み、

自分の車に同乗せしめて連れ歸り、爾來先生として其教

尊した。

西伯卒。子發立。是爲武王。東觀兵。至於盟津。白魚入王舟中。王俯取以

祭。既渡。有火自上復于下。至王屋。流爲鳥。其色赤。其聲魄。是時諸侯不

期而會者八百。皆曰。紂可伐矣。王不可引還。紂不悛。王乃伐紂。載西伯

木主以行。伯夷、叔齊叩馬諫曰。父死不葬。爰及干戈。可謂孝乎。以臣

君。可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰。義士也。扶而去之。

字解

觀。示也。自上復于下。上は昇る、復は反る、即ち下から昇り、復た下に反る

こと。魄。安定の意、落ちついて居る。悛。改也。木主。神主、俗に謂ふ位牌。伯

夷、叔齊。兄弟なり、姓は墨、伯は兄の義名は允、字は公信、諡して夷と曰ふ。叔は弟

り、名は智、字は公達、諡して齊と曰ふ。孤竹君の二子なり。叩馬。叩は扣と通ず、馬

を駐むること。兵。殺に同じ。

解釋

西伯が死んで子の發が立つた、之れが武王である。武王は嘗て東の方に

威を示す爲めに、盟津といふ所迄行つた。此の時白い魚が飛んで武王の乗船に

つた。さて白は、

と思ひ、俯して之を取つて祭つた。それから既に河を渡り終ると、今度は、火が

て下から昇つて復た下に反り、そして武王の陣屋に來り、又飛んで行つて鳥となつたが、その色は、赤くその啼き聲はおちついて居た、さて鳥は孝の徳がある鳥である。而して今武王は父文王の大業を繼ぎて益々之を發揚する孝子であるから、鳥の瑞兆であつたのである。また、赤は周の正色であるから、これは皆周の大業を祝福する八百に上り、皆口を揃へて武王に勸めて曰ふのに。紂は暴君であるから征伐すべしと。しかし武王は承知しないで兵を率ゐて歸り、紂王の改心を祈つた。然るに紂王は依然としてその暴政を改めなかつたから、武王はいよいよ征伐することに決心し、父文王の木主を載せて出陣した。これは父の志を繼いで暴主を征伐する意を表はしたものである。此の時伯夷、叔齊の二兄弟が、武王の馬前に塞がり、武王の馬を駐めて諫めて曰ふのに。公は父西伯が死去せられても未だ葬式をしない、然るに今爰に干たて(戈ほこ)を取つて戦争せらるゝことは、是れ孝と謂ふことが出来るか。又公は賢なりと雖も臣である、紂は暴なりと雖も君である、然るに臣の身を以て君を弑するは、是れ仁と謂ふことが出来るか。公の舉動は、孝で無く仁で無い、宜しく御止めなさいと諫めた。武王の左右の臣

太公望が曰ふのに。これは眞の義士であると。そして助け
 王既滅殷爲天子追尊古公爲太王公季爲王季伯爲文王天下宗
 周伯夷叔齊耻之不食周粟隱於首陽山作歌曰登彼西山兮采其
 矣以暴易暴兮不知其非矣神農虞夏忽焉沒兮我安適歸矣于嗟
 兮命之衰矣遂餓而死

字解

追尊。後から尊號を贈ること。宗周。周を主とする。粟。米也。西山。首陽山なり。薇。和名わらび。以暴易暴。上の暴は武王の暴、下の暴は殷の紂王の暴、伯夷叔齊の心では、武王は賢と雖も臣なり、紂は暴と雖も主なり、然るに武王は臣を以て君なる紂を征伐した、故に暴臣であるとしたのである。つまり武王の暴臣が、殷紂の暴主に代つただけで、武王の行は古聖禪讓の道を滅却した非道であると誹つたのである。不知其非。武王は自らその身の非道なる行をしたことを知らないといふ意。神農。古の炎帝神農氏。虞。古の有虞氏即ち舜帝。夏。古の夏の禹王。皆聖人であつた。適歸。適は行く、歸は歸服。于嗟。于は吁に同じ、嗟の嘆聲。徂。死也。

解釋

武王は既に殷を滅して天子と爲り、曾祖父の古公を追尊して太王と爲り、祖父の公季を王季となし、父の西伯を文王と諡した。これ自分が尊位に居れば、その祖先を追尊するのが禮であるからである。かくて天下は武王を謳歌し、周を主として推戴した。然るに獨り彼の伯夷、叔齊は、周を宗とすることを耻ぢ、從つて周の米は一粒も喰はないで、首陽山に隱遁し、歌を作つて其意を述べた。その歌に曰ふのに、我等は彼の西山に登つて薇を食ふ境遇になつた。これといふのも彼の暴臣の武王が、暴主の紂王に代つて王と爲り、武王自ら其行の非道なることを知らない爲である。今や神農、虞、夏の大聖人は、既に已に死し、其の禪讓の正道は忽焉として、湮歿し、遂に此の君臣爭奪の恨事に逢うたことである。故に我等は何處へ行き、誰に歸服せうぞ。實に適歸する所が無い。さて、我等は既に身の置き所も無いから、今は唯死ぬばかりである。だが、我等が此の境遇に陥つたのも、是れ運命が衰へて、大道の世に遇はなかつた爲めであるから、誰も怨むことは無いと。かくて遂に餓ゑて死んだ。

壽夢後、四君而至闔廬。舉伍員謀國事。員字子胥。人伍奢之子。奢誅而奔吳。以吳兵入郢。吳伐越。闔廬傷而死。子夫差立。子

志復讎。朝夕臥薪中。出入使人呼曰。夫差而忘越人之殺而父邪。周敬王二十六年。夫差敗越于夫椒。越王勾踐以餘兵棲會稽山。請爲。爲妾。子胥言不可。太宰嚭受越賂。說夫差赦越。勾踐反國。懸胸於。即仰膽嘗之。曰。女忘會稽之耻邪。舉國政屬大夫種。而與范蠡治兵。事謀吳。太宰嚭譖子胥。耻謀不用。怨望。夫差乃賜子胥屬鏤之劍。子胥告其家人曰。必樹吾墓。價價可材也。抉吾目懸東門。以觀越兵之滅吳。乃自剄。夫差取其尸。盛以鷗夷。投之江。吳人憐之。立祠江上。命曰胥山。越十年生聚。十年教訓。周元王四年。越伐吳。吳三戰三北。夫差上姑蘇。亦請成於越。范蠡不可。夫差曰。吾無以見子胥。爲幘冒乃死。

字解

而。汝なり。棲會稽山。會稽山は山の名。棲は鳥の止宿する所。今は吳の敗られ、會稽の山に依る。故に鳥の棲を以て喩としたのである。女。汝なり。禮記の註に材爲棺之木也とある。鷗夷。馬の革で製した囊。幘冒。面て之を作り、大さ一尺二寸四方、その角に紐あり、顔に被り、後にて結ぶ。

解釋

吳の國は、壽夢といふ王から四代の君を歴て闔廬に至つた。此の王は伍員といふ人を擢拔して重く用ゐ、之に國政を委せた。さて此の伍員は字を子胥と曰ひ、楚人伍奢の子である。此の伍奢は楚の平王に誅せられたから、子胥は吳に亡命したのである。かくて子胥は吳王に信任せられたから、遂に吳の兵を以て楚の國都鄧に攻め入り、平王の墓を發き、その尸を鞭つて父の讎を復した。その後、吳は越を征伐した。此の戰に吳王闔廬は負傷して死んだから、子の夫差が立つて吳王と爲つた。子胥は又此の夫差に事へた。さて夫差は越を伐つて父の讎を報せんと志し、朝夕薪の中に起臥して身を苦め、且つ臣に命じ出入するたびに、自分に謂はせて曰ふのに、夫差よ、汝は越人が汝の父を殺したのを忘れたかと。これは夫差が自らその復讐心を激勵する爲めであつた。かくて周の敬王の二十六年に、夫差は遂に越を伐つて之を夫椒といふ所で破り、積年の仇を報じた。此の時越王勾踐は、殘兵を以て會稽山に棲み、吳王に歎願して曰ふのに、私は大王の臣と爲り、私の妻は大王の妾に獻するから死を赦して下さい。子胥曰ふのに、越王の此の願は許してはならぬ、越は必ず滅すべき筈であると。然るに太宰の重職に居る嚭といふ者が、越の賄賂を受け、夫差に説き、勸めて越王を赦した。かくて越王勾踐は國へ歸り、苦き膽を座臥する室に懸けて置き、常に仰いで之を嘗め、自らその名を呼んで曰ふのに、勾踐よ、汝會稽の耻辱を忘れたかと。これも勾踐が會稽の耻を雪がんと爲めに、自ら激勵したのである。そして國政を大夫の種といふ者に委せ、自分は范蠡と共に軍事を講じ、唯吳を伐つことのみを工夫した。此の時吳の有様如何と見るに、太宰の嚭は子胥を讒して曰ふのに、彼の子胥は嘗て越を滅せといふた事が採用せられぬを耻ぢ、大王を怨んで居ると。夫差は直に之を信じ、子胥に屬鏤といふ劍を賜ひて切腹を命じた。子胥は切腹に臨み、家人に命じて曰ふのに、必ず我が墓に櫃といふ木を植ゑよ、何となれば此の木は、吳王の屍を入れる棺の材とするところが出来るからと。これは子胥は吳は後に越に滅されることを知つて居たからである。又我が目を忍ぐつて城の東門に懸けて置けよ、我は越が吳を滅すのを見物するからと。かく曰うて自ら首を刎ねて死んだ。夫差は此の事を聞いて大に怒り、子胥の屍を馬の革の囊に入れ、之を江水に投じた。吳の人は、子胥が忠臣ののに殺されたのを憐み、子胥の爲めに祠を江水の上に建て、之を胥山と命じた。さて又越の有様如何と見れば、越王は歸國以來、初の十年間は、人民を生財物を集めることに骨を折り、後の十年間は、人民を教育することに努力し、専ら

十八史略講義

圖準備をした。かくて越は、周の元王の四年に、いよく、吳を征伐した。吳は、
して三敗し、夫差は姑蘇臺に逃げ込んだ。そして往年越王が己に請うた如く、
議を越王に請うた。然し越の謀臣范蠡は承知しなかつた。そこで夫差は嘆
曰ふのに。我は愚にして、昔子胥の言を聽かなかつたから、今此の悲境に陥つたの
である。故に我は何の面目あつて子胥を見ることが出来ようか、死んでも子胥を
見ることが出来ない。そこで頓冒を作つて之を被り顔を隠して自殺した。因
に臥薪嘗膽や、會稽の耻を雪ぐの熟語は、こゝが出所である。

越既滅吳。范蠡去之。遺大夫種書曰。越王爲人。長頸烏喙。可與共患難。
不可與共安樂。子何不去。種稱疾不朝。或讒種。且作亂。賜劍死。范蠡裝
其輕寶珠玉。與私從乘舟江湖。浮海出齊。變姓名。自謂鴟夷子皮。父子
治產。至數十萬。齊人聞其賢。以爲相。蠡喟然曰。居家致千金。居官致卿
相。此布衣之極也。久受尊名不祥。乃歸相印。盡散其材。懷重寶間行。止
於陶。自謂陶朱公。貲累鉅萬。魯人猗頓往問術焉。蠡曰。畜五特。乃大畜
牛羊。於猗氏。十年間。貲擬王公。故天下富者稱陶朱猗頓。

字解

長頸。長い首。烏喙。鳥の如く尖つたる口。裝。裹むなり。齋すなり。
寶持つて行くこと。の出来る小い寶物。珠玉。珠は海に産する玉。玉は山に産する
玉。喟然。歎息する貌。布衣。無位無官賤しき者。間行。潜行なり。人に知ら
い様に密に行くこと。貲。財産。特。牝なり。

解釋

越は既に范蠡の力によつて吳を滅した。然し范蠡は永く越に居るべから
ざるを知り、遂に越の朝を去つた。此の時大夫の種に手紙を送つて曰ふのに。我
れつらく、越王の人相を見るに、長頸にして烏喙である。凡そ此の様な人相の人
は與に艱難を共にすることが出来るが、共に安樂を共にすることは出来ない者で
ある。今や越は既に吳を滅して艱難を去り、安樂の時代と爲つた。故に君はなほ
早く越を去らないのか、早く去りなさいと。依て種は病氣を口實として、
なかつた。此の時或る人が種を讒して曰ふのに。種は將に叛亂を起さん
て居ると。越王之を信じ、種に劍を賜うて切腹を命じた。果して越王は安樂
にすることが出来ない人である。范蠡はいよく、その輕寶珠玉を
り、從僕と共に船で江や湖を渡り、それから海に出て齊の國へ行
ら鴟夷子皮と云うた。そしてその子と共に産を治めて富を蓄へ

致した。此の時齊國の人は、范蠡の賢者であることを聞き、稱して宰相と爲つては宰相の高官に居る。これ布衣の人の極で、是れ以上の榮身久しく此の尊名榮譽を受けると、遂に不吉の事があると。そこで宰相の職を退き、出で、間行して陶といふ所へ行き、自ら陶朱公と曰うて、そこに住居した。范蠡は資産を作る術に妙を得たと見え、陶でも鉅萬の財産を作つた。時に魯國の猗頓といふ人が范蠡を訪ね、資産を作る手段を問うた。蠡は、五匹の牝牛を畜養せよと答へた。これは牝は子を産み、それが段々繁殖して金になるからである。そこで猗頓は大に牛や羊を自分の家に畜養した。果して資産が出来、十年の間に、王公にくらべる程の富を致した。故に當時天下の人が、富豪を謂へば、必ず陶朱猗頓の二氏を稱した。

定公立。以孔子爲中都宰。一年四方皆則之。由中都爲司空。進爲大司

寇相。定公會齊侯于夾谷。孔子曰。有文事者必有武備。請具左右司馬。以從。既會。齊有司請奏四方之樂。於是旌旄劍戟鼓譟而至。孔子趨而進曰。吾兩君爲好。夷狄之樂。何爲於此。齊景公心怍。麾之。齊有司請奏宮中之樂。優倡侏儒戲而前。孔子趨而進曰。匹夫熒惑諸侯者。罪當誅。請命有司。加法焉。首足異處。景公懼。歸語其臣曰。魯以君子之道輔其君。而子獨以夷狄之道教寡人。於是齊人乃歸。所侵魯郟汶陽龜陰之地。以謝魯。

字解 中都宰。中都は色の名宰は長。司空。注に官掌邦土居四民時地利。大司馬。注に官掌邦禁詰衆。刑暴亂とある。今の我が國の司法大臣の如き者。相。夙副に相儻也。贊君之禮者とある。即ち君が賓客に接見する時、君の側に居つて君を輔佐すること。四方之樂。孔子の所謂夷狄の樂である。史記齊の世家に、景公與魯定公好會夾谷。鞞銀曰。禮而後請合萊人爲樂。因執魯君可得志とある。註に、萊人齊所滅萊夷也。禹貢に、萊夷作牧とある。即ち此の萊夷は、青州に居る夷族で、牧畜を業とした。州は今山東省である。故に四方の樂とは、夷族の萊人のする樂で、

州は今山東省である。故に四方の樂とは、夷族の萊人のする樂で、

つて舞ふのである。然らば齊侯は何故に犂鉏の言を聴き魯公の前で
狄の樂を舞せたかといへば之は此の樂は劍戟を以て舞ふのであるから之に
魯公を捕へ己の患を除かんとしたのである。齊の世家に景公害孔丘相魯懼其朝
故從犂鉏之計とある。旗龍や虎を畫きたる旄。旄牛の尾を杆頭につけたる旄。
戟。刃に兩の枝のある兵器ほこ。趨。早走にて行くこと。之は君長の前を通る時の
禮である。怍。愧也。麾。退ると。優。倡。女樂なり女樂は史記孔子世家に選國中女
子好者八十人皆衣文衣而舞康樂陳子樂文馬於魯城南高門外とある故に優倡とは
今の女優の如き者が踊ると。侏儒。種々の滑稽を演じて人を笑はせる藝人。前
進也。熒惑迷ひ亂す。首足異處。殺して首や足を別々に斬り離すと。此の會合
の時は實際に斬つたので孔子世家に此の時の事を書いて孔子趨而進曰匹夫而熒
惑諸侯者罪當誅請命有司有司加法焉手足異處景公懼而動とある。又齊の世家に
も使有司執萊人斬之以禮讓景公とある。魯以君子輔其君。孔子が魯君を輔佐し
たことを指す。以夷狄之道教寡人。齊の臣が四方の樂宮中の樂を演じて孔子に
叱責せられたことを指す。

解釋 定公は立つて魯王と爲り孔子を以て中朝の宰と爲した。とあるが此の

施政が立派であつた爲めに僅か一ヶ年にして四方の諸侯は皆その施政を平本と
した。それから中都の宰から轉じて司空と爲り更に進んで大司寇と爲つた。
孔子は嘗て定公を輔佐して齊の景公と夾谷といふ所で會合した。此の會合は名
は修交であるが實は齊は魯君を虜にせんとする策略であつたのである。此の時
孔子は定公に謂うて曰ふのに。凡そ文事があれば必ず武備があり武備があれば
必ず文事がある。今日は修交の會即ち文の會合であるが亦武も用意せねばならぬ。
願くは左司馬右司馬の武官を從へて行きたいものであると。之を連れて行つた。
さていよいよ齊侯と會見した。齊の役人は齊侯に四方の樂を奏せんことを請うて
其の許可を得た。そこで樂人は各旄旌劍戟を持ち大鼓をたゞきがや／＼と謀さ
立て、やつて來た。孔子は之を見て趨り進んで曰ふのに。今日は吾が齊魯兩君
が好を修むる爲めの會合である然るに何故に穢はしき夷狄の樂を爲すことであ
るか無禮千萬であると論じた。齊の景公は之を見て心中大に懼れ、之を退
けて止めさせた。齊の役人は又齊侯に宮中の樂を奏せんことを請うて其の許可
を得た。そこで優倡は淫靡の踊を爲し侏儒は滑稽を演じつゝ出て來た。孔子は
又趨り進んで曰ふに。下賤輩が諸侯を熒惑するとその罪は死刑に當る。今此の

優倡等は我が齊魯兩君を熒惑するものであるから、宜しく役人に命じて、
ばならぬと。そして立るに之を殺した。景公は之を見て孔子の勇ましく、
れ、遂に魯君を虜にすることが出来なかつた。かくて夾谷の會は、
畢りを告げた。さて諸侯は歸つてから、臣下を叱して曰ふのには、魯は君子の道を
以てその君を輔佐して居る。然るに汝等は、獨り專横の道を行ひ、我に對して
かゝせた。實に残念である。是れから齊は魯を懼れ、孔の苦心を憐れ、魯に對して
て侵略した魯の鄆、汶陽、龜陰の地を魯に返し、虜夾谷の多で、四方の樂、
じた無禮を謝した。

老子者楚苦縣人也。姓李名耳。字伯陽。又曰字聃。爲周守藏吏。孔子問
焉。老子告之曰。良賈深藏若虛。君子盛德容貌若愚。孔子去。謂弟子曰。
鳥吾知其能飛。魚吾知其能游。獸吾知其能走。走者可以爲網。游者可以
以爲綸。飛者可以爲矰。至於龍吾不能知其乘風雲而上天也。今見老
子。其猶龍乎。

字解 守藏吏。米穀の出納を掌る役人。良賈。良き商店。賈は店舖を構へて物
を賣ること。游。泳也。およぐ。綸。魚を釣るに用ゐる繩。即ち釣をする事。矰。
絲を矢の先に繋ぎ、それを射て鳥を捕へること。

解釋 老子は楚國の苦縣の人で、姓は李、名は耳、字は伯陽、又の字を聃と稱し、
へて守藏の吏と爲つたことがある。孔子は嘗て禮を老子に問うた。老子は之に
告げて曰ふのには、良き商店は、その品物を深く貯藏してあるから、一見すると空虛
の如く見え、有道の君子は盛んなる徳があつても、之を衒はないから、その容貌は愚
鈍の如く見えるものである。これは老子が、その學說なる虚無を説いたもので
ある。孔子は去つて門人に謂うて曰ふのには、彼の鳥は吾はその能く空中を飛ぶ
ものであることを知り、魚は吾れ能くその水中を泳ぐものであることを知り、獸は
吾れ能くその原野を走るものであることを知つて居る。而して走る獸は網
て捕へることが出来ることを知つて居る。獨り彼の龍に至つては吾れ之を知るこ
出来ない。何となれば彼は出沒變化の自在を得、風雲に乗じて天に上り、變
ことが出来ない。今我れ老子を見るに、それ猶ほ龍の如く、その學徳

ることは、到底測り知ることが出来ないこと。かく曰うて深く嘆稱し、

戦國時、子思居於衛、言苟變、可將衛侯、曰、變嘗爲吏賦於民、食人一

子、故弗用。子思曰、聖人用人、猶匠之用木、取其所長、棄其所短、故

連抱而有數尺之朽、良工不棄。今君處戰國之世、而以二卵弃干城之

將、此不可使聞於隣國也。衛侯言計非是、而群臣和者如出一口。子思

曰、君之國事將日非。君出言自以爲是、而卿大夫莫敢矯其非。卿大夫

出計自以爲是、而士庶人莫敢矯其非。詩曰、具曰予聖、誰知鳥之雌雄。

字解 戰國、周の威烈王以後の世を云。子思、孔子の孫。所長、長い所即ち長

所。所短、人の過失を指して短といふ、悪い所、即ち短所。杞梓、共に木の名、良材

なり。連抱、一かゝへ。干城之將、干はたてといふ武器、城はしろ、皆外を

を衛る守禦の義、これから國家に大切なる將を干城の將といふ。如出一口、

ば百人の臣が皆口を揃へて、左様でござる、左様でござると曰へば、その言の出つる

口は異つて居ても、其言ふ詞が同じだから、丁度一人が言ふと同じである、故に如出

一口と謂ふ。

解釋 戰國の時、子思は衛國に居つた。そして衛君に謂うて曰ふのには、苟變とい

ふ人は大將の器があるから用ゐなされと。衛侯が曰ふのには、如何にも苟變は大

將の器がある、然し彼は吏と爲つた時に人民に賦課し、一人から二個づゝの鶏卵を

徵收して食うたことがある、彼はかゝる品性の卑しい者であるから用ゐられない

と。子思が曰ふのには、聖人が人を用ゐるのは、猶大工が材木を用ゐると同じく、その

悪い所を棄て、善い所を取つて用ゐるのである。故に杞や梓の良材にして、しか

も連抱の大であれば、縱令數尺の朽があつても、良い大工は棄てないのである。何

となればその良い所を取つて用ゐるからである。今君は戰國の世に處し、大に人

傑の必要ある秋に係らず、僅か二卵を徵收した位の些少の疵を以て、此の干城の將

を棄て、用ゐないのは、實に遺憾の極で、これは隣國へ聞えしめてはならぬ、若し聞

えたならば、衛國の耻辱である。かく曰うて諫めた。又當時衛國の有様は、衛君

が謀を工夫し、それが悪計であつても、群臣は誰れも諫めない。皆口を揃へて、左様

御尤と曰ひ、それが恰も一人の口から出る様であつた。子思は之を見て、衛君に謂

うて曰ふには、君の國政は日々に非ならんとして居る。何となれば君が言を出し

て自ら以て是なりとせば、縦令其言が非なりと、卿や大夫は敢て諫めて矯正しない。又卿大夫が言を出し、自ら以て是なりとせば、士や人民はそれが非であつても又諫めない。詩經の小雅正月の篇に、人皆自ら聖人なりと思へば、その是非を識別することが出来ない、丁度鳥の雌雄が相似て、何れか雌、何れか雄なるかを辨ずることが出来ないと同じである。今衛國の有様も此の詩の通りで、君臣各々自ら聖としてその非を知らずに居る、是れ國政の日に非なる所以である、と諫めた。

管仲字夷吾。嘗與鮑叔賈分利多。自與鮑叔不以爲貪。知仲貧也。嘗謀事窮困。鮑叔不以爲愚。知時有利不利也。言三戰三走。鮑叔不以爲怯。知仲有老母也。仲曰。生我者父母。知我者鮑子也。桓公九合諸侯。一匡天下。皆仲之謀。一則仲父。二則仲父。

字解 賈、あきなひ。九合、何べんも會合させたこと。一匡、統一して正す。論語の注に、桓公が周室

を尊び、夷狄を攘つたことは、皆天下を正す所以である。仲父、父は文王が太公望を尊んで師尙父と云うた父と同じく、父として尊敬するの意、仲は名故にその名を配して仲父と云うたのである。

解釋 管仲は字を夷吾と云うた。嘗て親友の鮑叔牙と共に商をした。而して其の利益を分配する時に、管仲は自ら多く取つた。然るに鮑叔は管仲を以て貪慾な人と思はなかつた。これは管仲がその當時貧乏であることを知つて居たからである。又管仲は嘗て鮑叔と共に或る一事業を企て、失敗し、非常に困難に陥つた。この時も鮑叔は管仲を愚鈍な人と思はなかつた。これはその事を爲す時に、(利運)と不利(不運)とがあることを和つて居たからである。又管仲は三度戦争して三度も敗走した。然るに鮑叔は又管仲を以て臆病な人と思はなかつた。これは管仲に老母があつて、管仲が戦死すると、誰れも養ふ人が無い、故に管仲が討死しなかつたのは、母を養ふ孝心の爲であることを知つて居たからである。かく鮑叔は友誼に厚く、且つよく管仲の心を知つて居たから、管仲も深くその情誼に感じて、日ふのには、我を生んでくれた者は父母で、我を知つてくれた者は唯鮑叔の一人、子に尊敬の辭である。さて又管仲は鮑叔の推薦によつて齊の公を補佐して天下の覇者とした。故に桓公が諸侯を九合して天下を統一した。

業は、皆管仲補佐の力であつた。されば桓公も深く管仲に信頼し、一も二も、即事につけても、仲父仲父と曰うて敬重した。因に管鮑の交といふ熟語の出處、
である。

晏子名嬰。字平仲。以節儉力行。重於齊。一狐裘三十年。豚肩不掩豆。齊國之士。待以舉火者七十餘家。晏子出。其御之妻。從門間窺。其夫擁大蓋。策駟馬。意氣揚々。自得既而歸。妻請去。曰。晏子身相齊國。名顯諸侯。觀其志。嘗有以自下。子爲人僕。御自以爲足。妾是以求去也。御者乃自抑損。晏子怪而問之。以實對。薦爲大夫。

字解 狐裘。狐の皮で作つた着物。これは大夫の服である。豚肩。豕の肩の肉。豆。祭に用ゐる器。擁。中井履軒の説に、擁は車蓋の側に居ることであると。大蓋。履軒曰く、車蓋なりと。車蓋とは、車の上を被ふ母衣。駟馬。四頭立の馬車。意氣。こゝろもち。揚揚。自得の意とは自ら宰相の御者であることが如何にも満足で、之を人に誇る風があること。

解釋 齊の晏子は名は嬰、字を平仲と謂ひ、節儉にして奢らず、力行して怠らざるを

以て齊國に重用せられた。今その節儉の一例を言へば、一枚の狐裘を三十年間着、又祭に供へる豚肩も、豆を掩ふことが出来ない程小さいものを用ゐた。かく自ら儉素なるに係はらず、人には仁惠を施したから、齊國の士で、その助けに依て火を挙げ、生活して居る者が七十餘家もあつた。晏子が嘗て外出した。此の時その御者の妻は、門の隙間から之をのぞき見た。ところが、自分の夫は大蓋を擁し、駟馬に鞭ち、意氣揚々として自得し、如何にも我は宰相の御者なりと云ふ顔をして居た。既にして御者が家に歸つた、その妻は突然離縁を請うて曰ふのには、御主人の晏子は齊國の宰相で、その名聲は諸侯に顯はれて居る立派な方である。然し妾は竊かに、その志す所を觀るに、嘗てこれまで驕慢の態無く、反て自ら人に下る風がある。然るに子は人の僕御たる卑しき身分に係はらず、猶之を以て得意として人に誇つて居る。これが妾が離別を請ふ所以であると。そこで御者もその言に感じ、それから以後は勉めて驕慢の心を抑へ改めた。晏子は御者の態度が急に變つたのを見て、之を怪み、そのわけを尋ねた。御者は妻から忠告せられた事實を殘らず話した。晏子は大に感じ、遂に此の御者を大夫に推薦した。晏子はかく人を容れる雅量あつた。

威王與魏、惠王會田于郊。惠王曰：齊有寶乎？王曰：無有。惠王曰：寡人國雖小，猶有徑寸之珠，照車前後各十二乘者十枚。威王曰：寡人之寶與王異。吾臣有檀子者，使守南城。楚不敢爲寇，泗上十二諸侯皆來朝。有盼子者，使守高唐。趙人不敢東漁於河。有黔夫者，使守徐州。則燕人祭此門，趙人祭西門。有種首者，使備盜賊，道不拾遺。此四臣者，將照千里。豈特十二乘哉？惠王有慚色。

字解 郊。城外之地。田。畝に同じ、獵をすること。乘。臺に同じ、昔戰車を數へる時には乘というた。枚。玉を數へる時は枚と云ふ、個に同じ。盼。音班。盼の字に作るべし。

解釋 齊の威王は魏の惠王と城外の地に會合して共に獵をした。此の時惠王が曰ふのには、齊國には寶がありませんかと。威王が曰ふのに、無いと。惠王が曰ふのに、私の國は小國であるが財がある。それは直徑一寸の珠で、その光は戰車の前後十二臺即ち二十四臺を照らす光力があるので、然もそれが十個あると、得意になつて自慢した。威王が曰ふのに、私の寶は王の寶とは異つて居る。私の臣に檀子と

いふ者があり、私は之をして南城といふ所を守らせた。ところが楚人は大に懼れ、敢て私の泗水の附近を寇せず、且つその方面に居る十二國の諸侯も、皆私の朝へ來る様になつた。又盼子といふ者があり、私は之に高唐を守らせたところが、趙人は懼れて敢て東の方河水に來て漁をしなくなつた。又黔夫といふ者があり、私は之をして徐州を守らせた處が、燕の人は懼れて私の北の門で祭をし、趙の人も亦懼れて私の西の門で祭をし、共に私の征伐が無い様にと祈つたことである。又種首といふ者があり、私は之をして、盜賊の取締を命じたところが、遂に道路の遺失物も、拾ふ人が無くなつた。此の四人は實に私の寶で、その威力は將に千里の遠きを照さんとして居る。番に車の前後十二乘位では無いと。惠王は之を聞いて頗る驚き入る色があつた。

靖郭君田嬰者、宣王之庶弟也。封於薛。有子曰文。食客數千人。名聲聞於諸侯。號爲孟嘗君。秦昭王聞其賢，乃先納質於齊。以求見。至則止囚。欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姬，求解。姬曰：願得君狐白裘，蓋孟嘗君嘗以獻昭王。無他裘矣。客有能爲狗盜者，入秦藏中，取裘以獻。姬始得

言得釋。即馳去。變姓名。夜半至函谷關。關法雞鳴方出客。恐秦王後悔。追之。客有能為雞鳴者。雞盡鳴。遂發傳。出食頃。追者果至而不及。孟嘗君歸。怨秦。與韓魏伐之。入函谷關。秦割城以和。

字解

靖郭君田嬰。靖郭君は田嬰の諡。田は姓。嬰は名。庶弟。腹異ひの弟。食客。客と爲りて飯を食うて居る人。幸姫。師古云ふ。姫者周之姓。貴於諸國之女。故婦人美號皆稱姫。後因總謂衆妾爲姫と。故に幸姫は王の氣に入りし妾。○狐白裘。狐の腋下にある白い毛を集めて作つた着物。これは美麗にして得難い貴重な着物である。發傳。説文に傳遽也とある。遽は驛遞よりつぎたつる車馬人夫。驛遞はしゆくつぎ又禮記玉藻に士曰傳遽之臣。その註に驛傳車馬所以供急遽之令士賤而給役使。故自稱如此とある。故に傳は車馬人夫や旅客で發は關所で許して出發させること。食頃。飯を食ふ間といふことにてしばらくの意。

解釋

靖郭君田嬰は齊の宣王の庶弟で、薛に封せられ文といふ子があつた。此の文は食客が好きで常に數千人を養ひ、その名聲は諸侯の間に鳴り響き、號して孟嘗君と曰うた。秦の昭王は孟嘗君の賢なることを聞き、先づ自ら人質を送つて會見

を申し込んだ。この人質を送ることは、當時は戰國の世で、人々は萬事に疑心を懷いて居たから、苟も他人を招かんとするには、先づ自ら己の骨肉の人を人質として先方へ送り、以て自分に貳心無きを示さなければならなかつたのである。此の理由で今昭王も人質を孟嘗君に送り、以て自分の貳心無きことを保證したのである。然し昭王の此の人質は孟嘗君を欺く手段であつたのである。さて孟嘗君は昭王の人質を得て之を信じ、秦へ行つた。ところが昭王は非道にも孟嘗君を捕へて之を殺さんとした。そこで孟嘗君は人を昭王の幸姫の處へ遣り、幸姫に己れの囚を解くことの運動をして貰ひたいと頼んだ。姫が曰ふのには妾は願くは君が秘藏せる狐白裘をもらひたい、さうすると運動をしてやると。然し此の狐白裘は孟嘗君がさきに昭王に献じてしまつたので、他の狐白裘があるべき筈なく、大に困つた。此の時孟嘗君の食客中に能く狗のまねをして盜を爲す者があり、それが秦の宮中に忍び入り、先に献じた狐白裘を盗んで來たから、孟嘗君は之を幸姫に献じた。幸姫は大に喜び、約束の通り昭王に説いたから、孟嘗君は遂に釋された。そこで孟嘗君は姓名を變じ、急遽秦を去り、夜半に函谷關迄逃げて來た。この關所の規程が鳴くと旅客を通すのであつた。故に孟嘗君は直ぐに通ることが出來ず、

つた。且つ孟嘗君は、秦王が後で自分を釋したことを悔い、追捕の吏を殺し、いかと心配して居たから、猶さら困まつた。この時又食客中に能く鶏の鳴きする者があり、その人が鳴いたところが、關所の雞は皆鳴いた。依て關吏は國をいて車馬旅客を通した。かくて孟嘗君は危難を免れて關を出たが、出て暫くすると、果して秦の追捕の吏が來た。孟嘗君は國へ歸つてから深く秦王を怨み、韓魏の二國と共に秦を征伐し、進んで函谷關を打ち破つた。秦王は大に恐れ、郿城を割讓して和を講じた。因に雞鳴狗盜の雄といふ熟語は、こゝが出所である。

馮驩聞孟嘗君好客而來見。置傳舍十日。彈劍作歌曰。長鋏歸來乎。食無魚。遷之。幸舍。食有魚矣。又歌曰。長鋏歸來乎。出無輿。遷之。代舍。出有輿矣。又歌曰。長鋏歸來乎。無以爲家。孟嘗君不悅。時邑入不足以奉客。使人出錢於薛。貸者多不能與息。孟嘗君乃進驩請責之。驩往不能與者。取其卷燒之。孟嘗君怒。驩曰。令薛民親君。孟嘗君竟爲薛公。終於薛。

字解 傳舍。幸舍。代舍。上中下三等の食客を置く家の名。即ち傳舍は下客幸舍は中客代舍は上客の居る所。長鋏。鋏は劍を把る所つか、但し、これは單に長劍といふ意。歸來乎。カヘランカと訓む。食無魚。列子傳に、孟嘗君廚有三別。上客食肉。中客食魚。下客食菜とある。故に傳舍に居る下客には魚が無いのである。輿。車なり。貸。地得切音得借也。周禮地官泉府に、凡民之貸者與其有司辨而授之とある。與息。史記の註に與猶還也。息猶利也とある。券。錢を借りた證文。

解釋 馮驩といふ人は、孟嘗君が食客を好むことを聞き、齊に來て孟嘗君を訪ねた。そこで孟嘗君は、先づ傳舍へ入れ下客として取扱うた。馮驩は之を不満足に思ひ傳舍に居ること十日にして、その帶ぶる所の長劍を叩き、歌うて曰ふのには長劍よ歸らうか、茲は食事に魚が無いからと。そこで孟嘗君は之を中客として幸舍へ遷し

た。此の幸舍には食事に魚がある。馮驩はまだ之を不満足として、又歌うて曰ふのには長劍よ歸らうか、ここには外出するに車が無いからと。孟嘗君は又上客として代舍へ遷した。此の代舍には車がある、然るに馮驩は尙不満足として歌うて曰ふのには長劍よ歸らうか、ここは家を持つて生計を營むことが出來ないからと。孟嘗君は之を聞いて馮驩の我儘を惡み、甚だ喜ばなかつた。當時孟嘗君は領地は薛で、その収入だけでは、食客を養ふに不充分であつた。そこで孟嘗君は、人々倉庫から金銀を出し、之を薛の人民に貸させた、そしてその利息を取つて

ふ財源とした。然るに錢を借りた人は貧乏で、元金は勿論利息も拂はな
ら、孟嘗君は大に之を憂へた。そこで馮驩に、薛に行き利息を替貸徴収して、
頼んだ。馮驩は之を承諾して薛へ行き、薛の民を集めた。そして實際に貧乏で利
息を拂ふことが出来ぬ人からは、その證文を取り上げ、即ち之を焼き棄てた。さ
して馮驩の行爲は孟嘗君の使命と大に反したから、孟嘗君は大に怒つた。然し馮驩
は自若として曰ふのには私がかく證文を焼いたのは、薛の民をして、君の仁恵に悦
服し、君を親愛させしめんが爲である。是に於て孟嘗君は始めて馮驩の遠慮に

感服した。かくて孟嘗君は薛侯と爲つて薛の民に尊敬せられ、遂に薛で死んだ。
簡子有臣曰周舍死簡子每聽朝不悅曰千羊之皮不如一狐之腋
大夫朝徒聞唯々不聞周舍之鄂々也簡子長子曰伯魯幼曰無恤
訓戒之辭於二簡以授二子曰謹識之三年而問之伯魯不能舉其辭
求其簡已失之矣無恤誦其辭甚習求其簡出諸懷中而奏之於是立
無恤爲後簡子使尹鐸爲晉陽請曰以爲繭絲乎以爲保障乎簡子曰
保障哉尹鐸損其戶數簡子謂無恤曰晉國有難必以晉陽爲歸簡子
卒無恤立是爲襄子智伯求地於韓魏皆與之求於趙不與率韓魏之

甲以攻趙襄子出走晉陽三家圍而灌之城不浸者三板沈竈產鼃民
無叛意襄子陰與韓魏約共敗智伯滅知氏而分其地

字解 千羊之皮不如一狐之腋。千匹の羊の皮も唯一匹の狐の腋下にある白毛に

は及ばない。これは簡子が澤山の臣があつても皆凡庸で、一人の周舍に及ばな
いことに喩へて言うたのである。唯唯。はい／＼と曰つて唯人の意に従ふこと
ち何等の意見もなく、唯人の説に盲従すること。鄂々。唯唯。
述べ、直言して憚らざること。簡。竹のふだ。繭。繭の糸。
た。爲。オサムと訓す、治也。繭絲。賦税に喩へた。
ら絶えず租税を取り立つること。保障。藩。藩の。
しめ、民をして君の爲めならば、一命をも惜
護するが如く、一旦緩急の際、民をして君
簡子は當時晋國の卿であつた、初め趙
仕へ、子孫世々晋の卿と爲りて備
子より三代目の籍といふ人
難、兵亂のこと、簡子は既に

姓は知名は瑤、晋の卿、世々威烈王の命を以て諸侯と爲に三板は六尺。沈竈産竈。沈竈火を燃く所なり、今此のかまどに蚌産を言うたものである。無叛意。尹鐸が

解釋

趙の簡子の家臣に周舎といふ人がつたが不幸にして死んだ。さて此の周舎が臣も無かつた。依て簡子は朝に出て政を聴く皮は一狐の腋に如かざる如く、多くの大夫があつた。今や我が諸大夫の朝に臨む者は、唯我が意に盲従し、我のみで、彼の周舎が鄂々として諫争した様な直言を聞かないと、かく曰うて歎息した。簡子の長子を伯魯と曰ひ、次子は無恤と曰うた。嘗て簡子は、訓戒の辭を簡に書き、之を二子に授けて曰ふには、汝等はよく之を記臆して忘れるなよと。それから三年を経て、之を尋ねたところが、兄の伯魯は既に忘れてその辭を讀むことが出来なかつた、且つその授けた簡を尋ねたところが、之れも既に失つてしまつた。然

し弟の無恤は之に反し、その辭をばすらくとよく讀み、その簡を求めたところが、之を懷の中から出して進めた。かく無恤は利口であつたから、簡子は此の無恤を以て後嗣と定めた。その後簡子は尹鐸といふ家臣をして、晋陽といふ領地を統治させた。そこで尹鐸は赴任する前に、簡子に請うて曰ふには、晋陽を以て繭絲の國となし、専ら賦税の徴收に力むべきか、或は保障の國とし、君が萬一の場合に、一身を託する國としようかと。簡子が曰ふのには、それは固より保障の國とせねばならぬと。さて尹鐸は既に晋陽に至り、その戸數を減じた。これは戸數が減ずると、民は租税が軽くなつて豊になり、従て簡子の仁澤を喜び、所謂保障の國となるからである。かくして尹鐸は仁政を施したから、晋陽の民は皆簡子の爲めに死せんことを願ふ様になつた。簡子は此の有様を見て無恤に謂うて曰ふには、他日若し晋國に兵亂が起り、我が趙が侵略を受けた時には、必ず晋陽の地に籠城し、こゝを以て托命の地とせよと。簡子が死んで無恤が立ち、これを襄子と爲した。此の頃、晋の卿に智伯といふ者があり、頗る亂暴であつた。即ち同じ卿の韓魏の二家に向ひ、土地の割讓を迫つた。二家はその威を恐れ、之に土地を與へた。智伯は又趙に求めた。然し趙は與へなかつたから、知氏は韓魏二家の兵を率ゐて趙を攻めた。そこで襄

一
三
八

子は父簡子の言に従ひ、晋陽に走つた。かくて智伯韓魏の三家の兵は晋陽を圍み、之に水を灌いで水攻にした。晋陽の城は水に浸らない所は僅に六尺で、竈には蛙が生れる程で、實に長い間水攻にせられた。然し晋陽の民は毫も襄子に叛く氣色は無く、益勇氣を出して趙氏の爲めに盡した。かくする内に、襄子は陰かに韓と約して共に智伯を敗り、遂に知氏を滅してその領土を分割した。

襄子漆知伯之頭、以爲飲器。知伯之臣豫讓欲爲之報仇、乃詐爲刑人、挾匕首入襄子宮中塗廁。襄子如廁、心動、索之、獲讓。問曰：子不嘗事范中行氏乎？知伯滅之、子不爲報讎、反委質於知伯。知伯死、子獨何爲報仇之深也？曰：范中行氏衆人遇我、我故衆人報之。知伯國士遇我、我故國士報之。襄子曰：義士也。舍之、謹避而已。讓漆身爲厲、吞炭爲啞、行乞於市、其妻不識也。其友識之、曰：以子之才、臣事趙孟、必得近幸。子乃爲所欲爲、顧不易邪？何乃自苦如此？讓曰：不可。既委質爲臣、又求殺之、是二心也。凡吾所爲者、極難耳。然所以爲此者、將以愧天下後世爲人臣懷二心者也。襄子出、讓伏橋下。襄子馬驚、索之、得讓、遂殺之。

【字解】飲器。史記索隱に、案大宛傳云、匈奴破月支王、以其頭爲飲器。裴氏註云、飲器、棹也。棹、榼也。所以盛酒耳。非用飲者。又正義に、酒器也。每賓會、設之、示恨深也。とある。

綱鑑の註に、飲器、溲便也。小便器、蓋似之、或謂飲酒器、但死骨、凶穢、又惡人之頭、豈俎豆所宜乎とある。中井履軒曰く、用頭爲飲器者、猶菹醢、食之意矣。所以泄憤、然虎子說當蓋用虎子、仰置之、入溺、小便于其口、則內廣善飲、溺故曰飲器也。とある。虎子は便器のこととて、西京雜記に、漢朝以玉爲虎子、以爲便器とある。按ずるに、飲器には、酒器と便器の二説あるが、余は便器の説に従ふ。匕首、短刀。范中行氏、范氏と中行氏、其晋の卿。衆人、普通の人の意。國士、名聲一國を蓋ふ者、即ち見識節操共に高國人、仰いで師表とすべき人。厲、癩病なり。凡そ漆には毒有り、之に近けば瘡腫を病み、癩病の如くなる。炭、すみ。爲啞、その音聲を變ずること。梁玉、く、下文豫讓與其友相問答、則不可言啞、當依策作吞炭、以變其音爲是とある。委質は質なり、に、儀禮の士冠禮に、奠贄見於君と。又孟子萬章下に、庶人不傳質とある。或は曰く、質は體なり、その體を委任して以て君に事へるのであるとす。趙孟、趙氏は世々趙孟と稱せり、猶ほ知氏が世々知伯と稱せるが如し。

解釋

襄子は智伯の頭に漆を塗つて便器と爲し、以てその憤恨を泄した。智伯の

臣豫讓は爲めに仇を報いんと欲し、乃ち詐つて罪人と爲り、短刀を懐にして襄子の宮中に入り、便所の壁を塗つて居て襄子を狙つた。或る日襄子は、便所に入ったところが、何となく胸騒ぎがしたから、怪んでその附近を搜索して豫讓を捕へた。そこで襄子自ら詰問して曰ふのには、汝は嘗て范氏と中行氏とに事へたが、何れも而してその范氏も中行氏も、共に智伯に滅されたのに係はらず、汝は之が爲めに仇を報ずることをせずして、反て仇なる智伯の臣となり、且つ智伯が死した爲めに、獨り智伯の爲めにのみ仇を報ずること、かく迄深いのは何故であるか。豫讓が曰ふのには、彼の范氏や中行氏は、普通の人と同じき禮を以て我を待遇した故に、我も亦普通の人の所爲を以て之に報いたのである。然るに獨り智伯に至つては國士の禮を以て我を待遇した故に、我も亦國士の道を以て之に報せんとするのである。と。襄子は之を聞いて左右の臣に謂つて曰ふのには、此の人は義士であるから釋せよ、我は謹んで報復せられぬ様に避けて居ようと。さて豫讓は赦されたが、飽く迄仇を報せんと欲し、身に漆を塗つて癩病の如くなり、又炭を吞んで聲を變へた。これはその豫讓であることを大に知られない様にする爲めである、かくて豫讓は市に行つて乞食となつたが、その容貌の餘り變つた爲めに、その妻でもその夫であることを識別することが出来なかつた。唯獨りその友人が識つて豫讓に謂うて曰ふのには、君の才智を以て彼の趙氏に事へたならば、必ず重用せられて側に近寄ることが出来るだらう。君は此の機會に於て、その目的なる襄子を殺すことを爲し、假らば、それこそ反て容易では無いか、然るに君は此の手段を取らず、何故にかく自ら身を苦めることであるか、君の爲す所は實に拙策であると。豫讓が曰ふのには、それはいけない、何となれば既に質を委して臣と爲り、又ぞろその君を殺さんとするは、これ二心を抱くものである。凡そ我が爲す所は至て難事である、然し我は天下後世の人で、苟も臣と爲つて二心を抱く者を、愧ぢしめてやりたいのである、即ち天下後世の爲めに、人臣たる者の範を示さんとするのであると。その後襄子は外出した。是より先豫讓は豫てから或る橋の下に隠れ、襄子の通過を待つて居た、かくて襄子はその橋を渡らんとしたが、乗馬が急に跳つて行かなかつた。襄子は之を異み、その附近を索して豫讓を得、遂に之を殺した。

惠文王嘗得楚和氏璧、秦昭王請以十五城易之、欲不與、畏秦強、欲與、恐見欺、藺相如願奉璧往、城不入、則臣請完璧而歸、既至秦王、無意償

城。相如乃給取璧。怒髮指冠。卻立柱下。曰。臣頭與璧俱碎。遣從者懷璧。間行先歸。身待命於秦。秦昭王賢而歸之。

五四

字解

和氏璧。楚人卞和といふ者が、荆山で發見した玉。韓非子に、楚人卞和得玉璞於荆山。奉獻厲王。王使玉人相之。曰石也。王以爲和詐。別其左足。武王即位。和又獻之。王使玉人相之。又曰石也。別其右足。文王即位。和抱璞哭於荆山。三日夜泣。盡繼之以血。王使人問曰。天下別者多。子奚哭之悲。和曰。吾非悲別也。夫以寶玉而題之曰石。貞士而名之曰詐。吾是以悲。王使人理其璞。果得玉焉。遂命名曰和氏璧とある。此の璧は後に連城の璧とも曰ひ、天下の至寶となつた。易。交換すること。償。ある物を受けし代りにある物を與へること。給取璧。給は欺也。史記に相如視秦王無意償趙城。乃前曰。璧有瑕。請指示王云々とある。卻立。退いて立つ。

解釋

趙の惠文王は、嘗て名高い楚の和氏の璧を得た。秦の昭王は之を聞いて大に羨み、趙王に十五の都城と交換したいと申し込んだ。そこで趙王は之を與へるとすれば、當時秦は強國であるから、必ず來つて我を攻めんことを恐れ、與へれば欺かれて、都城を得ること能はざるを恐れ、如何にせんかと案じ煩うた。此の時相如が曰ふのには、臣願くば璧を持つて秦へ行きませう。若し都城が趙に入らな

つたならば、臣は璧を全うして持ち歸りますと。かくて相如は趙王の許を得、璧を持つて秦に行き、之を昭王に獻じた。然るに昭王は、約束の通り、十五の都城を以て償ふ意が無かつた。相如は之を見て、王を欺いて玉を取り返すや、憤怒の極、頭髮皆立つて冠を指し貫き、退いて殿柱の下に立つて怒號して曰ふのには、臣が頭は此壁と共に柱に、打つて碎けんと叫んだ。これは相如が昭王の背信を憤慨したのである。それから相如は璧を從者に渡し、潜行して先づ趙に歸らせ、自分は留つて秦王の處分を仰ぎ、その命令を待つて居た。然し、秦王は相如を賢者として之を趙に歸した。

秦王約趙王會澠池。相如從。及飲酒。秦王請趙王鼓瑟。趙王鼓之。相如復請秦王擊缶爲秦聲。秦王不肯。相如曰。五步之內。臣得以頸血濺大王。左右欲刃之。相如叱之。皆靡。秦王爲一擊缶。秦終不能有加於趙。趙亦盛爲之備。秦不敢動。

字解

瑟。琴の屬、二十五絃あり。鼓。ひく、彈する。缶。酒や醬油を入れる瓦器。秦は戎狄の國なる故、琴瑟の器無し、故に缶を叩いて歌を唱ひ、以てその調子を取

た。五歩之内。其隔りの至て近き意。得以頸血濺大王。大王を殺すことが出来るとの意、頸血は首の血、濺は注ぐ。刃。殺す。靡。威力に恐れて退却する。

解釋 秦の昭王は趙王と約束して、澠池といふ所で會合した。これは秦王は趙王を虜にせんとする策であつたのである。此の時蔣相如も趙王に従つて行つた。

さていよいよ會合して酒を飲むに及び、秦王は趙王に向つて曰ふのには願くは寡人の爲めに、瑟を弾じて下さいと。これは秦王が趙王を辱しめる爲めであつた。

趙王は已むを得ず、一たび琴を弾じた。そこで相如は秦王に向つて曰ふのには願くは我が君の爲めに缶を撃つて、秦の歌を唱うて下さいと。これは相如が秦王の辱に酬いん爲めであつた。然るに秦王は之を承知しなかつた。相如は色を作して曰ふのには大王にして臣の請を聽かずんば、臣は此の五歩の内に於て、大王を殺すばかりであると威嚇した。秦王の左右の臣は之を見て、相如を殺さんとしたが、相如の一叱に遇うて皆辟易した。依て流石の秦王も已むを得ず、一たび缶を撃つて秦の歌を歌うた。かくて秦王は會の了る迄、終にその威力を趙に加へることが出来なかつた。趙も亦盛んに兵を備へたから、秦も敢て兵を動かさなかつた。

趙王歸以相如爲上卿。在廉頗右。頗曰。我爲趙將。有攻城野戰之功。相如素賤人。徒以口舌居我上。吾羞爲之下。我見相如必辱之。相如聞之。每朝常稱病。不欲與爭列。出望見。輒引車避匿。其舍人皆以爲耻。相如曰。夫以秦之威。相如廷叱之。辱其群臣。相如雖驚。獨畏廉將軍哉。顧念強秦不敢加兵於趙者。徒以吾兩人在也。今兩虎共鬪。其勢不俱生。吾所以爲此者。先國家之急。而後私讎也。頗聞之。肉袒負荆。詣門謝罪。遂爲刎頸之交。

字解 右。上なり、古は右を以て尊となす。列。坐席の位序。輒。その度毎にの意。舍人。近親左右の人。廷叱云々。澠池の會で秦王に缶を撃たしめたことを指す。驚。愚鈍。肉袒。衣を脱ぎて肉を露すこと。負荆。荆は和名イバラ、イバラは罪人を笞つもの故に、負荆は、私は君に對して罪があるから、之で笞つてくれよといふ意で、謝罪する義。刎頸之交。刎はハネル、頸は首、即ち首をはねる交、その人の爲めには我が命を捨つるも悔いないといふ極く親密な交のこと。

解釋 趙王は澠池の會から歸り、相如を第一の卿と爲し、廉頗といふ將軍の上位置き、以てその勳功に酬いた、廉頗が曰ふのには、我は趙の將と爲つて、城を攻めたり

野で戦つたりした功勞がある、然るに彼の相如は素と卑賤の身分で、唯口舌の辯論が巧である爲めに、我が上席と爲つた、我は實に彼の下風に立つことを耻とする、に若し彼に遇へば、必ず之を辱めてやらうと。相如は之を聞き、朝に出づる毎に常に病と稱して廉頗を避け、共に坐位を争ふことをしなかつた、又外出した時、廉頗が來るのを望見すると、その度毎に、車を引き返して避け匿れた。相如の舍人は、相如の此の行動を以て耻辱とした。相如が曰ふには、夫れ秦の威勢をも恐れず、我は之を朝廷で叱し、且つその群臣を辱めた、故に我は如何に愚鈍なればとて、之を彼の廉將軍位は畏れない。然し顧みて念ふに、彼の強秦が敢て兵を趙に加へないのは、唯我と廉將軍がある爲めである。然るに今我等兩人が共に喧嘩をすると、是れ兩頭の虎が相闘ふと同じで、その勢は俱に生きるゝが出来ず、何れか一方が死する様になる。果して然らば、秦は必ず趙を攻めるから、吾が兩人の争は、是れ趙を危くするものである、故に我れが廉頗を避けるのは、國家の危難を救ふことを先にして、私の怨を後にする爲めで、決して廉將軍を畏れる爲めでないと。廉將軍は之を聞いて深くその淺慮を耻ぢ、直ぐ肉袒して荆を負ひ、相如の門に至つてその罪を謝した。これより此の兩人は、意氣相投合し、遂に刎頸の交を爲し、死生を共にせんこと

誓ふに至つた。因に、刎頸の交といふ熟語はこゝが出處である。

㊦

秦攻趙邯鄲平原君求救於楚擇門下文武備具者二十人與之俱得十九人毛遂自薦平原君曰士處世若錐處囊中其末立見今先生處門下三年未有聞遂曰使遂得處囊中乃穎脫而出非特末見而已平原君乃以備數十九人目笑之至楚定從不決毛遂按劍歷階升曰從之利害兩言而決耳今日出而言日中不決何也楚王怒叱曰胡不下吾與而君言汝何爲者毛遂按劍而前曰王所以叱遂以楚國之衆也今十步之內不得恃楚國之衆也王之命懸於遂手以楚之強天下莫能當白起小豎子耳一戰而舉鄢郢再戰而燒夷陵三戰而辱王之先人此百世之怨趙之所羞合從爲楚非爲趙也王曰唯唯誠若先生之言謹奉社稷以從遂曰取雞狗馬之血來捧銅盤跪進曰王當歃血而定從次者吾君次者遂左手持盤右手招十九人歃血於堂下曰公等碌碌所謂因人成事者也平原君定從歸曰毛先生一至楚使趙重於

九鼎大呂以遂爲上客

字解

穎脫。穎は錐の柄、李述來曰く謂并柄俱脫然而出故云非特其末見而已若爲鋒穎則與末何異と。目笑。互に目で見合せて嘲り笑ふと。小豎子。小僧或は青二才の意で人を嘲り罵る辭。歷階。階段を上るに足を聚めざることを。例へば左足で初段を踏めば右足は二階を踏む類。舉鄢郢。楚の襄王の二十年秦の白起楚を伐ちて鄢縣を抜き次年又都の郢を抜きしことを指す。夷陵。夷は陵の名こゝは楚の累世の墳塋である。辱先人。父の死後その子父を稱して先人と曰ふ此の時毛遂等に面接した楚王は考烈王で考烈王の父は襄王で襄王は秦に攻められて陳に出奔したのである。今毛遂が辱王之先人と曰うたのは此の事實を指したのである。社稷。社は土地の神、稷は五穀の神、凡そ國は土地と五穀によつて立つ故に支那にて國を建つるには必ず此の二神を祭れり此の意味より社稷を以て國家の義と爲す。鶏狗馬之血。司馬貞曰盟之所用牲貴賤不同天子用牛及馬諸侯以犬及豕大夫以下用鶏今此總言盟之用血故云取雞狗馬之血來耳と。中井履軒曰く雜三物之血而用之蓋當時之俗云不當拘說と今中井氏の說に従ふ。跪。ヒザマツクと訓む兩膝を屈し尻をあげ踵を尻につくること。歎。ススルと訓む盟約する時血を口の傍に塗ること。礧礧。廣韻に多石貌とある即ち石のごろくして居る如く何の役にも立たないこと凡庸の義又説文に隨從貌とある。九鼎大呂。九鼎は禹王の鑄る所大呂は周廟の大鐘共に邦家の寶器にして天下の均しく尊重すの所のもの。

解釋

趙の孝成王の九年即ち秦の昭王の五十年に秦の兵が趙の都の邯鄲を攻めた。そこで趙の公子平原君は救を楚の考烈王に求めんとした。此の時平原君はその門下の食客にして文武兼備の者二十人を従へて共に俱に楚に行かんとし既に十九人を選抜した。これは平原君は此等の人をして楚王を説破せしめ以て楚趙合從して秦を伐たしめんとする爲めである。茲に毛遂といふ食客あり自ら推薦してその選の預らんことを求めた。平原君が曰ふのには凡そ士の世に居るは猶錐が囊中に在ると同じである錐が囊中に在るとその鋒尖が立ろに曰ふが如く士も世に居れば必ず名聲を揚ぐるものである。然るに今先生は我が門下に居ること既に三年であるが未だ嘗てその名を聞かない故に先生は無能であるか連れて行かれないと。毛遂が曰ふのには私の名が見れないのは之を以て機會が無かつたからである若し私をして囊中に居らせたならば乃ちその柄を以て出

するのである。雷にその鋒尖が見れるばかりでは無いと。平原君は之を然とし、乃ち二十人の數に入れた。彼の十九人の人々は、毛遂のあつかましいのれども、決して無い。そこで毛遂は劍を按じ、階を踏み鳴らして堂に上り、楚王に向つて曰ふのには、凡そ合従は、利か害か只此の二言の中で、容易に決する筈である。然るに今は日出から議論して、はや正午に至るも決定せぬは何故であるか。楚王が怒つて毛遂を叱して曰ふのには、汝は何故に階を下らぬのか、我は汝の君と議論して居るのである、汝無禮者め、汝は元來何物ぞと。毛遂は毫も恐れず、益々劍を按じて楚王に近づいて曰ふのには、王が私を叱するのは、楚國の兵の多いのを恃みとして居るからであらう、然し今王と私とは十歩の近い間であるから、王は到底楚國の兵を恃むことが出来ぬ、王の一命は私の手の内に在つて、私は王を殺すことが出来る。抑も楚は強國で、天下誰れも及ぶ者は無い、而して彼の秦の伯起は、青二才の小僧である。然るに強國の楚と一戦してその郟鄏を抜き、再戦して夷陵を焼き、三戦して王の先人を辱めたでは無いか。即ち楚國は伯起の爲めにさんぐの屈辱を受けただでは無いか。是れは楚に取りては實に百代忘るべからざる怨で、又我が趙人の羞しく思うて居る所である。故に楚趙合従して秦に當るのは、楚國の爲めの利益で、我が趙の爲めの利益で無いのである。王は此の理由を知らざるかと。楚王が曰ふのには、然り然り。誠に先生の言ふ通りである。故に私は謹んで國家を奉じて以て貴説に従ひ、合従して共に秦を伐ちましよう。そこで毛遂は楚王の左右を顧みて曰ふのには、早く雞狗馬の血を持ち來れと。左右の臣はすぐ之を銅の盤に入れて持つて來た。毛遂はその盤を捧げ、恭しく跪いて楚王に謂うて曰ふのには、王は先づ此の血をすゝつて従を定めて下さい、その次は私の君、その次は此の毛遂がすゝりますと。かくて共に血をすゝつて合従の約を定めたから、毛遂は左手に銅盤を持ち、右手で十九人を招き、共に血を堂下にすゝらしめて曰ふのには、君等は石のごろくして居る如く、何の役にも立たない、世の所謂人に依て事を成す者である。かく罵倒して前の目笑に酬いた。さて平原君は合従の約を定めて趙に歸り、毛遂を推稱して曰ふのには、毛先生が一び楚に行かれた爲めに、我が趙をして彼の九鼎大呂よりも天下に重からしめた。遂に毛遂を以て上客とし、その勞を慰めた。

44
 文侯之子、擊遇子方于道、下車伏謁、子方不爲禮。擊怒曰、富貴者驕人

乎。貧賤者驕人乎。子方曰。亦貧賤者驕人耳。富貴者安敢驕人。國君而驕人失其國。大夫而驕人失其家。夫士貧賤者言不用行不合。則納履而去耳。安往而不得貧賤哉。擊謝之。

六四

字解 子方。文侯の師。田子方。伏謁。俯伏して見ゆること。これは長者に對する禮なり。納。著也。禮記玉藻に、坐左納右と、疏に、納猶著也とある。履。皮にて作りたる草履。

解釋 魏の文侯の子の擊は、嘗て外出し、道で父の師なる田子方に出遇うたから、車から下りて丁寧な伏謁した。然るに子方は答禮しなかつた。擊は怒つて子方に謂うて曰ふのには、凡そ富貴の者が人に驕り高ぶるか、貧賤の者が人に驕り高ぶるか。子方が曰ふのには、固より貧賤のものが人に驕るのである。富貴の者は人に驕ることが出来ない。何となれば、苟も國君にして人に驕ると、その國人は皆叛いて離散するから、遂にその國を失ふに至り、大夫にして人に驕ると、その家臣や奴僕が叛くから、遂にその家を失ふに至るのである。かくて失うた者は再び得ることが六ヶ敷いから、富貴の者は、決して人に驕るもので無いのである。然し士の貧賤なるものは、自分の意見が君に用ゐられず、又自らの行が君の意に合はない時は、唯履を足に著けてその國を去るばかりである。而してその貧賤は何れの地に行つても得られぬことがあらうか。貧賤は失ふもので無いから、いつも得易いのである。故に貧賤の人にして始めて人に驕るのであると。擊は之を聞いてその説に服し、前言の失禮を謝した。

文侯謂李克曰。先生嘗教寡人家貧思良妻。國亂思良相。今所相非魏成則翟璜。二子何如。克曰。居視其所親。富視其所與。達視其所舉。窮視其所不爲。貧視其所不取。五者足以定之。子夏。田子方。段干木。成所舉也。乃相成。

解釋 魏の文侯が李克に謂うて曰ふのには、先生は嘗て私に家が貧困の時は、良き妻のあらんことを思ひ、國が亂れた時は、良き宰相を得んことを思ふと、教へられたが、實に先生の言の如く、今私も國家の爲めに切に良相を得んことを希うて居る、そして私はその候補者として、魏成か若くは翟璜に望を屬して居るが、此の二人の優劣は如何であらうか、先生の御高見を伺ひたいと。李克が曰ふのには、凡そ人物を

鑑識するとは五の法がある。第一はその人が平居無事の時に於て、如何なる人と親しく交際して居るか、その親交して居る人物の善悪を視るのである。第二は、その人既に富裕になりて後、如何なる所に金穀を興へて居るか、その興へる事の當否を視るのである。第三は、その人既に立身して顯官と爲つて後、如何なる人物を任用するか、その任用した人物の賢愚を視るのである。第四と第五は、その人が窮困した時に於て、非義の事を爲さぬか、非道の財を取らぬか、その爲さざる所、取らざる所を視るのである。此の五つの法は、以て宰相の適否を定むることが出来るのであると。即ちその交る所の人物は善人、その興ふる事は道理に當り、その擧ぐる人は賢、非義の事を爲さず、非道の財を取らざれば、その人は立派な君子で、大臣宰相として絶好の人であるが、之に反する者は小人で取るに足らぬのである。さて李克はかく人物を鑑定する法を對へて、直接魏成翟璜の優劣を曰はなかつた。此の時文侯の師として仰いだ子夏や、田子方や段干木の賢者は、皆魏成が推擧した人であつたから、文侯は所謂その擧ぐる所を視て、遂に魏成を以て宰相に任じた。

武侯浮西河而下。中流顧謂吳起曰。美哉山河之固。魏國之寶也。起曰。在德不在險。昔三苗氏左洞庭右彭蠡。禹滅之。桀之居左河濟右泰華。伊闕在其南。羊腸在其北。湯放之。紂之國左孟門右太行。恒山在其北。太河經其南。武王殺之。若不修德。舟中人皆敵國也。武侯曰。善。

解釋

魏の文侯の子武侯は、嘗て舟を西河に浮べて下つた。そして河の中程に於て、顧みて吳起に謂うて曰ふのには、美麗では無いか此の山河の固めは、實に我が魏國の寶である。これは武侯が山河の天險を誇り之を越えて我を侵略するもの無しと信じたのである。吳起が對へて曰ふのには、抑も國家の安きは人君の徳政如何にあることで、決して山河の天險に在るのでは無い。その證據には、昔三苗氏は洞庭の太湖を在にし、彭蠡の大澤を右に控へ、實に形勝の地であつたが、遂に夏の高王の爲めに滅された。又夏の桀王の國は、河水濟水の二川を左にし、泰華の山を右にし、伊闕の險崖はその南に在り、羊腸の險阪はその北に在り、天險無比の國であつたが、殷の湯王の爲めに南巢に放たれた。又殷の紂王の國は、孟門山を左にし、行山を右にし、恒山のその北に在り、太河の水はその南を經、これも亦天險のつたが、遂に周の武王の爲めに殺された。是に由つて之を觀れば、人君の者は、天險にあらずして徳政にあることが分るでありませう。故に若て徳を修めなければ、今此の舟中に居る人も、皆叛いて敵國となるのである。

侯が曰ふのには、汝の言は善し、我は之を鑑としよう。

莊王即位三年不出令。日夜爲樂。令國中敢諫者死。伍舉曰。有三年不蜚不鳴。是何鳥也。王曰。三年不飛。飛將衝天。三年不鳴。鳴將驚人。蘇從亦入諫。王乃左執從手。右抽刀以斷鐘鼓之懸。明日聽政。任舉蘇從。國人大悅。

字解

樂、聲色宴遊の樂。阜、岡なり。蜚、飛なり。抽、抜なり。斷、絶なり。

解釋

楚の莊王は位に即いてから三ヶ年、一の政令を出さず、日夜宴遊の樂に耽つた。そして國中に嚴令を下して曰ふのには、敢て我を諫めて我が樂を妨ぐるものは死刑に處すると。伍舉といふ臣が莊王に謂うて曰ふのには、一羽の鳥があつて岡に居たが、三年の間、飛びもせず、鳴きもせず、實に不思議であるが、これは抑々如何なる鳥であらうかと。これは伍舉が鳥を以て王に喩へ、暗に王を諷したのである。莊王が曰ふのには、三年の間、飛びぬのは、他日の雄飛を養ふ爲めであつて、若し飛べば必ず高く天を衝くであらう。又三年の間、鳴かぬのは、亦他日の大鳴を期する爲め、若し鳴けば必ず人を驚すであらうと。これは王が伍舉の諷諫を覺り、暗に自己の爲す有るの志を明にしたのである。それから蘇從といふ臣も亦入つて諫めた。莊王は乃ち左の手で蘇從の手を執り、固く握つてその忠を嘉み、右の手で刀を抜いて鐘鼓の樂器を懸ける紐を絶ち切つた。これは再び之を用ゐないことを示したのである。そして明日朝に出て政を聽き、又伍舉や蘇從の賢臣を用ゐて國政を委せたから、楚國の人は大に喜んだ。

燕人立太子平爲君。是爲昭王。弔死問生。卑辭厚幣。以招賢者。問郭隗曰。齊因孤之國亂而襲破燕。孤極知燕小。不足以報。誠得賢士與共國。以雪先王之耻。孤之願也。先生視可者。得身事之。隗曰。古之君。有以千金使涓人求千里馬者。買死馬骨五百金而返。君怒。涓人曰。死馬且買之。况生者乎。馬今至矣。不期年千里馬至者三。今王必欲致士。先從隗始。况賢於隗者。豈遠千里哉。於是昭王爲隗改築宮師事之。於是士爭趨燕。樂毅自魏往。以爲亞卿。任國政。已而使毅伐齊。入臨淄。齊王出走。毅乘勝六月之間。下齊七十餘城。

字解 幣。進物。孤。王侯自ら謙稱して孤と曰ふ。先王之耻。昭王の父噲が齊人に殺された耻辱を指す。涓人。洒掃を主り、君の左右に親近する人。亞卿。亞は次なり、正卿に次ぐ卿。

解釋 燕の人は、太子の平を立て、君と爲した。之を昭王と曰うた。さて昭王は死者は厚く弔ひ、生者は懇に慰撫して、専ら人心の收攬に力め、且つ辭を卑くし幣を厚うして四方の賢者を招いた。嘗て郭隗に問うて曰ふのには、齊の國は私の國の内亂に乗じて、私の國を襲ひ破つた。私は極めて我が燕は小國であつて、到底此の仇を報ゆることが出来ないことを知つて居る。然し誠に賢人を得て共に國政を謀り、以て富國強兵の術を講じ、一たび齊を伐つて先王が受けた耻辱を雪ぎたいことは、是れ私の平常の至願である。故に先生よ、願くは賢士を得て之を推薦してくれよ、私は之に師として事へるであらうと。郭隗が對へて曰ふには、昔或る國の君は、千圓の金を涓人に與へ、一日に千里を走る駿馬を買はせた。ところが涓人は、死馬の骨を五百圓で買うて歸つて來た。その君は大に怒つて涓人を叱つた。涓人が曰ふのには、死馬の骨すら猶買ふのであるから、况んや生馬を買ふことは明かである、故に今千里の駿馬は必ず來るであらうと。果してその言の如く、未だ一年を経ぬ内に、千里の馬が三頭も來たと云ふことである。此の昔話と同じく、今王も必ず賢士を招致せんと欲せば、先づ第一に此の隗から任用せられよ、然らば隗より賢なる人は必ず任用せらるゝと信じ、千里の道を遠しとせず、喜んで來るであらうと。昭王は之を然りとし、そこで郭隗の爲めに新たに宮室を築いて之に住ませ、朝夕之に師事した。是れより昭王が士を愛するの名は天下に傳はり、四方の賢士は争うて燕に趨いた。即ち樂毅の如き豪傑は魏から來た。そこで昭王は之を亞卿として鄭重に待遇し、之に國政を委任した。かくて時機到來し、昭王はいよいよ樂毅をして齊を伐たしめた。樂毅の兵は齊の都の臨淄に攻め入つたから、齊王は莒に奔した。樂毅は勝に乗じ、六ヶ月の間に、齊の七十餘城を下した。此の如くにして昭王は見事先王の耻を雪いだのである。

繆公爲晉軍所圍。岐下有甞食公馬者三百人。馳冒晉軍。晉解圍遂脫。繆公以反。先是繆公亡善馬。野人共得而食之。吏逐得。欲法之。公曰。食善馬不飲酒傷人。皆賜酒而赦之。於是聞秦擊晉。皆願從。推鋒爭死。以報德。

字解 冒。突撃。以反。キテカヘルと訓む、共に連れ歸る。推鋒。互に鋒を排けて争ふて進む。争死。勇戦奮闘すること。報德。公の馬を食ふを死を放れたるの恩惠を指す。

解釋 秦の繆公は晋の軍に圍まれた。此の時秦軍には嘗て岐下に於て繆公の馬を食うた者が三百人居り、此の者等が馳せて晋軍を突撃したから、晋軍は爲めに圍を解いた。依て三百人は繆公を死地より離脱させ、共に秦に歸つた。さて此の戦争のある前に、繆公は善馬を失うた。岐下の野人等は之を得屠つて之を食うた。これは野人等は公の馬であることを知らなかつたからである。秦の役人はその馬の跡を追うて之を搜索し、遂に岐下の野人等が食せしことを探知し、捕へ得て之を處罰せんとした。然るに繆公が曰ふには、善馬を食うて酒を飲まなければ、その人を傷ひ害するものであると。そして之に酒を賜うて赦した。これは繆公は、野人の罪は一時の出来心から起つたことを知り、法に處するに忍びなかつたからである。かくて野人等は痛く公の恩德に感激したのである。故に今秦が晋を伐つことを聞き、皆從軍を願ひ、互に鋒を排して前に進み、死を争うて勇戦し、よく公を死地の中から救ひ出し、以て前日の恩に報いたのである。

孝公下令賓客群臣有能出奇計強秦者吾其尊官與之分土衛公孫鞅入秦因嬖人景監以見說以帝道王道三變爲霸道而後及強國之術公大悅欲變法恐天下議己鞅曰民不可與處始而可與樂成卒定令令民爲什伍相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵同賞匿姦者與降敵同罰有軍功者各以率受爵爲私鬪者各以輕重被刑大小戮力本業畊織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者舉以爲收擊

字解 公孫は姓。鞅は名。嬖人。身分賤くして君に寵幸せらるゝ人。帝道。堯舜の道。王道。禹王、湯王、文王、武王の道。霸道。齊の桓公、晋の文公等の如く、武力を以て天下に覇者たるの道。虞。慮なり、相談すること。什伍。五家を伍と爲し、伍伍を什と爲す、即ち五軒組、十軒組と互に組合を作ること。收司。姦を察して之を官に告ぐるること。連坐。若し組合に於て惡を爲す者あるも、之を官に告げざれば、その組合全體が、その罪に連り、共に處刑を受くること。爵。封なり。戮。併せる。復。除く。身。賦役のこと。賦役とは官にて人民を徵發して之を使役すること。末利。史記の註に謂、商工とある。

解釋

秦の孝公は令を下して曰ふのには、凡そ他國より來る所の賓客及び我が群臣にして、苟も能く奇計を出して我が秦國を強くする者あれば、我はその人に官を授け、之に領土を與へて優待せんと。時に衛國の公孫鞅といふ者が、之を聞きて秦に來り、孝公の嬖臣景監といふ人を介して孝公に見えんことを求めた。かくて鞅は既に孝公に見え、先づ帝道を以て説き、更に王道に及び、三變して霸道を説き、最後に富國強兵の術を説いた。孝公は此の富國強兵の術を聞いて大に喜び、鞅を用ゐて法令を變更せんと欲した。然し國民が己れを譏らんことを恐れ、躊躇して未だ決しなかつた。鞅が曰ふのには、凡そ民は、事の創始に就いては、共に相談すべき者にあらず、只成功した後に於て、共にその成功を樂むべきものである。故に今變法についても國民の是非を顧る必要無しと。孝公は之を然りと爲し、遂に法令を變更した。さてその變更した新法は、一、民をして十軒若くは五軒を以て一の組合とし、而して此の組合に於ては、互に惡を察して官に告げしめ、若し告げざればその組合の者は、皆その罪に連坐すること。二、姦を官に告げざる者は、これを腰から斬つて誅すること。三、姦を告ぐる者は、敵の首を斬ると同じ賞を與へること。四、姦を隱匿する者は、敵に降ると同じ罪につけること。五、戰爭で勳功があれば、各その差等を以て封を授けること。六、私事を以て爭鬪を爲す者は、各その事の輕重に因つて刑を被ること。七、老幼男女共に各その力を併せ、男は田畑を耕し、女は布帛を織ることを以て本業とすること。八、米や帛を多く官に納める者は、その賦役を免除すること。九、商工の未利を事とし、及び怠つて貧乏な者は、皆之を糾擧し、その妻子を收めて官の奴婢とすること。以上は變法の重なるものであつた。

①

令既具未布、立三丈之木於國都市南門、募民有能徙北門者、予十金。民怪之、莫敢徙。復曰：能徙者予五十金。有一人徙之、輒予五十金。乃下令。太子犯法、鞅曰：法之不行、自上犯之。君嗣不可施刑。刑其傅公子虔、黥其師公孫賈。秦人皆趨令。行之十年、道不拾遺、山無盜賊、家給人足。民勇於公戰、怯於私鬪、鄉邑大治。初言令不便者、來言令便。鞅曰：皆亂法之民也。盡遷之邊。民莫敢議令。民父子兄弟同室內息者、爲禁。廢井田、開阡陌、更爲賦稅法。秦人富強、封鞅商於十五邑、號曰商君。

字解

募民。民に賞を懸けること。予。與なり。黥。墨刑。其額に入墨してその罪を形はす。趨令。速に令に従うて之を守ること。井田。周の制、方里を井

爲す、井は九百畝、界して九區と爲す、中を公田と爲し、その他を私田となす、八家各區を受け、その力を以て公田を耕す、而して私田は別に税を課せず、公田を耕すを以て税と爲す、井田の制は下圖の通りである。



公田。開阡陌。南北を阡と云ひ、

東西を陌と云ふ、井田の區畫の道路、開はその道路を開拓して田地と爲すこと。

解釋

孝公は既に新令を制定したが、未だ之を發布しなかつた。これは國民が未だ之を信ぜざるを恐れたからである。而して先づ三丈の木を國都の市中の南門に立て、置き、民に賞を懸けて曰ふのには、此の木を北門に遷した者には十圓を與へると。然し民は之を怪んで敢て遷す者が無つた。そこで復賞を懸けて曰ふのには、能く之を北門に遷した者には、五十圓を與へると。一人があり、之を北門に遷した。そこで直ぐに五十圓を與へた。これは民に令は必ず信あることを示したのである。かくて後始めて新令を公布した。然るに秦の太子が第一に法を犯した。鞅が曰ふのには、凡そ法令が一般に行はれ無いのは、上の人から之を犯すからである、今太子が法を犯したが、之は法の精神より曰へば、固より罰すべきであるが、然し君の繼嗣であるから罪することが出来ない。そこでその輔佐役の公子虔を刑し、その師の公孫賈を墨刑に處した。これは太子が法を犯すのは、その師傅の指導

が悪いからで、其責任は師傅にあるといふ理由からである。これを見て秦の民は皆法令の嚴なるに恐れ、争うて令を奉ずる様になつた。さて秦は新令を行ふこと十年であつたが、政令よく行き届き、道路の遺失物も拾ふ者が無い様になつた。又山には盜賊も居らずして至極安寧で、各家とも衣食に豊で、満足に生活することが出来た。又國民は、國家の爲めには勇敢に奮闘するも、私闘には至て臆病になり、従つて村里は大に治つた。そして初めに新法の不便を言うた者も、反て新法の便利であることを頌するに至つた。鞅が之を聞いて曰ふのには、此の如き自由勝手の手が民が法令を亂すのであると、盡く之を邊鄙の地へ遷した。是より以後は、民は一人として法令に就いて、その是非を言ふ者が無くなつた。又秦の舊來の習慣では、父子兄弟が一家内に住んで居たが、孝公の時に至つて之を禁じ、各別に家を構へることに改めた。これは戸籍を殖やし、賦役を多くする爲であつたのである。又從來の井田の法を廢し、其縦横に通じてある道路を開拓して耕地を多くし、改めて課税の法を制定した。さて此の新令によつて秦は富國強兵になつたから、孝公は鞅の功を賞して商於の地に封じ、尊んで商君と曰うた。

秦宗室大臣議曰、諸侯人來仕者皆爲其主游說耳、請一切逐之、於是

大索逐客。客卿李斯上書曰。昔穆公取由余於戎。得百里奚於宛。迎蹇叔於宋。求平豹。公孫枝於晉。并國二十。遂霸西戎。孝公用商鞅之法。諸侯親服。至今治強。惠王用張儀之計。散六國從使之事。秦昭王得范雎。強公室。此四君者。皆以客之功。客何負於秦哉。泰山不讓土壤。故大河海不擇細流。故深。今乃棄黔首以資敵國。卻賓客以業諸侯。所謂藉寇兵而資盜糧者也。王乃聽李斯復其官。除逐客令。斯楚人也。嘗學於荀卿。秦卒用其謀。并天下。

字解

游説。辯舌を飾つて時勢を論じ、巧に利害得失を説くこと。一切。總て皆の意。索。求なり、搜索すること。客卿。他國の人にして來りて秦に事へ、秦の卿と爲つた者。散六國從使之事。秦。六國とは齊楚燕韓魏趙の六國である。此の六國は皆函谷關の東に國して居た、而して東周洛陽の人蘇秦といふ者、此の六國の間に斡旋し、六國一致團結して秦に拮抗する盟約を協定し、自ら其長となつた。この協約を合從と謂うた。それは六國の國する關東は、其地勢從に長く、且つ此の六國相合して秦に當る所から、その合と從とに因て名けたのである。此の時支那は、此

の六國と秦との七ヶ國に分割されて居たのである。また當時連横といふ政策も行はれた。これは魏の人張儀といふ者が、秦の爲めに企てた策で、その目的は彼の合從を破棄し、六國をして秦に服從せしめんとするに在るので、張儀は遂に之に成功した。而して之を連横といふは、秦は獨り函谷關の西に國し、その地勢は横に長く、且つ關東の六國を服從させて、之をその横に連ねたから、その連と横とに因みて名けたのである。故に「散六國從使之事。秦」とは、張儀がこの連横を策して成功した事を指したのである。霸西戎。西方の戎夷の覇者と爲つたこと。史記秦の世家に、三十七年秦用由余謀伐戎主。益國十二、開地千里。遂霸西戎とある。又三十九年に繆公が死んだ時の事を叙して、君子曰。秦繆公廣地益國。東服彊晉。西霸戎夷。然不爲諸侯盟主。亦宜哉とある。此の「西の方霸戎狄」とは、即ち「霸西戎」といふ事と同じである。公室。左傳宣公十八年傳に、欲去三桓以張公室と。注に三桓強。公室弱。故欲去之以張大公室とある。この公室は魯の王室、即ち魯王の家といふことである。今此處の公室も秦王の家といふ事であるが、之を秦國の意に轉用したのである。負。叛く。泰山。山の名。讓。コバムと訓む。管子君臣篇に、治斧鉞者。不敢讓刑。と、注に、讓猶拒也とある。細流。小川の流。擇。エラブ、取捨

する。黔首。黔は黒、人の髪は黒い、故に秦は人民を呼んで黔首と曰うた。資、業。共にタスクと訓む。助けること。卻、シリゾケル、放逐の意。棄黔首、資敵國、凡そ國が富み兵が強いのは、國の基礎たる國民に元氣があるからである。而して國民の元氣を鼓舞する者は客である。故に若し人君にして此の肝要なる客を放逐せば、是れ其君は國民の元氣を欲せざる者で、即ち人民を棄てる者である。又人民を棄て、その元氣を失はせたらば、その國には不利であるも敵國には利益である。そして敵國に利益を與へるのは、即ち敵國を助けると同じであるといふ意である。つまり此の句は客を放逐するは人民を棄てると同じく、人民を棄てるのは敵を助けると同じである、故に客は放逐してはいけないといふ事を述べたのである。卻、賓客、以業、諸侯。賓客とは諸侯の國から來た客。此の客を退けて用ゐなければ、客は去つて他の諸侯の國に行きて事へるのである。故に秦にて客を逐ふは、即ち諸侯を助けると同じであるといふ意である。つまり此の句は前の棄黔首云々の句の意を明白にし、以て逐客の不利を説いたのである。藉、カス、借す。寇。アダ、カタキ、仇に同じ。兵。刀劍の類、武器。齋。モタラスと訓む、持たせて遣る。齋盜糧とは、盜人に追錢の諺と同じ意。

解釋

秦の宗室即ち同族の大臣等が評議して曰ふのには、凡そ諸侯の國の人が我が秦に來て仕へるのは、その目的は我が秦の利益を計る爲めで無く、皆其舊主の爲めに游説するのである。故に我が秦には害こそあれ利益は無いから、今から一切かゝる人を放逐したいものであると。かくて相談が一決し、天に國中を搜索して客を逐ひ出した。此の時客卿の李斯といふ者が上書して曰ふのには、昔秦國の先祖穆公は、由余といふ賢者を西の方戎の國から取つてこれを用ゐ、百里奚といふ賢者を宛の地から得て之を用ゐ、蹇叔といふ賢者を宋の國から迎へ、平豹、公孫枝の賢者を晉の國から求めて之を用ゐた。その結果穆公は他邦を併有すること二、三ヶ國の多きに及び、遂に西の方戎狄の覇者となつた。又孝公は衛國の人商鞅を任用し、その法を用ゐて富國強兵の術を講じたから、天下の諸侯は秦に服し、秦は今日に至るも國は治り兵は強いことである。又惠王は魏國の人張儀といふ賢者を信任し、その計を用ゐて六國の合従を解散し、六國の君臣をして秦に用ひさせた。又昭王は魏國の人范雎を得て秦國を強くした。さて此の穆公、孝公、惠王、昭王の四君は、皆他國から來た客の力に依り、かく偉績を擧げたのである。是の實例は、よく見れば、客はどうして秦に叛かうか、秦に叛かないことは明かである。彼の

は土壤の善悪大小を拒まず、すべて之を收容したから彼の様に高大な山にならぬのである。又黄河や海は流れの大小を取捨せず、如何なる潮流をも流れ込ませたから、彼の様に深くなつたのである。之と同じく國もその隆昌強人を毀さんといふれば、如何なる國の人でも用ゐなければいけないのである。故に賢者に於ては、尚更重く用ゐて、厚く待遇しなければならぬのである。然るに今秦の大臣は此の道理を知らず、猥りに客を逐はんとするのは、是れ國家の本たる人民を棄て、敵國なる諸侯を助けるものである。かゝる愚なる政策は、丁度我が家に侵入して我を害せんとする仇に刃を借し、益々其仇を助け、又我が物を奪うた盜賊に、更に糧を持たせて遣ると同じである。かく上書して極力、逐客の不可を論じたところが、秦王も遂に李斯の言に従ひ、一旦取り上げた李斯の官を本の如く復し、且つ客を逐ふ令を除き止めた。さて此の李斯は楚の國の人で、嘗て荀卿といふ學者に就いて勉強した。而して秦は遂に李斯の謀を用ゐて支那全國を併呑した。

秦王初并天下、自以德兼三皇、功過五帝、更號曰皇帝、命爲制、令爲詔、自稱曰朕、制曰死、而以行爲誡、則是子議、父臣、議君也、甚無謂、自今以

來、附諡法、朕爲始皇帝、後世以計數、二世三世至千萬世、傳之無窮。

字解

并。天下を平定して自分の有とすること。三皇。伏羲、神農、黃帝。五帝。

少昊、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜。命爲制。史記の註に、制書帝者制度之命也とある。即ち帝王が法度を制定して之が執行を命ずること。令爲詔。史記の註に、詔書謂其詔告之命也とある。即ち詔は布告の義で、帝王が事を中外に布告すること。朕。我なり、昔は貴賤を論せず、皆朕と稱した、秦に至り獨り天子の稱とし、庶人の使用を禁じた。諡。オクリナと訓む、死者生前の行によりて名づくる追號。無謂。道理に合はないといふ意。

解釋

秦王は初めて天下を平定し、支那四百餘州を併有した。依て自ら思ふに、我が徳業の盛なることは古の三皇を兼ね、我が功績の大なることは五帝に過ぎ優つて居ると。そこで王を改めて自ら皇帝と稱した。これは秦王が、自分は三皇の徳

と五帝の功績を兼有して居るから、之を現す爲めには王の字では餘り不充分であると思ひ、遂に三皇の皇の字と五帝の帝の字を取り、皇帝と稱したのである。又秦王は既に皇帝と稱する以上は、すべての事を莊重にする必要を感じ、多くの事定した。即ち從來法度を制定して之が執行を命じた場合には、命というたが、之

改めて「制」と稱し、從來皇帝自ら事を中外に布告した場合には、（分）「命」といふたが之を
 めて「詔」と稱することに定めた。又從來は誰でも自ら朕と稱したるは、（然）然らざるべし。
 秦王一人だけの稱とし、嚴に君臣の別を裁定した。又法度を定めては、（之）之を以て
 人が死んで後、その人の生前の行状を考へて諡を爲るのは、（是）是れ子にして又之を世
 し、臣にして君を批議するものであつて、實に道理に叛いた事である。故に今から
 此の諡の法を廢し、朕は第一次の皇帝であるから、朕を始皇帝と爲し、後世子孫は世
 數を以て計りかぞへ、二世皇帝、三世皇帝と謂ひ、それから千萬世の皇帝に至り、之を
 無窮に傳へたいと。因に詔、皇帝、朕などの語が、天子獨占の用語となつたのは、始皇
 帝から始まつたのである。

陽城人陳勝字涉少與人傭畊。畊之隴上。悵然久之曰。苟富貴無相
 忘。傭者笑曰。若爲傭畊。何富貴也。勝大息曰。嗟呼。燕雀安知鴻鵠之志
 哉。至是與吳廣起兵于蕪。時發閭左戍漁陽。勝廣爲屯長。會大雨道不
 通。乃召徒屬曰。公等失期。法當斬。壯士不死則已。死即舉大名耳。王侯將
 相寧有種乎。衆皆從之。乃詐稱公子扶蘇項燕。稱大楚。勝自立爲將軍。

廣爲都尉。

字解

傭畊。傭は日傭取、畊は耕、即ち賃錢を取つて人に雇はれ田畑を耕すこと。

隴上。田の中にある小高い處。之。往く。悵然。志を得ずして嘆息する貌。苟。若に同じ。若。汝。嗟呼。二字でア、と訓む、さて〜と曰うて嘆くこと。鴻鵠。

史記陳勝世家の索隱に、鴻鵠は一鳥。若鳳凰然。非鴻鴈與黃鵠也。鵠音戶酷反とある。故に鴻鵠は鳳凰に似た鳥である。又鵠の音はコクで、コウで無い。至是。秦の二世皇帝の時を指す。發閭左。閭は村、秦の法では富強の者は村の右側に居らせ、貧弱の者は左側に居らせた。今秦は國家多事にして富強の者は既に使役し盡したから、遂に貧者を徵發したのである。戍。兵を屯させて守備すること。徒屬。徒は徒役、屬はヤカラ、即ち徒役者。詐。僞。扶蘇。秦の始皇帝の子で二世皇帝の兄。蒙恬が軍中で自殺を命せられた人。項燕。楚の名將で、楚人から尊信せられて居たがその生死は分らなくなつた人。

解釋

陽城縣の人に、姓は陳名は勝、字は涉といふ者があつた。此の人は青年の頃、

他の人と共に日傭取となつて田を耕したことがあつた。ある日耕を止めて田の小高い處に行き、悵然として大息して居たが、やがて仲間の傭者に謂つて曰ふのに、

若し拙者が他日富貴になつたならば、今日の親交を忘れずによく世話をしてやると。傭者は之を聞いて嘲笑して曰ふのにお前は今人の爲めに日傭取をして居る貧乏な身では無いか、然るにどうして富貴になることが出来るものか、寢言も程があるといふて取り合はなかつた。そこで陳勝は大息を吐いて嘆いて曰ふのに、さて、燕や雀の如き小鳥は、どうして鴻鵠の如き大鳥の心を知ることが出来るようかと。これは燕雀を以て傭者に喩へ、鴻鵠を以て自分に喩へ、燕雀の如き小人の傭者は、鴻鵠の如き英雄の我を知ることが出来ないといふたのである。かく陳勝は青年の時から大なる目的を持つて居たのであるが、いよいよ秦の始皇帝が死し、二世皇帝が位に即き天下が亂れて來たから、陳勝は機到れりと爲し、遂に吳廣と共に兵を斬といふ處に起し、以て中原の鹿を得んと企てた。是より先き、秦は反徒を鎮撫する爲めに、所在から民兵を徵發した。而して今陳勝、吳廣が兵を起さんとした時も、亦所在の閭左を徵發して漁陽といふ所を守備させた。此の時陳勝、吳廣の二人はその屯の長と爲り、漁陽に向つて出發したが、將に漁陽に到らんとした時、折悪しく大雨が降つて交通が杜絶し、行くことが出来なかつた。そこで二人は閭左の徒屬等を召して、曰ふのに、貴公等は既に漁陽に到着すべき期限を失ひ、軍律を

56

亂したものであるから、之を國法に照して處分すると、斬罪に該當するのである。然し凡そ大丈夫は死ななければそれ迄であるが、苟も死するならば、驚天動地の働きをし、英名を天下に擧ぐべき筈である。彼の王と爲り、侯と爲り、大將と爲り、宰相と爲りて威福を弄する人も、何んで別の種の人であらうか、決して別の種の人で無い亦吾々と同じ種の人間である。故に今貴公等は期限に後れて斬罪に處せられて犬死するよりは、斷然反旗を翻して天下に號令し、以て王、侯、將、相と爲る策を講じた方がよいでは無いかと。慷慨的訓示を試みた。徒屬は之れに感激し、皆一齊に贊同した。是に於て陳勝、吳廣の二人はいよいよ兵を斬に擧げたのである。然し兵を擧げるのには、名義が必要で、名義が無いと人心を得て人氣を集めることが出来ない。そこで二人は詐つて秦の公子扶蘇、楚の將項燕であると、言觸し、國號を大楚と稱した。これは扶蘇は二世皇帝の兄であるから、當然秦皇帝となるべき資格があり、項燕は人望のあつた楚の將軍であるから、此の二人の名を利用すれば、人心を得て目的を果すに都合がよいから、かく僞つたのである。かくて陳勝は自ら立つて將軍と爲り、吳廣は自ら都尉の官になり、堂々として兵勢を輝した。

項梁者楚將項燕之子也。嘗殺人。與兄子籍避仇吳中。籍字羽。少時學

書不成。去學劍。又不成。梁怒。籍曰。書足以記姓名而已。劍一人敵也。不足學。學萬人敵。梁乃教籍兵法。

字解 書。字を書くこと、即ち書道。去。スツルと訓む、棄なり、後漢書申屠剛が傳に、人所畔者。天所去也とある。記。書き記す。

解釋 項梁といふ人は楚の將項燕といふ者の子であるが、嘗て人を殺した爲めに、復讐せられるのを恐れ、兄の子籍と共に吳中といふ處へ遁げ隠れた。此の籍は字を羽と謂ひ、若い時に字を書くことを學んだが、上手にならなかつたから、之を棄てて劍術を學んだ、然るにこれも又上達しなかつた。そこで叔父の項梁は怒つた。籍が曰ふのに、元來書は姓名を書き記すことが出来ればそれで充分であるから、學ぶ必要は無い、又劍術は唯一人を敵とするものであるから、亦學ぶ必要は無い、私は萬人を敵とする術を學びたいものであると。梁は之を聞いてその抱負を奇とし、籍に兵法を教へた。因にこの籍は後に漢の高祖と天下を争つた英傑である。

趙高欲專秦權。恐群臣不聽。乃先設驗。持鹿獻於二世。曰。馬也。二世笑。曰。丞相誤邪。指鹿爲馬。問左右。或默。或言。高陰中諸言鹿者。以法。後群臣皆畏高。莫敢言其過。

解釋 秦の宰相の趙高は、秦の政權を專にせんと欲した。然し群臣が己れの命令に服従しないを恐れた。依て先づ自分の命に服従せざる者は、誅戮するといふ事を示さんが爲めに、一の驗證を行つた。それは鹿を獻じたのである。即ち趙高は自ら一匹の鹿を二世皇帝に獻じ、わざとこれは馬であるといふた。二世は笑つて曰ふに、丞相(宰相)は思違ひをして居やすまいか、鹿を指して馬と爲して居る。そして左右の臣に向ひ、馬か鹿かの別を問うた。此時左右の臣の中には、黙して答へざる者もあり、或は明白に鹿と答へた者もあつた。そこで趙高は鹿と曰うて己の意に反した者に對し、故意に他の罪名を被せ、之を法律に中(當)て、嚴罰に處した。これから以後は、群臣は皆趙高を恐れ、敢てその過失を言ふ者が無かつた。

項羽率諸侯兵。欲西方入關。或說沛公守關門。羽至。門閉。大怒。攻之。進至戲。期旦擊沛公。羽兵四十萬。號百萬。在鴻門。沛公兵十萬。在霸上。范增說羽曰。沛公居山東。貪財好色。今入關。財物無所取。婦女無所。此其志不在小。吾令人望其氣。皆爲龍成。五采。此天子氣也。急擊之。

60

羽季父項伯素善張良夜馳至沛公軍告良與俱去良曰臣從
急亡不義入具告因要伯入見沛公奉卮酒爲壽約爲婚姻曰吾
秋毫不敢有所近籍吏民封府庫而待將軍所以守關者備他盜也願
伯具言臣之不敢倍德伯許諾曰且日不可不蚤自來謝伯去具以生
羽且曰人有大功擊之不義不如因善遇之

字解

沛公。漢の高祖高祖は沛郡の人であるから沛公と曰うたのである。且。明朝早くの意。幸。愛する。五采。采は彩に同じ五色。季父。父の末弟をぢ。亡。逃ぐる。要。無理に強ひる。卮酒。卮は角を以て作った杯此杯は儀式に用ふ。秋毫。獸類の毛は秋になると代るものなりその時は至て細微である故に細末の事を秋毫といふ。言。申す。倍。背く。且日。明日。蚤。早く。

解釋

楚の項羽は諸侯の兵を率ゐて西の方函谷關に入らんとした。此時或る人が漢の沛公に説き函谷關の門を閉ぢて他人の侵入を防禦すべき事を勧めた。そこで沛公は其言に従ひ門を閉ぢた。かくて項羽は關に至つたが其門が閉ぢて居たのを見て大に怒り立に之を攻破り進んで戲といふ川迄至つた。そして明日早情を話し且つ曰ふのに彼の沛公は關中を平定した大功のある人である然るに之を賞せずして反つて之を伐つは不義の行である故に此の不義を爲すよは彼をよく待遇して手懐けるに優つたとは無い手懐けて心服さすは彼は彼であるよと力を極めて諫言した。

沛公曰從百餘騎見羽鴻門謝曰臣與將軍戮力而攻秦將軍戰河北
臣戰河南不自意先入關破秦得復見將軍於此今者有小人之言令
將軍與臣有隙羽曰此沛公左司馬曹無傷之言羽留沛公與飲范增
數目羽舉所佩玉玦者三羽不應增出使項莊入前爲壽請以劍舞因
擊沛公項伯亦拔劍起舞常以身翼蔽沛公莊不得擊張良出
以事急噲擁盾直入嗔目視羽頭髮上指目皆盡裂羽
酒則與斗卮酒賜之斝肩則生彘肩噲立飲拔劍切
飲乎噲曰臣死且不避卮酒安足辭沛公先破秦
如此未有封爵之賞而將軍聽細人之說欲誅

鴻門宴 61

耳切爲將軍不取也。羽曰坐噲從良坐須臾沛
行趨霸上留良謝羽曰沛公不勝杯勺不能辭使
拜獻將軍足下玉斗一雙再拜奉亞父足下羽曰沛
軍有意督過之脫身獨去已至軍矣亞父拔劍撞玉斗
子不足謀奪將軍天下者必沛公也

字解

無傷。曹は姓無傷は名。目。メクバセ目つきにて自分の意中を人に知らすと。
玉玦。腰に佩ぶる玉玦は形環の如くして缺けた所のあるもの。前。進む。翼蔽。
翼は助く蔽は防ぐ障ふ即ち鳥の羽を以て蔽ふ如くに助け防ぐと。盾。一種の武
器身を蔽ひて矢石を防ぐもの。噉。瞋に同じ。目眦。マナヅリ目尻眦は史記正
義に自賜反とあるから音シである。彘。豕。嗜。食ふ。咸陽。秦の都の名。細
人。小人に同じ。廁。便所。如。行く。杯勺。杯は盃勺は杓と通じ酒をくむと。
一雙。一對。足下。貴下閣下杯と同一く人を敬ふ辭。玉斗。詩經の大雅に酌以大
斗と疏に大斗長三尺謂其柄也蓋從大器挹之於樽用此杓耳とある。思ふに玉斗は

かにも猛烈であつた。項羽は之を見て曰ふに汝はまだ飲むかと。噲が曰ふのに
臣は死さへ辭せぬ者であるから區々たる此斗卮などはどうして辭退しませうぞ
多々益々飲むと出来る。それはさておき我が君沛公は第一に秦を破りその國
都咸陽を攻略し千辛萬苦して大功をたてた者である。然るに將軍は此勳功に對
し未だ封土を與へ榮爵を授けないで反て小人の讒言を信じ之を殺さんとするの
は是れ實に暴戾の極で彼の亡んだ秦の跡續と云べきものである。臣は切に將軍
の爲に之を取らず將軍のかゝる暴虐の行の無からんとを望む者であると叫んだ。
項羽が曰ふに汝は先づ一坐に就けと。依て噲は張良の次席に坐つた。暫くし
て沛公は起つて便所に行き因てひそかに樊噲を招いて共に逃出し間道を奔つて
霸上の軍に歸り獨り張良を留めて項羽に謝せしめた。そこで張良が曰ふに沛公
は非常に酩酊し將軍の相手と爲つて居ることが出来ず且つ又暇乞を申し述べること
も出来難い程である依て聊か謝意を表する爲め臣良をして白壁一對を奉じ再拜
して將軍の足下迄獻上し玉斗一對を奉じ再拜して亞父范君の足下迄獻上させた
とである。項羽が曰ふのに沛公は今何處に居るか。張良が曰ふのに沛公は
將軍が其の過失を嚴責する思召があると聞き恐れて獨り身を脱して歸去り今頃

は既に覇上の軍に至つたであらうと。范増は之を聞き忽ち劍を抜いて玉斗をぶち破つて曰ふのに、嗚呼、残念なり、沛公を取逃した。彼の豎子項將軍は共に天下の大事を計るに足らず、項將軍の天下を奪ふ者は必ず沛公であらうと痛憤した。因にこれは鴻門の會というて有名な話である。

韓生說羽關中阻山帶河四塞之地肥饒可都以霸羽見秦殘破且思東歸曰富貴不歸故鄉如衣繡夜行耳韓生曰人言楚人沐猴而冠果然羽聞之烹韓生

字解

關中。秦の地、秦の地は西に隴關、東に函谷關、南に武關、北に臨晉關、西南に散關があつて、秦は其中に在る、故に關中といふ。阻。隔てる。帶。取巻く。四塞。四方がふさがつて居る。此字はトリデの意に用ゐる時は先代切で音サイ、例へば要塞の類。又フサグの意に用ゐる者は悉則切で音ソク、例へば閉塞の類である。繡。五彩の色で繡取をしてある麗き着物、錦繡。沐猴而冠。張晏が説に、沐猴、獼猴也とある、而して師古は之を説いて、言雖著人衣冠、其心不類人也と、此説は沐猴は猿のとて、猿は人間の着る衣や冠を着ると表面は人間らしくなるが、其心は人に類せず、依然として猿であると云意である。又史記の索隱に、言獼猴不任久著冠帶以喻楚人性躁暴也とある、此の説では、猿は久しい間衣冠を着ることが出来ないから、之を以て楚人の性質の疎暴なるに喩へたのであると。然し余は前説を取る。

解釋

韓生といふ人が項羽に説いて曰ふのに、關中は周圍に山を隔て、川を帶び、四塞の要地である上に、土壤は肥え物産は豊富である、故に將軍は茲に都し、以て天下の霸王と爲られよと。此時項羽は秦の宮殿のそこなひ破れた慘狀を見て、心甚だ樂まず、且つ東の方故郷へ歸らんと思ふ念が起つて居たから、其勸めに従はないで曰ふに、凡そ人は富貴になつて故郷へ歸らなければ、錦繡の美服を着て暗夜を行くと同じく、誰れも自分の榮達を知る者が無い、故に我は一先づ故郷に歸るのであると。韓生は退いて人に話して曰ふに、世間の人が楚人を批評して、猿が冠を着けた様であると曰ふのは、如何にも道理ある批評で、余は項羽に依て、果して其事實であることを知つたと。これは項羽が自分の策を用ゐないで、關中に都せぬのは智慧の無い事で、項羽は衣冠を着た猿であると罵つたのである。項羽は之を聞いて大に怒り、韓生を捕へ之を烹殺した。

淮陰韓信家貧釣城下有漂母見信饑飯信信曰吾必厚報母母怒曰

大丈夫不能自食吾哀王孫而進食。豈望報乎。淮陰屠中少年有侮信者。因衆辱之。曰。若雖長大好帶劍。中情怯耳。能死刺我。不能出我勝下。信熟視之。俛出勝下。蒲伏。一市人皆笑信怯。

字解

漂母。漂は廣韻韻會共に匹妙切音剽。水中擊絮也とある。絮は綿なり。漢書文帝紀に、九十以上賜帛人二疋絮三斤と注に絮綿也とある。又韋昭が註に、以水擊絮爲漂。故曰漂母とある。即ち漂母とは、綿を水に晒して白くすることを職業とする老嫗である。哀。慙む氣の毒に思ふ。王孫。公子と謂ふ如く、尊稱の詞。屠中。屠は獸類を屠る(殺す)と故に屠中とは俗に云ふ穢多村で、下等人の居住して居る所。因衆。仲間の者が多く居るのを力として威張ること。中情。心の中。怯。臆病膽力無くして少しの事にも恐れること。胯。股。俛。俯に同じ。下に向くこと。蒲伏。匍匐に同じ。腹を下につけ手足にて行くこと。腹這ふ。一市人。全市の人。

解釋

淮陰縣の人韓信は、家が貧乏な爲めに諸所を流浪し、遂に淮陰の城下に來り、そこを流れる淮水で釣をして居た。此時此淮水で鎌を晒して居た漂母が、韓信の饑えて空腹らしのを見て、自分の辨當を與へて食べさせた。韓信は大に喜んで曰

ふに、我れ他日志を得たならば、必ず厚く今日の恩に報いませうと。漂母が怒つて曰ふのに、君は大丈夫と生れながら、自ら衣食することが出來ないとは何事であるか。我は只君の空腹を氣の毒に思つて一飯を與へたのである。決して報酬を望む爲に與へたのでは無いと。是は漂母は韓信を激勵させたのである。又淮陰城下穢多町の少年等は、韓信の身形の穢いのを見て常に馬鹿にして居た。或日此等の少年は、その仲間の多數居るのを頼りにして、韓信を辱めて曰ふに、汝は身體は巨大で、好んで長劍を差して居るが、心は至つて臆病であらう、それとも勇氣があるならば、その長劍を抜いて我を刺して見よ、若し刺すことが出來なければ、我が股下をくゞれと罵つた。韓信は篤と少年等の顔を視て居たが、やがて徐に身を屈めて股下を這ひ出た。之を見て全穢多町の人等は皆韓信の臆病を嘲り笑つた。因に韓信は漂母の一言に感奮し功名を立んと志した。而して功名を立つるには、小忿は忍ばざるべからざることを自覺した。故に今かゝる少年の侮辱に遇ふも甘じて之を受け、平然として股下を這ひ出たのである。若し韓信にして此時之を忍ばず、少年を相手に喧嘩したならば、必ず少年の爲に殺され、漢の三傑として雄名を青史に留むることが出來なかつたであらう。此話は韓信股くゞりと謂うて、人口に膾炙し、張良が老人の

爲めに履を取つた話と共に、忍耐の好材料として例證されるのである。

陽武人陳平。家貧好讀書。里中社。平爲宰。分肉甚均。父老曰善。陳孺子之爲宰。平曰。嗟乎。使平得宰天下。亦如此肉矣。初事魏王咎。不用去事項羽。得罪亡。因魏無知求見漢王。拜爲都尉參乘典護軍。周勃言於王曰。平雖美如冠玉。其中未必有也。臣聞平居家盜其嫂。事魏不容。亡歸楚。又不容。亡歸漢。今大王令護軍受諸侯金。願王察之。王讓魏無知。無知曰。臣所言者能也。大王所問者行也。今有尾生孝己之行。而無益成敗之數。大王何暇用之乎。王拜平護軍中尉。盡護諸將。諸將乃不敢復言。

字解

里中社。二十五家ある所を里といふ。秦より以來此里に各社を建てさせた。之を里中社と謂ふ。而して里に社を建てさせた理由は、神に年の豊穰を祈り、災害を祓うて太平を樂まんが爲である。宰。庖宰にて、神に供へた肉を切つて里中に分與する役。孺子。小僧の意。陳平未だ少年なりし故、父老之を孺子と曰へり、但し此

孺子は輕蔑の意でなく、寧親愛の意がある。都尉。武官の官名。參乘。君の後車に隨ふとて、今の陪乘に同じ。典護軍。典は主る、護は監督する、即ち諸軍の監督を主ると。如冠玉。玉を以て冠を飾ると、其外見は立派であるが、中は無で何の光りも無い、これは陳平は才能あるも德行なきに喩へたのである。盜。人目を盗んで姦通すると。嫂。兄の妻。讓。責る。詰り問ふこと。尾生。古の正直者、此の人は嘗て一女子と橋下で會合することを約束し、而して女子來らざるも猶約束を守り、大水至るも橋下を去らず、遂に橋柱を抱いて溺死した馬鹿正直な者。孝己。般の高宗の子、親に事へて至孝な人。數。運命。

解釋

陽武縣の人陳平は、家が貧乏であつたが、書を讀むことが好きであつた。少時里中の社の庖宰と爲り、肉を分配することが頗る公平であつた。そこで里中の父老は褒めて曰ふのに、彼の陳孺子の庖宰は至極宜しいと。陳平は之を聞て曰ふのに、あゝ、父老等は人を知る明が無い、若し我をして天下の宰相たらしめたならば、亦此肉を分けた様に公平に統治するのである、父老等は何故に我を以て宰相の器があるかと褒めないのかと嘆息した。偕陳平は初め魏王咎に事へたが、重用されなかつたから、去つて楚の項羽に仕へた、又罪を得た爲に逃げ去り、魏無知といふ

者に依つて漢王に面謁せんを求めた。漢王は之を引見し、直に都尉の官を與へ參乘して諸將を監督する役を命じた。時に周勃といふ者が漢王に謂つて曰ふに彼の陳平は美男子で、例へば美しい冠玉の如くあるが、其心中には何物も無い人物である。臣の聞くによれば、彼は家に居た時、其嫂と通じて不倫の行を爲し、魏に仕へて用ゐられず、逃げて楚に行き、又用ゐられずして逃げて漢に來た次第であると。これに因て見ても彼の人物の下劣なことが分る。然るに今大王は之を知らず、彼に護軍の役を命じ、我が諸軍を監督させて居なさるが、彼は又其下劣の品性を現し、諸將から賄賂を取て私腹を肥して居る、故に大王よ願くば之を察して彼を退けよと。そこで漢王は魏無知に向ひ、不良人物を推薦したとを責めた。無知が曰ふのに、臣が平を推薦して用ふべしと曰うたは、その才能の點を見込んだからである、而して大王が臣を責る點は、彼の品行である。今や漢楚兩國は天下と争ひ、實に才能の士の必要な秋である、故に縦令尾生の如き正直者、孝己如き親孝行があつたとて、國家盛衰の運命に益がなかつたならば、如何であるか、如何に大王は物好でも斯る人物を用ゐる暇はありますまいと。是は今日の如き國家安危の分るる秋には、行の高き人物の必要なく、卓絶せる才智ある人が必要である、而して陳平は才能の勝れた人傑であるから、區々たる品行などは論ずるに足らぬといふ事を論じたのである。そこで漢王も無知の説を是とし、陳平を護軍中尉の官に任じ、盡く諸將を監督させた。これより以後は、諸將は敢て陳平の事を曰ふ者が無かつた。これは陳平の手腕に心服したからである。

漢王追項羽至固陵、韓信彭越期不至。張良勸王以楚地、梁地許兩人。王從之。皆引兵來。黥布亦會。羽至垓下。兵少食盡。信等乘之。羽敗入壁。圍之數重。羽夜聞漢軍四面皆楚歌。大驚曰：漢已得楚乎？何楚人多也。起飲帳中。命虞美人起舞。悲歌慷慨。泣數行下。其歌曰：力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。騅者羽平日所乘駿馬也。左右皆泣。莫敢仰見。羽乃夜從八百餘騎潰圍南出。渡淮。迷失道。陷大澤中。漢追者及之。至東城。乃有二十八騎。羽謂其騎曰：吾起兵八歲。七十餘戰。未嘗敗也。今卒困此。此天亡我也。非戰之罪。今日固決死。願爲諸君決戰。必潰圍斬將。令諸君知之。皆如其言。於是欲

東渡鳥江亭長艤船待曰江東雖小亦足以王願急渡羽曰籍與江東子弟八千人渡江而西今無一人還縱江東父兄憐而王我我何面目復見獨不愧於心乎乃刎而死

字解

漢王。沛公。垓下。邑の名。壁。トリデ。城壁。帳。張り廻したる幕。悲歌。かなしみ歌ふ。慷慨。士の志を得ずして憤激すること。慄は悲み歎く。慨は憤り激する意。泣。ナミダと訓む。涙なり。數行。行は列なり。涙が幾筋となく顔にふりかゝること。蓋世。蓋は覆也。掩也。世は天下。即ち傘を以て身を掩ふ如く廣い天下を一面を掩ふこと。時。時運。騅。釋畜に蒼白雜毛騅也とある。即ち騅は青白色の毛色の馬で、その毛色を取つて馬の名としたのである。不逝。進み行かない。駿馬。一日千里を奔る程の立派な馬。潰。亂す。敵をくづし破つて潰亂させること。鳥江。史記の索隱に、鳥江、晉初屬臨淮と、又正義に、括地志云、鳥江亭即和州鳥江縣是也。晉初爲縣。注水經云、水又北。漢書所謂鳥江亭長艤船以待項羽即是也とある。故に鳥江は鳥江亭縣にある川の名。亭長。鳥江亭縣の長官。艤。船を準備して岸に着けて待つて居ること。縱。假令に同じ、全體サウハナラヌ筈デアアルガ、マア許シテサウシテ見タトコロデといふ意。約して曰へば、サウシタトコロデの意。何面目。面目は顔の意。俗に「ドノ顔ヲ以テ、或は「ドノ面ヲ下ゲテ」の意。自刎。刎はクビハネルと訓む。首を斷つこと。即ち自刎は自分で自分の首を斬ること。

解釋

漢王は項羽を追撃して固陵に至つた。此の時韓信と彭越の二人は此の追撃に参加する筈であつたが、約束の期日通り來なかつた。これは二人が漢王に對して不平があつたからである。そこで張良は、漢王に楚の地を以て韓信に與へ、梁の地を以て彭越に與へることを許せよと勧めた。漢王は之に従ひ、その旨を二人に傳へたところ、二人は果して兵を率ゐて來た、又鯨布といふ將軍も來り會した。依て漢軍は大に振ひ、いよく項羽を撃滅せんと期した。さて項羽は退いて垓下に陣したが、此の時は既に兵數も少く、且つ兵糧も盡きて居た。而して韓信等は項羽の此の窮境に乗じて、激しく攻め寄せたから、項羽は大に敗れ、遂に城中に入つて防禦した。漢の軍は之を七重八重に取り圍んだ。かくて項羽は夜る城の四面の漢軍から盛んに楚國の歌を歌ふ聲がするのを聞き、大に驚いて曰ふのに、漢は既に楚の地を得たのであるか、何ぞその軍に楚人の多いことであるかと。これは項羽が漢軍に楚歌する者多きを見て楚人皆既に漢に歸せしを知つて運命の盡きたの

を嘆息したのである。依て項羽は討死の覺悟をなし、最後の訣別クワダツをする爲めに、起つて帳中に酒宴を開いた。酒三行にして寵愛せる虞美人に命じて起つて舞はせ、自らも亦悲歌を歌つて慷慨し、血涙は雨の如く下つた。且つ歌を作つて曰ふのに、我が力は山を引き抜くに足り、我が意氣は天下を掩ふに足るのである、我れ既に此の力と此の意氣があるから、何を企て何を欲しても成就すべき筈である、然るに今は戦は敗れてかゝる悲境に陥つたのは、全く時運の我に利ならざるが爲めである、嘗て千軍萬馬を物ともせず、猛然として馳せ廻つた此の驍も、今は進まんとする勢も無い。さて、我は此の驍の進み行かないのを如何ともすることが出来なくなつたが、尙一層残念なことは、虞よ虞よ、我は汝を如何にしようか、如何にしても救ふことが出来ず、共に空しく死なねばならないのであると。驍とは項羽が常に戰場を乗り廻した駿馬である。此の時項羽の左右の臣は皆泣き、一人として面を上げて項羽を見る者が無かつた。かくて項羽は夜暗に乘じ、八百の騎馬武者を従へて漢軍を突破し、南の方へ進出した、そして淮水を渡らんとしたが、道に迷うて大澤の中に陥り、進退窮まつた。そこへ漢の兵が追うて來たから、又東城を指して退いた。此の時項羽に従ふ者は、僅かに二十八人の騎馬武者のみであつた。項羽は此の二十八騎に謂うて曰ふのに、我は兵を起してから今日に至る迄八箇年間で、此の間七十餘回の戦争をしたが、嘗て一度も負けたことが無かつた。然るに今かく破れて茲に困む様になつたのは、是れは天が我を亡すのであつて、決して我が戦争の下手な爲めでは無いのである。我は既に死を決して居るから、願くは諸君の爲めに決戦し、必ず漢軍を破つてその將を斬り、諸君をして我が今日の境遇は、決して我が戦の罪で無くして、天の我を亡すのであることを知らせたいと。かくて項羽はその言の如く漢軍を破つてその將を斬つた。そして東の方烏江を渡らんとした。此の時烏江亭縣の長官が、船を用意して項羽を待つて居て曰ふのに、我が江東は小なる土地であるが、亦王と爲ることが出来る、故に將軍よ、早く渡つて江東へ行きなさいと。項羽が曰ふのに、我は初め江東の子弟八千人と共に江を渡り、西の方秦へ向つて進軍した、然るに此の子弟は皆戦死し、今は一人も歸り來る者が無い、故に縦ひ江東の父兄が、我を憐んで王としても、我は何の顔があつて、再び此の父兄を見ることが出来ようぞ、我は獨り心で耻ぢて居るから、見ることが出来ないと。遂に自ら刎ねて死んだ。

これは項羽の末路である、而して其の虞兮虞兮の詩は、千古の絶唱で、人口に膾炙クワイシヤさ

れて居るから、今くり返して説明をする。第一句の力拔山兮氣蓋世は、自ら其大抱負を述べたので、措辭雄豪にして、意氣天地を吞吐するの概があるが、第二句の時不利兮離不逝は、前句の勇壯なるに似ず、意氣頓に銷沈し、深くその不運を悲んだのである。第三句の離不逝兮可奈何は、第二句の離不逝兮の句を受け、以て自ら第四句との地を爲し、第四句の虞兮虞兮に至つては、全く絶望の嘆聲を漏らしたのである。嘗て威風堂々天下の諸侯を震懾せしめたる項羽も、今は空しく四面重圍の孤城に在り、夜色沈々として孤燈影暗き處、窈窕花よりも美なる絶世の美人と相對し、刺々として離別の悲をかこち、潜々として不覺の暗涙に咽んだのである故に一たび彼れが境遇と胸中とを察せば、人をして覺えず萬斛の涙を注がせ、勇氣絶倫の梟雄を忘れて、その不運を悲ませるのである。吾輩史を讀んで此に至る毎にその史傳の域を離れて、悲愴なる詩歌の別天地に入るの感を爲し、慄悍なる英雄も、純乎たる詩人と化し去つたのを覺ゆるのである。英雄必ずしも無情の人で無く、血もあり涙もある。沈徳潜が「可奈何奈何、嗚咽纏綿、從古眞英雄、必非無情者」と評したのは如何にも我が意を得て居る。

置酒洛陽南宮。上曰。徹侯諸將皆言。吾所以得天下者何。項氏所以失

馬鹿野郎

誰がたのよ、所を破つては、

各々その本能を遺憾なく發揮させた。是れが我が天下を得た大なる理由である。彼の項羽は一人の謀臣范増があつても、よく之を用ひることが出来なかつた。このその我が爲めに擒にされたわけであると。群臣は之を聞いて、皆成程と感心し、その説に悦服した。

留侯張良謝病辟穀。曰。家世相韓。韓滅爲韓報讎。今以三寸舌爲帝者師。封萬戶侯。是布衣之極。願棄人間事。從赤松子遊耳。良少時於下邳圯上遇老人。墮履圯下。謂良曰。孺子下取履。良欲歐之。憫其老。乃下取履。老人以足受之。曰。孺子可教。後五日與我期於此。良如期往。老人已先在。怒曰。與長者期。後何也。復約五日。及往。老人又先在。怒復約五日。良半夜往。老人至。乃喜。授以一編書。曰。讀此可爲帝者師。異日見濟北穀城山下黃石。即我也。旦視之。乃太公兵法。良異之。晝夜習讀。既上定天下。封功臣。使良自擇齊三萬戶。良曰。臣始與陛下遇於留。此天以臣授陛下。封留足矣。後經穀城。果得黃石焉。奉祠之。

字解 留侯。留は縣の名、張良は留縣に封せられたから留侯というた。謝病。病と稱して引退すること。辟穀。辟は避くに同じ、穀類を食せずして神仙の術を修むること。史記留侯世家に、留侯性多病。即導引不食穀と、注に服避穀之藥而靜居行氣とある。導引とは今の語で曰へば深呼吸法であらう、史記龜策傳に、南方老人用龜支牀足行。二十餘歲老人死。移牀龜尚生不死。龜能行氣導引。問者曰、龜至神若此とある。又梁書陶弘景が傳に、善辟穀導引之法。年逾八十而有壯容とある。又行氣は導氣と同じで、論衡に、道家或以導氣養生度世而不死。以為血脈在形體之中。不動搖屈伸。則閉塞不通。不通積聚則為病而死とある。以上の引例で辟穀は仙術を修する意であることが分るであらう。帝者師。帝者は漢王を指し、師は軍師のこと。封萬戶侯。戶數が萬もある土地に封せらる、大名となつたこと。赤松子。古昔神農氏の時代の仙人の名。下邳。縣の名。圯上。圯は土橋。墮落す。履。ハキモノ。くつ。歐。殿に同じ撃ち打く。憫。憐なり、氣の毒に思ふ。期。時刻を定めて會合を約すること。長者。年上なる尊者、こゝは老人自ら謂ふ。後。約束した時刻に遅れること。一編書。昔は紙が無かつたから、竹簡に字を書き、之をなめし皮で纏んだのである、故に一編書といふ。異日。後日。濟北。郡の名。黃石。黄色の石。異。不思議に思ふ。佐。助ける。

解釋

留侯張良は病氣の爲めに、穀類を食はないで仙術を修めた。そして曰ふのに、我が家は代々韓の宰相であつた、而して韓は秦の爲めに滅されたから、我は漢王を助けて秦を滅し、よく韓の爲めに仇を報いた。且つ我は三寸の舌を以て帝王の軍師となり、萬戶侯に封せられた。是れ無位無官の我に於ては、無上の光榮である。然し久しく此の光榮に居るは不祥であるから、願くは今から人間社會の事を棄て、仙人と爲り、彼の赤松子の仲間に入つて遊び樂みたいものであると、かくいうて遂に隱遁した。さて、張良は年若い時に、下邳縣の土橋の上で、或る老人に出遇うた。此の時老人は自分のはいて居る履を橋の下に落した、そして張良に謂つて曰ふのに、小僧よ、汝は下りて我が履を取つて來よと。張良はその無禮を怒り、之を毆打せんとしたが、その老人なるを憐み、下りて履を取つてやつた。ところが老人は、又無禮にも、足で之を受け取つた。そして曰ふのに、小僧よ、汝は教ふべき男であるから、今日から五日目の何時に、我れと再び此に會せよと。依て張良は約束の時刻に行つたところが、老人は既に來て居た。そして怒つて曰ふに、小僧、汝は長者と約束して後れたのは何故であるか、無禮至極であるから今日は教ふることが出來ない、故

に又五日目の同じ時刻に此に來いと張良は又その時刻に行つたところが老人は又先に來て居て、前の如く怒つて又五日を約した。そこで張良は夜半から行つたところが、今度は老人は居なかつた。かくてしばらく待つて居る内に、老人は來た。そして大に喜んで一編の書を授けて曰ふのに、此の書を精讀すると、必ず帝者の軍師と爲ることが出来るから、よく讀めよと、且つ曰ふのに、汝は異日濟北郡の穀城山の下で、黄色の石を見ることがあるであらうが、その黄石こそ我れであると、かく曰うて別れ去つた。張良は翌朝早くその本を見たところが、乃ち周の文王の軍師なる太公望が書いた兵法であつたから、大に不思議に思ひ、日夜熱心に讀み習つた。かくて張良は此の兵法を以て漢王を助けて天下を定めたのである。さて漢王は既に天下を定めて後、功臣を封する時に當り、特に張良の偉勳に酬いる爲めに、張良をして齊の地に於ては、どこでもよいから、その好む所、三萬戸を擇び取れと命じた。張良が曰ふに、臣は初め陛下に留縣で拜謁し、それから以後陛下に臣事する様になつたのであるから、是れ天が臣を陛下に授けたのである、故に臣は紀念の爲めに留縣を得れば充分であると。依て漢王はその言ふ通り留縣を賜ひ、留侯と稱するに至つたのである。その後張良は穀城山の下を通つたところが、昔老人の曰うた通り

果して黄石があつたから、祠を建て、之を祀り、以てその恩徳に酬いた。

人有上書告楚王韓信反。諸將曰。發兵阬孺子耳。上問陳平。平危之曰。古有巡守會諸侯。陛下第出僞遊雲夢。會諸侯於陳。因禽之一。力士之事耳。上從之。告諸侯。會陳。吾將遊雲夢。至陳。信上謁。命武士縛信。載後車。信曰。果若人言。狡兔死。走狗烹。飛鳥盡。良弓藏。敵國破。謀臣亡。天下已定。臣固當烹。遂械繫以歸。赦爲淮陰侯。

字解

上書。上奏に同じ。阬。坑に同じ。穴を掘つて生き埋にすること。孺子。韓信を指す、輕侮の語。巡守。天子が諸侯の國を巡回して視察すること。書經に五載一巡守。群后四朝とある。第。タダと訓む、何氣無き風での意。雲夢。楚の國にある二つの澤の名。禽。擒に同じ。上謁。名刺を上り謁見を請ふこと。果若人言。これは韓信が蒯徹(史記に蒯徹の言を思ひ出して曰うたのである。蒯徹は嘗て韓信に説くに、野獸已盡而獵狗烹と曰ひ、今は天下既に定まつたから、足下は漢王に殺されること疑が無い、故に謀叛せよと勧めたことがあつた、その詳細は史記淮南陰侯傳にある。狡兔。走ることの敏捷なる兔。藏。不用に爲つた爲め蔵の中

76
987
17306
9
30
一一六

入れてしまつて置かれこと。狡兔云々より謀臣亡迄の語は、黄石公が著した三略といふ書の中にある言である。械繫。手と足をしばられること。

解釋 或る人が上書して楚王の韓信が謀反したと告げた。そこで諸將が曰ふのに、曰く兵を發して彼の小僧を生擒し、之を生理にしてやらうと。然し漢王は重大なる事件であるから、之が策を陳平に尋ねた。陳平が曰ふのに、古へは天子が巡守して、諸侯を一所に會合させたことがあつた、故に今陛下も此の故事に倣ひ、但だ雲夢に遊ぶと偽り、諸侯を陳に會合させられよ、然らば韓信も必ず來るであらうから、其時之を捕へたならば、一力士の仕事で、易く捕へることが出来る。漢王は此の計に従ひ、諸侯に令して曰ふのに、我れ將に雲夢に遊ばんとするから、卿等は陳に會せよと。かくて漢王は陳に至つた。而して韓信は果して來て上謁したから、直く武士に命じて之を捕へ、しばつて後車に載せて歸つた。韓信は大に悔いて曰ふに、さて、果して或る人の言の通り、我は遂に殺されるのであるか、彼の黄石公の三略にも狡兔が死んでしまへば之を捕へる爲めに奔走した狗は、必要が無いから烹殺され、空を飛ぶ鳥も既に射盡してしまへば、良弓は不要の廢物となつて、倉庫にしまはれることである、これと同じく敵國が滅んでしまへば、謀臣は必要が無いから、殺

されると書いてあるが、實にその通りで、今は敵國も既に亡んで了つたから、臣は無用の長物と爲り當さに烹らるべき運命になつたと、かく曰うて憤慨した。漢王は韓信の手足をしばつて連れて歸つたが、後にその罪を赦して淮陰縣に封じ、淮陰侯とした。

上嘗從容問信諸將能將兵多少。上曰如我能將幾何。信曰陛下不過將十萬。上曰於君何如。曰臣多多益辨。上笑曰多多益辨何以爲我禽。曰陛下不能將兵而善將將。此信所以爲陛下禽。且陛下所謂天授非人力也。

字解 從容。ゆつたりとしてくつろぐ、即ち其容止が莊重でなくて如何にも穩かであること。辨。周禮天官の注に、辨謂辨然于事分明無有疑惑也とある、即ち何等の疑懼する所無く、明に指揮處辨すること。天授。天が人君とする爲めに推へた人の意。

解釋 漢王は嘗て從容として韓信と共に諸將の人物を評し、彼れは幾何の兵に將たることが出来るか、此れは何人に將たる技倆があるかと、各將に對し、その將とな

家臣也

ることが出来る兵數の多少を問うた。且つ曰ふのに、我は幾何の兵に將たること
が出来るか。韓信がいふのに、陛下は十萬人に將たる人である。漢王がいふ
のに、君はどうであるか。韓信がいふのに、臣は兵數が多いければ多い程益々敏
活に指揮辨理することが出来る。漢王が笑つて曰ふのに、果して然らば君は我れ
より優れた人である。然るに何故に我れに擒にせられたのであるか。韓信がい
ふのに、陛下は兵に將たることが出来ないが、よく將に將たる技倆がある。是れ臣が
陛下の爲めに擒にされた所以である。且つ陛下は世に謂ふ所の天から授けられて
人君と爲る者であつて、到底人間の力で企及することが出来ない人である。

剖符封功臣。鄼侯蕭何食邑獨多。功臣皆曰。臣等被堅執銳。多者百餘
戰。少者數十合。蕭何未嘗有汗馬之勞。徒持文墨議論。顧反居臣等上
何也。上曰。諸君知獵乎。逐殺獸者狗也。發縱持示者人也。諸君徒能得
走獸耳。功狗也。至如蕭何。功人也。群臣莫敢言。

字解 剖符封功臣 剖は分つ、玉篇に判也、中分爲剖とある。符は説文に信也、漢制以
竹長六寸、分而相合と。玉篇に符符節也、分爲兩邊、各持一以爲信とある。即ち符は剖

符で、一は之を官に留め、一は之を其の人に與へ、以て他日誓約の證とするものであ
る。故に剖符は功臣に土地を與へたことを證する爲めである。曹植の詩にも、剖符
受土とある。被堅、堅固な冑をかぶる。執銳、銳利な刀を持つ。數十合、合は
合戰、仕合の意。汗馬之勞、汗はアセ、戰場に於て盛に馬を疾驅さすれば汗出づ、故
に汗馬之勞とは戰場に於て奮戰すること、即ち戰功といふ義。顧、念也。發縱、
發はつないだ綱を解き放つ、縱はほしきまゝに放つ。指示、手で指示して使ふこ
と。

解釋 漢王は既に天下を定めたから、符を分つて各功臣を封じた。この時鄼の邑
に封せられた蕭何の地行は、獨り特別に多かつた。そこで群臣は皆曰ふのに、臣等
は、常に堅甲をかぶり、銳刀を持ち、多い者は百餘戰、少いものでも數十回の合戰をし
た戰功がある。然るに彼の蕭何は、未だ何等の戰功も無く、只徒に文書や筆墨を以
て議論しただけである。それにも係はらず、その地行は我等より多いのは何故であ
るか。漢王が曰ふのに、諸君は彼の獵を知つて居るか。獸を逐ひ廻はして殺す者
は狗であるが、此の狗の首繩を解き放ち、彼の獸を逐へ、此の獸を取れと、手で指し示
して使ふ者は人である。今諸君と蕭何との關係も此れと同じで、諸君は唯徒によ

く走獸を得た丈であつて、その功は狗である、蕭何は諸君を指揮して戦に勝たせたのであるから、その功は人である、人の功は固より狗と同一にすることは出来ない、是れ蕭何の地行の諸君より多い所以であると諭した。そこで群臣は爾來論功行賞について不平を言ふ者が無かつた。

帝詔捕蒯徹。至曰：秦失其鹿，天下共逐之。高材疾足者先得之。當時臣獨知韓信，非知陛下。天下欲爲陛下所爲者甚衆，力不能耳。又不可盡烹邪。帝赦之。

字解

蒯徹。史記に蒯通に作る、韓信に臣事し、之に獨立を勧めた人。鹿。帝位に

諭ふ。今も議員選舉界を逐鹿場裡といふ。逐。鹿であるから逐というたので、實は帝位を得んとして之を争うたこと。高材。材力高く衆に卓出した者。疾足。走るのが早く舉措の敏捷なること。不可の不可の字は衍文である、無い方がよい。

解釋

漢帝高祖は、詔して韓信の臣蒯徹を捕へさせた、これは、帝は、蒯徹が嘗て韓信

に謀反を勧めたことを知り、所謂謀反連類者として烹殺さんとする爲であつたのである。さて蒯徹は漢帝の前に出で、その尋問に對へて曰ふのに、抑々秦が帝位を失ひ、天下の英雄は皆之を得んとして互に活動した、而して此の帝位は高材にして疾足の者が先に之を得べき筈である。從て英雄が互に之を競争して居る間は、天下には確定した君主は無かつたのであるから、英雄の逐鹿を以て謀反と爲すことは出来ない。特に秦が帝位を失つた時は、臣は、唯韓信だけあるのを知つて陛下のあることを知らなかつた、故に當時臣が韓信に鹿を得ることを勧めたのを以て、陛下に對する謀反と爲すことは出来ないのである。然るに今陛下は、臣が韓信に鹿を得よと勧めた事を以て、臣を烹殺さんとするのは何事であるか、一向理由が無い。又當時天下の人は陛下の爲した所の事、即ち皇帝と爲らんと欲し、陛下と競争した者が多かつたが、皆高材にあらず、疾足にあらず、微力の爲めに成功しなかつたのである、故に事實をいへば陛下を敵とした者は澤山あつたのである。今陛下は臣が韓信に鹿を得よと勧めた一事を以て謀反連類者として烹るならば、此等明白に陛下を敵とした澤山の者は勿論皆捕へて之を烹るべき筈である、陛下は果して悉く之を捕へることが出来るか、若し果して之を捕へることが出来ないで獨り臣のみを捕へて烹るのは不公平である、況んや臣の行動は決して陛下に對する謀反で無いのに於ては、尙更ら不條理であると。蒯徹はかく堂々として意見を述べた。ここで漢帝もその道理に服し、遂に之を赦した。

陸賈時前說詩書。帝罵之曰。乃公馬上得天下。安事詩書。賈曰。陸
 馬上得之。寧可以馬上治之乎。文武並用。長久之術也。使秦並天下。
 仁義法先聖。陛下安得有之。帝曰。試爲我著書。秦所以失。吾所以得。及
 古成敗。賈著書十二篇。每奏稱善。號曰新語。

字解

詩書。詩は詩經といふ本で、此の本は孔子が殷から春秋時代に至る迄の詩
 を輯めたものである。此の詩は、後世の詩人が、徒らに山水風月を樂んで詠じたのと
 其趣を異にし、當時の賢人君子が人情風俗を咏じ、或は王政の興廢盛衰を述べたも
 のであつて、王者には尤も必要な本である。又書は書經、一に尙書といふ本で、此の
 本は堯舜二帝及び夏殷周三王の政教を記録したもので、亦王者には尤も大切な本
 である。乃公。乃は汝、公は漢王自ら謂うたので、君の意即ち汝が公といふことで、
 自ら己を尊稱した辭である。馬上得天下。武力を以て天下を得たと。長久之術。
 天長地久の意で、何萬年の後迄も天下を維持する術。法先聖。法は手本とする、先
 聖は古への聖人で、即ち堯舜及び禹王湯王文王武王等を指す。

解釋

陸賈は時々漢帝の前に進み出で、詩經書經の事を説いた。漢帝は之を罵つ
 て曰ふのに、吾輩は馬上を以て天下を得たのであるから、安んぞ詩書の必要あらん
 や、詩書の如き文學は必要が無いと。陸賈が曰ふのに、陛下は如何にも馬上を以て
 天下を得たのであるが、どうして馬上を以て天下を治むることが出来ようか、馬上
 の武では到底天下を統治することは出来ないのである。凡そ國家長久の術は、文
 と武とを並び用ゐるに在るのである。彼の秦をして天下を併有した後、仁義を行ひ
 先王の道を手本として國家を治めさせたならば、秦の帝位は盤石の如くで、縱令陸
 下の英武を以てしても、安んぞ之を滅して帝位を取ることが出来ようか、決して出
 來なかつたのである。秦が陛下に滅ぼされたのは全く文を用ゐなかつた爲めで、
 文は必要であると述べた。漢帝が曰ふのに、汝は誠に乃公の爲めに一書を著はせ
 よ、その主意は、秦が天下を失つた所以と、乃公が天下を得た所以と、及び古へ人君が
 成功した理由と失敗した理由とを明かに述べよと。そこで陸賈は書十二篇を著
 した。そして每篇とも出來るとすぐ奏した。漢帝はいつも善と稱して之を褒めた
 が、後に此の書を新語と稱した。

帝破黥布還過魯以太牢祠孔子過沛置酒召宗室故人飲酒酣上自
 歌曰。大風起兮雲飛揚。威加海內兮歸占鄆。安得猛士兮守四方。令沛

中子弟習歌之以沛爲湯沐邑。

時に用ゐるのである。宗室。一族。故人。舊い友達。大風起兮雲飛揚。これは群雄が蜂の如く起り互に競逐して天下を争ひ天下大に亂れたるをいふ。李翰が風は高帝自ら喩へ、雲は亂に喩ふといへるは餘り贅つた説である。威加海内。高帝既に反賊を平定し、威權海内を風靡したることをいふ。湯沐邑。湯沐は、ユアミ、(湯浴)ケシヤウ(化粧)邑は村、その邑の賦税を以て帝の湯沐の費用に充つること。

解釋

漢帝高祖は、叛賊黥布を破つて之を誅し、帝都に凱旋した。此の途中故の魯國に往いて孔子の廟に詣で、太牢を供へて鄭重に之を祭つた。又故郷の沛に行き、一族及び故舊を集めて、盛宴を張つた。宴酣なる時、高祖は感慨に堪へず、自ら歌を作つて曰ふのに、秦其政を失つて天下大に亂れ、恰も大風が吹き起つて黒雲滿天に飛揚するが如くであつた。然るに我は能く之を平定して、威權海内に加はり、今や戀しき故郷へ歸つたことである、是れ實に快心の樂事で、天下何物が此の樂に優るものがあらうぞ、眞に無限の快事である。しかし今後我が勉むべき事は、安に居つて危を忘れない事であるから、我は勇猛の壯士を得て、天下四方を守備したいものであると。かくて沛中の小年輩をして此の歌を一齊に習ひ歌はせたり。又沛の邑を以て帝自らの湯沐の邑とした。これは帝は最初に沛から起つたのであるから、これを紀念とする爲めであつたのである。この歌の末句安得猛士守四方は別に深い意義は無く、天下已に平らぎて安心したから、是れから後は猛將を得て四方の守備でも致さんとの意で、勝つて兜の緒を緊めよといふ事と同義で、單に將來の希望を述べた迄である。

高祖は匹夫から起つて天下を統一したが、功臣宿將中には不平を抱き、やゝもすれば反謀を揚げんとする者があつた故に、高祖は未だ枕を高くして眠ることが出来なかつた、然るに韓信は既に亡び、今や黥布も又誅せられ、天下初めて鎮靜に歸したから、高祖も漸く安心することが出来たのである。此に於て錦を衣て故郷に歸り、一族故舊を集めて飲んだので、此の時萬世の英雄も一個の好々爺と化し去つたのであるが、一面には得意の情勃々然として禁ずる能はず、溢れて此の一篇の歌となつたものである。此の歌は彼の項羽の垓下の詩と共に、氣格雄大にして豪壯、直ちに胸襟を披瀝して、少しの技巧修飾を加へず、自ら天籟飄發、絶妙の詩篇となつたので、天下一あつて二ある能はざる逸品である。寧可以馬上治之乎と豪語した荒武

者も、文事あること此の如しで、所謂英雄欺人ものである。

孝文皇帝益明習國家事。朝而問右丞相周勃曰：「天下一歲決獄幾何？」勃謝不知。又問：「一歲錢穀出入如何？」勃又謝不知。惶愧汗出沾背。上問左丞相陳平。平曰：「有主者。即問決獄。責廷尉。問錢穀。責治粟內史。」上曰：「君所主者何事？」平謝曰：「陛下使待罪宰相。宰相者上佐天子理陰陽。順四時。下遂萬物之宜。外鎮撫四夷。內親附百姓。使卿大夫各得其職焉。帝稱善。勃大慙。謝病免。」

字解

明習。明に知らんと欲して習ひ務むること。惶愧。惶は恐れ懼る、愧は耻ぢる。

主者。主として其事を掌る者。廷尉。刑罰を掌る官。今の裁判官に同じ。治粟內史。金錢や米穀の出納を掌る官。使待罪宰相。卑下して言ふ辭、即ち宰相の官に任じ下さつたといふ意。佐。補佐。四夷。東夷、西戎、南蠻、北狄。理陰陽云々。凡そ宰相の施政が善ければ、陰陽は調和し、四時は順當になる者であるが、之に反して施政が悪しければ、天災地變は頻繁に起る者である。

解釋

孝文皇帝は常に國家の政務に明習せんことを期し、勵精して治を計つた。

嘗て朝廷で、右丞相の周勃に問うて曰ふのに、凡そ天下中に於て、一ヶ年間に、決斷する獄事は何程あるかと。周勃は謝して知りませんと對へた。帝は又問うて曰ふのに、然らば一ヶ年に於ける錢穀の收入と支出とは何程であるかと。周勃は又謝して知りませんと對へた。そして周勃は下問に奉答することが出来なかつたことを惶愧し、冷汗が背中を沾した。依つて帝は此の二事に就いて、改めて左丞相の陳平に尋ねた。陳平は答へて曰ふのに、御下問の件については、各主として掌る者がある。故に若し治獄の事を御尋ねなさいたいならば、廷尉に問うて下さい。又錢穀の事を御尋ねなさいたいならば、治粟內史に問うて下さい。さうすると直ぐに分ると。帝が曰ふのに、然らば卿の掌る職務は何であるかと。陳平は拜謝して曰ふのに、陛下は辱なく臣を宰相に任じて下さつた。さて宰相の任務は、上は天子を輔佐して天地陰陽を調理し、春夏秋冬の四時を順當ならしめ、下は禽獸草木蟲魚の類に至る迄、すべて萬物の宜しきに従ひ、各其の生を遂げしめる者である。又之を外にしては、四夷を鎮定慰撫して悦服せしめ、之を内にしては、百姓を親和附從せしめるのである。其他卿や大夫の職に在る者をして、各其職を得せしめ、才を適所に置き、各其才能を盡さしむる者で、これ等の事を圓滿に實行す。

相の任務である。帝は此の答に満足して嘉納した。そこで周勃は陳平に若かざるを知りて大に耻ぢ、病と稱して右丞相の官を退いた。

張釋之爲延尉。上行中渭橋。有一人橋下走。乘輿馬驚。捕屬延尉。釋之奏犯蹕當罰金。上怒。釋之曰。法如是。更重之。是法不信於民。延尉天下之平也。一傾天下用法。皆爲之輕重。民安所措手足乎。上良久曰。延尉當是也。其後有盜高廟玉環。得下延尉治。釋之奏。當棄市。上大怒曰。人盜先帝器。吾欲致之族。而延尉以法奏之。非吾所以共承宗廟意也。釋之曰。盜宗廟器而族之。假令愚民取長陵一抔土。何以加其法乎。帝許之。

字解

上。孝文皇帝を指す。中渭橋。渭水に三橋を架せり、これはその中に架せし橋。犯蹕。天子の出入には、必ず先づ道を清め、通行を禁止する者なり。而して其出づるを警と稱し、入るを蹕と稱す、故に犯蹕とは還幸の通路を妨げたこと。高廟。高祖の廟。玉環。玉の環で腰に帶ぶる者。治。罪を裁判させる。棄市。殺して其屍を市に晒す罪。族。三族を誅する罪。三族とは、父母及妻の親族。共承。共は恭に同じ、恭しく奉仕する。假令。譬なり。假定の意。長陵一抔土。長陵は高祖の墓の名、抔は手で物を掬ふこと、故に一抔土は、一すくひの土、これは明かに山陵を毀撤すると曰ふことが出来ないから、一抔土を取るを以て譬と爲したのである。

解釋 張釋之が延尉と爲つた。孝文皇帝は嘗て馬車に乗つて中渭橋を通つた。此の時一人の男が突然橋の下から走り出た。その爲めに皇帝の馬車の馬は驚き騷いだ。依て皇帝はその男を捕へ、延尉に命じてその罪を裁斷させた。釋之が奏して曰ふのに、この男は陛下の蹕を犯したのであるから、罰金刑に當つべきものであると。皇帝はその罪が餘り軽いのを怒つた。釋之が曰ふのに、之を法律に照せば罰金刑が正當であるから、軽くとも仕方が無い、若し之を曲げて重刑に處したならば、法律は天下の人民に信用せられなくなるのである。元來延尉の官は、是非曲直を公平に判定する者である。即ち天下の公平を保つ者である。然るに若し一度でも偏重偏輕に傾き、公平を失したならば、天下の法は皆これが爲めに亂れ、軽い罪も重く處せらるゝといふ失態を來す様になる。果して然らば、天下の人民はとうして安心して手足を置く所があらうか、實に安心して生活することが出来なく

棄市
刑

なるのである。故に法は曲げることには出来ない。皇帝は之を聞きや、久しく考へて後曰ふのに、廷尉が法律を適用することは至當であると。其後或る人が高廟の玉環を盗んだ。而して之を捕へ得たから、廷尉に下しその罪を處理させた。釋之が奏して曰ふのに、此の男は棄市の刑に當つべきものであると。皇帝は又その罪の輕いのを怒つて曰ふには、先帝の重器を盗んだ不埒な奴は、我は之を族刑に處せんと思ふのである。然るに廷尉は法律に據り、棄市の刑が正當であると曰ふのは、甚だ我が意を得ぬことである。此の如き不敬漢を、此の如き輕罪に處するのは、是れ朕が先帝の廟に恭承する所以の道で無いと。釋之が曰ふのに、宗廟の器を盗んだ爲めに、之を族刑に處したならば、假令へば一の愚民があつて、先帝の陵墓を毀つた場合には、如何なる法を以て、それに刑を加へんとするか、恐らくは刑の加へ方が無いだらうと。皇帝は遂に釋之の條理ある言に従ひ、遂に釋之が奏した通りに許可した。

孝文皇帝崩。在位二十三年。宮室苑囿。車騎服御。無所增益。嘗欲作露臺。召匠計之。直百金。上曰。中人十家之產也。何以臺爲。身衣弋綈。所幸慎夫人。衣不曳地。示朴爲天下先。吳王不朝。賜以几杖。張武受賂金錢。

更加賞賜。以愧其心。專以德化民。當時公卿大夫。風流篤厚。耻言人過。上下成俗。是以海內安寧。家給人足。後世莫能及。葬霸陵。

字解 苑囿。苑は花卉草木を植ゑてある庭。囿は禽獸を放ち畜うてある庭。車騎。馬車。服御。衣服。露臺。臺の上に屋なきもの。臺は土を累ねて高く造つたもの。直。價。即ち建築費。中人。中等社會の人民。弋綈。弋は黑色、綈は粗なる細。先。帥。先身先の意で、自ら先に爲して人を導くこと。几杖。几と杖、几は脇息、風流篤厚。風は遺風、流は餘流で、即ち感化を受けたこと。篤は篤實、厚は温厚。給。供給の豊なること。

解釋 孝文皇帝が崩御した。帝は在位二十三年間で、その間自ら儉素を守り、宮殿苑囿、車馬、衣服等は奮のまゝで、少しも増益しなかつた。嘗て露臺を造らんと欲し、工匠に命じて之を設計させた。ところが工匠は其建設費百圓と見積つた。皇帝が曰ふのに、百圓は中等の人民十軒分の財産に當るから、どうして露臺の如き贅澤物を造ることが出来ようぞと曰うて、之を中止した。而して自身は常に弋綈の如き經濟的の衣服を着、特に寵幸して居る慎夫人の如き者にも、その衣服を短く仕立させたから、夫人の裳は地に曳かなかつた。かく自ら質朴儉素を示し、以て天下人

韓時休
孝文皇帝崩
二十三年
宮室苑囿
車騎服御
無所增益
嘗欲作露臺
召匠計之
直百金
上曰
中人十家之產也
何以臺爲
身衣弋綈
所幸慎夫人
衣不曳地
示朴爲天下先
吳王不朝
賜以几杖
張武受賂金錢

民の帥先と爲つて之を導いた。嘗て吳王濞といふ者が參朝しなかつた時に、之を咎めないで几杖を賜うて之を諷した。これは吳王の參朝せぬのは、皇帝に對し不平を懷いて居たからであつて、老年の爲めでは無かつたのである。然るに皇帝はわざと几杖を賜うて之を諷し、暗にその參朝を促したので、所謂真綿で首を締める筆法である。又張武といふ者が賄賂を取つた時にも、之を査問糾治せずして、反て更に褒美として金を賜ひ、以てその心を愧かしめた。此の如く皇帝は徳を以て人民を化育したから、當時の三公九卿や大夫は、皆皇帝の風流に化せられて、篤厚の人と爲り、人の過失を言ふことを耻ぢ、上流の人も下層の人も、共に善良なる風俗を爲した。故に天下は安寧無事で、各家とも財政は豊で、各人とも満足に生活することが出来、後世の天子は能く之に及ぶ者が無かつた。霸上の陵に葬つた。

自漢興、掃除繁苛、與民休息。孝文加以恭儉、至孝景遵業、五六十載之間、移風易俗、黎民醇厚、國家無事、人給家足、都鄙廩庾皆滿、而府庫餘貲、財京師之錢累鉅萬、貫朽而不可校、大倉之粟陳陳相因、充溢露積於外、紅腐不可勝食、爲吏者長子孫、居官者以爲姓號、故有倉氏、庫氏、

重犯法。然罔疏民富。或至驕溢。兼並之徒。武斷鄉曲。宗室長固其變也。

なり、業は帝業。哉。

校し計る

臣 國家と休戚存亡を同じくする臣。即ち忠誠を致して身命を國家に捧ぐる臣。
古有社稷臣（此）近（此）效（此）習（此）ふ。

に捧ぐる臣。

解釋 汲黯は東海郡の太守に爲つた。黯は天性清淨潔白を好んだ。而して東海郡に在る時は、常に室内にのみ居つて、一度も郡内を巡視しなかつた。然も郡中はよく治まつた。その後九卿に任せられて京師へ歸つた。此の時孝武皇帝は方に四方から文士を招き、盛んに國家經綸の道を講じた。嘗て汲黯に謂うて曰ふのに、我は云々の事を爲さんと思ふが汝は如何に思ふかと。黯が曰ふのに、陛下は内心多慾でありながら、外觀だけ仁義を施さんとして居る。故にどうして堯舜の治道に效ふことが出来ようか、到底出来ないことであると直言した。帝は大に怒り、直ぐ朝政を聽くことを罷めて曰ふのに、甚だしいことである、彼の汲黯の愚直なことはと。然し帝も黯の忠誠を知り、之を褒めて曰ふのに、昔社稷の臣があつたが今我が汲黯は之に近い、彼は我が國柱石の臣であると。

始元六年。蘇武還自匈奴。武初徙北海上。掘野鼠去草實而食之。臥起持漢節。李陵謂武曰。人生如朝露。何自苦如此。陵與衛律降匈奴。皆富貴。律亦屢勸武降。終不肯。漢使者至匈奴。匈奴詭言武已死。漢使知之。

言。天子射上林中。得鴈。足有帛書。云。武在大澤中。匈奴不能隱。乃遣武還。武留匈奴十九年。始以強壯出。及還。須髮盡白。拜爲典屬國。

字解

匈奴。北方にある夷狄の國。初徙北海上。蘇武は天漢元年に匈奴に使した。匈奴は武を捕へて北海上の無人の處に徙した。掘野鼠。支那の北方には野鼠が多い。野鼠は穴居するが故に、掘りて之を捕へて喰うたのである。去草實。漢書意義に、去藏也とある、即ち草の實を貯藏して之を喰うたのである。節。符節使者の持つて行くてがた。朝露。朝露は日が出るとすぐに消える、故に之を人生の短きに喩へたのである。不肯。承諾しない。詭。いつはる詐。上林。苑の名。須。鬚に同じあごひげ。典屬國。多くの屬國の事を掌る官。

解釋

始元六年に蘇武が匈奴から還つて來た。初め蘇武は匈奴に使し、捕へられて北海の上に遷された。この北海の上は食物の無い處であつたから、武は野鼠を掘つたり、草實を貯へたりして之を喰ひ、僅に露命を繋いで居た。しかも武は此の困苦の中に於ても、固く臣節を持ち、漢の符節は、臥す時にも起きて居る時にも、放さず持つて居た。此の間に、李陵が蘇武に謂うて曰ふのに、人生は朝露の如く短いものであるから、安樂に暮すのが第一である。然るに貴下は何故にかく自ら苦む

ことであるか。宜しく匈奴に降つて此の苦をのがれなさいと勸めた。此の李陵は、初め漢の臣下であつたが、衛律と共に匈奴に降り、共に富貴に暮して居る者である。而して衛律も亦屢々蘇武に匈奴に降ることを勧めた。然し武は終に承諾せず、固く臣節を守つた。其後漢の使者が匈奴に行つた。匈奴は詐つて曰ふのに、蘇武は既に死んだと。漢の使者はその詐言なることを知り、匈奴に謂うて曰ふのに、我が天子は上林苑中で弓を射て鴈を捕へた。その鴈の足に帛に書いた書付が結び付けられてあつた。而してその書付に、蘇武は大澤の中に在ると書いてあつたと。そこで匈奴は隠すことが出來ず、遂に武をして漢に歸らせた。さて武は匈奴に留つて居たことが十九年間で、始め漢を出る時は、強健なる壯者であつたが、今歸る時は、髪もひげも盡く白くなつてしまつた。かくして漢帝は蘇武を典屬國の官に任じた。これは武が永く外國に在つて、邊境の事情を知つて居たからである。

渤海太守龔遂入爲水衡都尉。先是渤海歲饑。盜起。選遂爲太守。召見問。何以治盜。遂對曰。海濱遐遠。不沾聖化。其民飢寒。而吏不恤。使陛下赤子盜弄兵於潢池中耳。今欲使臣勝之邪。將安之也。上曰。選用賢良。

恐れ、立に解散して逃げ隠れた。其後遂は人民の中で、刀劍を持つて居る者がある。と之に諭して、その劍を賣つて牛を買ひ、刀を賣つて犢を買はせた。そして曰ふのに、汝は百姓であるに、どうして刀を帶び劍を佩ぶる必要があらうか、それよりは、刀劍の代りに牛を帶び、耕作の道に盡力せよと諭した。かくて遂は百姓を勞して勤勉せしめ、又之を懐け來す爲めに郡内を巡視した。此の如く遂は熱心に善政を施したから、郡中大に治り、人民は財を積む様になり、從つて風俗も篤厚になつたから、獄訟の事も止んだ。さて遂は渤海郡に於て、かく好成绩を擧げたから、皇帝は其勞を嘉し、遂を召して水衡都尉に任じたのである。

元康三年太子太傅疏廣與兄子太子少傅疏受上疏乞骸骨許之加賜黃金公卿故人設祖道供張東門外送者車數百兩道路觀者皆曰賢哉二大夫既歸日賣金共具請族人故舊賓客相與娛樂不爲子孫立產業曰賢而多財則損其志愚而多財則益其過且夫富者衆之怨也吾不欲益其過而生怨

字解 太傅。少傅。共に官名。乞骸骨。骸骨をして郷土に歸葬せしめたいといふ意で即ち官を罷めたいと願ふこと。故人。友人知己。祖道。古へは旅行する

時には、必ず道祖神を祭り、道中の安全を祈つた、而して祭畢ると、その側で飲み、即ち別宴を開いて然る後出發したのである。供張。酒食を供へて宴を張る。共具。酒肴を供へる。故舊。故人に同じ。

解釋

元康三年に、太子の太傅、姓は疏名は廣といふ者が、その兄の子で、太子の少傅疏受と共に、上表して骸骨を乞うた。帝は之を許し、且つ在官中の功を嘉し、多分の金を與へた。さて二人が出發するに及び公卿及び其友人等は、京師の東門外に集り、二人の爲めに道祖神を祭つてその行の安全を祈り、且つ送別の宴を開いた。而して宴終つて後、見送人の車は百臺の多きに及び、中々の盛會であつたから、之を道路で見て居た人は、皆口々に「賢なる哉二大夫」と曰うてこれを賞讃した。さて二人は既に故郷に歸り、日に恩賜の金で酒肴を買ひ、一族を始め友人賓客などを招待し、與に娛樂にふけり、子孫の爲めに財産を残すことをしなかつた。常に曰ふのに、多く財産があると、たとひ賢人でもその財産を頼りとして修養せず、遂にその志を損するものである。又愚人であつたならば、益々放佚に流れ、いよくその過を益す者である。且つ富は衆人から怨みを受くるものであるから、財産は子孫の爲めに

は無い方がよいのである。我が子孫をしてその志を損し、その過を益し、且つ衆人から怨を受けさせたく無いのである。故にかく毎日娛樂して金を費すのであると。

丙吉爲丞相。嘗出逢群鬪死傷。不問。逢牛喘。使問逐牛行幾里矣。或譏吉失問。吉曰。民鬪京兆所當禁。宰相不親細事。非所當問也。方春未可熱。恐牛暑故喘。此時氣失節。三公調陰陽。職當憂。人以爲知大體。

字解 喘。呼吸をせはしくする。三公。漢の初には丞相、太尉、御史大夫を三公と稱した。後哀帝の時、丞相を改めて大司徒となし、武帝の時太尉を罷めて大司馬となし、成帝の時、御史大夫を改めて大司空となし、之を三公と稱するに至つた。

解釋 丙吉が丞相と爲つた。嘗て外出した時、人が群を爲して争鬪し、多くの死傷者を出したのに出逢うたが、何も問はずして行き過ぎた。それから又牛の喘ぎつゝ來るのに出逢うた。そこで吉は人をしてその牛飼に就き、牛を逐うて何里程歩いたかと問はしめた。或る人は之を見て譏つて曰ふのに、丙吉は宰相でありながら人の死傷事件を問はない、牛の喘ぐのを問うた、是れ人と獸の輕重を知らない者で、その問は甚しく誤つて居ると。丙吉が曰ふのに、人民の争鬪に就ては、京兆の尹が之を禁すべき者で、苟も天下の宰相は、かゝる小事を親らすべき者で無い。從て之を路上に於て問ふべからざること、明かである。今や季節は春であるから、未だ熱すべき時で無い。然るに牛は其行くこと遠からざるに係はらず、かく喘ぐのは、時候がその節を失つて暑いからであらう。凡そ三公は、善政を施して陰陽を調和し、萬民の福利を計るものである。故に時候の節を失ふのは、我が職務として正に憂ふべき事であるから、我は之を問うたのであると。之を聞いた人は、丙吉は天下に相たるの大體を知ると爲し、之に敬服した。

113 黃霸卒。于定國爲丞相。定國父于公。初爲獄吏。治獄有陰德。令高大門。閭容駟馬車。曰。吾後世必有興者。于定國以地節元年爲廷尉。朝廷稱之曰。張釋之爲廷尉。天下無冤民。于定國爲廷尉。民自以不冤。至是由御史大夫代霸。

字解 陰德。に知れぬ様にして徳を施すこと。門閭。門は自分の門、閭は村里の入口の門、然しこゝでは單に自分の門の意に用ふ。駟車。四頭立の馬。冤。無

實の罪。

解釋 丞相の黃霸が死んだ爲めに、于定國が代つて丞相と爲つた。さて于定國の父子公は、初め獄吏と爲り、陰德を積んだ。此の于公は嘗て駟馬の車を入れることが出来る高大なる門を造つた。そして曰ふのに、我が後世子孫には、必ず大臣宰相と爲る賢者が興るであらうから、我はその時の用意に、かく門を高大にしたのである。是れは、于公は自分が陰德を積んだから、必ず陽報があつて、子孫に賢者が興ると信じたからである。さて于定國は地節元年を以て廷尉と爲つた。此の時朝廷では之を稱美して曰ふのに、昔張釋之廷尉と爲つた時、天下に冤罪を蒙つた人民が無つた。今于定國が廷尉と爲つたから、民は自分で冤罪を受けることが無いと確信して居ると。かく曰うて定國を推賞した。其後定國は廷尉より御史大夫に轉じたが、此度黃霸が死んだ爲めに、代つて丞相と爲つた。即ちこれ于公の豫言が適中したのである。

南陽鄧禹杖策追劉秀及於鄴。秀曰。我得專封拜。生遠來。寧欲仕乎。禹曰。不願也。但願明公威德加四海。禹得效其尺寸。垂功名於竹帛耳。更

始常才。常王大業。非所任。明公莫如延攬英雄。務悅民心。立祖之業。救萬民之命。天下不足定也。秀大悅。令禹常宿止於中。與定計議。

字解

明公。明德のある君主の意で、劉秀を指す。效。致す、盡す。尺寸。己の才能の短なるを謙遜していふ。垂。遺す。竹帛。昔は紙なし、故に書冊は多く竹簡を以て編み、或は縑帛を用ゐて之を作る、故に竹帛といふ。延攬。延は引、攬は取る。中。幕府の中。

解釋

南陽縣の鄧禹といふ者、馬策を持つて劉秀の跡を追ひ來り、遂に鄴で面會した。劉秀が曰ふのに、我は今人を王公に封じ、或は大將に拜するの專權を得て居るのである。然して今君は遠く我を追うて來たのは、是れ我に仕へんと欲するのであるかと。禹が曰ふのに、私はかゝる事を願ふ者では無い。唯私の願ひは、明君の威徳が天下四海に加はり、聊か微才を盡し、功名を竹帛に遺さんと欲するのである。さて彼の更始は普通人で、決して英雄では無い。而して帝王の業は極めて重大であるから、彼れ更始が輩には、企及することが出来ないのである。故に此際、禹の爲めに計れば、明公は宜しく天下の英雄を取り入れて之を味方と爲し、又務めて民

心を悦ばせ、昔西漢の高祖が樹てた帝業を再び建設し、以て虐政に苦んで居る萬民の命を救ふことが肝要である。果して然らば、天下は定むるに足らず、容易に統一することが出来るのであると。劉秀は大に喜び、爾後禹を慕營中に止め、共に天下統一の謀議を定めた。

王至中山。諸將上尊號。不許。至南平棘。固請。又不許。耿純曰。士大夫捐親戚。棄土壤。從大王於矢石之間。固望攀龍鱗。附鳳翼。以成其所志耳。今留時逆衆。恐望絕計窮。則有去歸之思。大衆一散。難可復合。馮異亦言。宜從衆議。會儒生強華。自關中奉赤伏符來。曰。劉秀發兵捕不道。四夷雲集。龍鬪野。四七之際。火爲主。群臣因復請。乃即皇帝位。鄯南。改元建武。

字解 王。劉秀を指す。是より先き秀は蕭王と爲つた。土壤。故郷。矢石之間。昔は矢を射石を投げて戦つた。故に戦争することを從矢石之間といふ。龍鱗鳳翼。龍の鱗、鳳の羽で、劉秀に比す。留時。時機到來せるも應せざることを。赤伏符。符は未來の事を記した書籍、即ち讖緯の書、赤伏はその符の名。不道。無道にして暴虐。龍鬪野。群雄が中原で争ふことに喩ふ。四七之際。劉秀を指す。秀は二十八

歳を以て兵を起す。故にかくいふ。火爲主。漢の徳は火なり、而して劉秀は漢室の裔である。故にこれは劉秀が天下に主となるといふ意。

解釋

劉秀が中山府に至つた時、秀の諸將は秀に皇帝の尊號を上つた。然し秀は辭して之を許さなかつた。それから南平棘縣に至つた時、諸將は固く請うたが秀は又許さなかつた。此の時耿純といふ者が進んで曰ふのに、天下の士大夫が親戚を棄て、故郷を棄て、大王に矢石の間に從ひ、奮戦勇鬪する所以は、固より大王の驥尾に附し、その目的即ち王侯に封せられんことを望んで居るからである。然るに大王は時運の到來せるのを留めて之に從はず、且つ衆人の希望に逆ふのは、是人をして失望させるものである。若し萬一、士大夫はその希望絶え、窮厄に陥つたならば、多分大王を見限つて故郷に歸らんとする。果して此の如く、此の大衆が一旦散じ去つたならば、再びは不可能である。故に今は衆人の希望を納れられたしに衆議に從はんことを請うた。會々儒生の強華といふ。その符の文に曰ふのに、劉秀は兵を起して無

て此の群雄鬪戰の時に於て、二十八歳にして然か
爲ると。群臣之を見て、これは秀が天下に王と爲る瑞
帝位に即かれんことを請うた。そこで秀は之を許し、皇
元を建武と改めた。

馬援嘗曰大丈夫當以馬革裹屍安能死兒女手交趾反
軍討平之武陵蠻反援又請行帝愍其老援被甲上馬據鞍顧
可用上笑曰矍鑠哉是翁乃遣之援在交趾嘗遣書戒其兄子曰吾
汝曹聞人過如聞父母名耳可聞口不可言好議論人長短是非政法
不願子孫有此行也龍伯高敦厚周慎謙約節儉吾愛之重之願汝曹
效之杜李良豪俠好義憂人之憂樂人之樂父喪致客數郡畢至吾愛
之重之不願汝曹效之也效伯高不得猶爲謹敕之士所謂刻鵠不成
尚類鶩也效季良不得陷爲天下輕薄子所謂畫虎不成反類狗也

字解

伏波將軍。爵の名。顧盼。かへりみる。矍鑠。老いて益々壯なる貌。汝

曹。汝輩に同じ。口不可言。子たるもの父母の名を曰はざるは支那の
長短。長は美能。短は過失。謹敕。謹慎して高慢ならざること。刻鵠類鶩。鵠は
一種の水鳥にして雁よりも大、鶩アヒル、家鴨、鵠を刻んで不出来でも尚鵠に似た意
が出来から甚だしく人に非難せられぬといふ意。畫虎類狗。虎と狗とは形甚
だ異つて居る、而して虎を畫き、その畫き様が悪くて狗に似ると、それは甚しく異つ
て居るから人に嘲笑侮辱せらるゝといふ意。

解釋

馬援が嘗て曰ふのに、大丈夫は當に戰場に於て討死し、屍を馬の革に包んで
葬られるのが本懐である、安んぞ兒女子の看護を受け疊の上で死すべきものなら
んやと。これは武將の本領を發揮した詞である。交趾が反した時、馬援は伏波將
軍の官爵を帯び、討ちて之を平げた。その後武陵郡の土蠻が反した時、援は又出征
せんことを請うたが、光武帝は援の老人であることを憐み、之を許さなかつた。援は
甲冑を着て馬に乗り、意氣昂然として帝を顧み、以て身未だ衰へず、尚用ふるに足る
ことを示した。光武帝は之を見て微笑し、此の老爺は、矍鑠として強壯であること
よと曰うて、之を許した。馬援は嘗て交趾に在つた時、手紙をその兄の子、馬嚴、馬敦
の二人に與へて、之を戒めて曰ふのに、我は汝輩が、人の過失を聞くこと、父母の名を

聞くが如くせんことを欲するのである。何となれば、人が己の父母の名を言ふ場合には、己は之を耳で聞くことは出来るが己れ自ら父母の名を曰ふことが出来ない如く、人の過失は聞いてもよいが、決して之を曰うてはならぬ。又、好んで人の長短を議論し、國家の政治法律を是非批評する如きことは、我が惡む所であるから、我は我が子孫に、此の如き行のあることを願はない、彼の龍氏字は伯高は、資性敦厚にして周密慎重、且つ謙遜にして節儉で、實に温厚の君子であるから、我は常に之を信愛し之を尊重して居る。故に我は汝等が、此の人を模範として、その徳を磨くことを願ふのである。又杜氏字は季良は、豪勇にして義侠心に富み、人の憂を見ては、我が身の憂の如く之を憂ひ、又人の樂を見ては、我が身の樂の如く之を樂み、如何にも節義の高い人であるから、常に民望を博して居る。その證據には、嘗て其の父が死んだ時、之を遠近の賓客に通知したところが、數郡の人畢く至り、敬弔の意を表した程である。故に我れ又之を親愛し、之を尊重して居る。然し我は汝等に、此の人を模範とすることは願はない。何となれば、龍伯高に效うて、假令その通りに出来なくとも、猶謹直の人と爲ることが出来、古諺の所謂、鵠を刻して出来ざるを、鸚鵡に似るが如く、伯高の性格に似た人と爲る。然るに若し季良に效うてその通りに出来なければ、彼の輕薄の才子と爲り、所謂虎を畫いて出来ない時は、反て狗に類する如く、甚だしく性格の相違した人と爲り、天下の笑を招くからである。これは温厚篤實の人を模範とすれば、假令失敗しても、謹厚の人と爲つて、人から非難せられないが、豪俠の人を模範として失敗すれば、輕薄な人と爲つて、世人の指彈を受くる。つまり、ハデな人を模範とするよりも、ジミな人を模範とする方が利であることを論したのである。

上於^テ賊^{ゾウ}罪^{ザイ}無^シ所^ス貸^{カス}。大^{オウ}司^シ徒^ト歐^{オウ}陽^{ヤウ}歙^{キヤ}嘗^{チヤ}犯^{ハム}賊^{チヤ}。歙^{キヤ}所^ス授^{ジュ}尚^{シヤウ}書^{シヤウ}弟子^{トシ}千^{セン}餘^ヨ人^ニ。守^シ闕^{クエ}求^ク哀^{アイ}。竟^{ケイ}不^フ免^{メン}。死^シ於^オ獄^ク。所^ス用^{ヨウ}群^{クン}臣^{チン}如^ニ宋^{ソウ}弘^{コウ}等^ト。皆^ケ重^{ジュウ}厚^{コウ}正^{テイ}直^{チキ}。上^{シヤウ}婦^フ湖^コ陽^{ヤウ}公^{コウ}主^{シュ}嘗^{チヤ}寡^カ居^コ。意^イ在^シ弘^{コウ}。弘^{コウ}入^ニ見^ミ。主^{シュ}坐^サ屏^{ヘイ}後^コ。上^{シヤウ}曰^ク。諺^ニ言^フ富^フ易^イ交^{カウ}貴^キ易^イ妻^{サイ}。人^ニ情^ニ乎^ト。弘^{コウ}曰^ク。貧^{ヘイ}賤^{テン}之^ノ交^{カウ}不^フ可^ク忘^{ワス}。糟^{ソウ}糠^{コウ}之^ノ妻^{サイ}不^フ下^カ堂^{トウ}。上^{シヤウ}顧^コ主^{シュ}曰^ク。事^シ不^フ諧^ハ。

字解 賊罪。收賄罪、所謂コムミシヨシ罪。無所貸。斷然罪に處して少しも寛假しないこと。守闕。闕門に停留して去らず、恰も闕を守るが如し。故に守闕と曰ふ。

公主。皇室の女、即ち皇女。寡居。ヤモメで居ること。糟糠之妻。糟はカヌ、糠はヌカ、此の二者は貧者の食ふ者、故に糟糠之妻とは、共に貧賤難苦を共にした妻の意

解釋

光武皇帝は、收賄罪に對しては、一步も假借せず、斷乎として嚴罰に處した。嘗て大司徒歐陽歙が賊を犯し、それが發覺して獄に下された時、歙に尙書を教授された弟子千餘人は、宮闕の門に停留し、歙の爲めに赦免を哀願したが、遂に聽許されず、歙は獄中で死んだ。かく上は嚴正な人であつたから、特に重く用ゐて居る宋弘があつた。此の人は、良人に死に別れた爲めに、寡居して寂しく暮して居たが、心ひそかに弘に嫁せんと欲し、その意を帝に話した。たまく弘が謁見した時、帝は公主を屏風の蔭に居らせ、弘の言動を窺はせた。かくて帝は弘に謂うて曰ふのに、諺に富んだならば交際する人を易へ、貴くなつたならば妻を易へるとあるが、是れは人情であるかと。弘が曰ふのに、貧賤の時、交際した友人の情味は、忘んとしても忘るゝことが出來ず、又糟糠を食うて艱難を共にした妻は、之を堂より下すことが出來ぬ程、其愛情は濃なるものであるから、古諺は人情に反して居ると。帝は弘が退出して後、公主を顧みて曰ふのに、姉上の希望は叶はないから、斷念しなさいと。

處士嚴光與上嘗同游學。物色得之齊國。披羊裘釣澤中。徵至不屈。上與光同臥。以足加帝腹。明日太史奏客星犯御座甚急。上曰朕與故人

嚴子陵共臥耳。拜諫議太夫不肯受。去畊釣。隱富春山中。終漢世。清節士自此始。

字解

處士。有道の士にして朝に仕へず、家居する者の稱。物色。其八物、畫きて、之を搜索すること、即ち人相書を回つて人を尋ねること。披。被に同じ、着ること。太夫。天文を掌る役人。客星。彗星の變名、嚴光に比す。御坐。北極星の坐、光武帝に比す。子陳。嚴光の字。

解釋

處士嚴光は少時光武帝と共に遊學し、所謂竹馬の友であつた。而して光武は帝位に即くに及び、深く嚴光の賢を愛し、之を重用せんと欲し、物色して齊國で得た。此の時嚴光は羊の皮の服を着、大澤中で釣をして居たが、光武の徵に應じて朝廷に至つた。然かも光武の威に屈せず、巍然として守る所があつた。光武は嚴光を見て大に喜び、留めて宮中に宿せしめ、昔同遊した時の如く、室を同じくして共に寝た。而して嚴光の眼中には舊友あつて帝王無く、足を帝の腹の上に載せた。翌日太夫が奏して曰ふに、昨夜客星あり、甚だしく御座を犯したから、御警戒を乞ふと。これは太夫が嚴光の放逸なる動作を惡み、天文に托して之を諷したのである。光武は史官の意中を覺り、笑つて曰ふに、朕は昨夜舊友の嚴子陵と共に臥たので別に

不思議にするとは無いと。かくて光武は嚴光を諫議大夫に拜し、政治の得失を
せしめんと欲したが、嚴光は絶對に之を謝絶し、遂に辭して野に歸り、田を耕し、魚を
釣り、悠々として自適し、最後に富春山に隱棲し、天壽を以つて終つた。漢の時代に
節操の高い人の多かつたのは、此の時から始つたのである。

徵班超還京師卒。超起自書生。投筆有封侯萬里外之志。有相者謂曰。
生燕頷虎頭。飛而食肉。萬里侯相也。自假司馬入西域。章帝時爲西域
將兵。長史至上。以超爲西域都護騎都尉。平定諸國。在西域三十年。以
功封定遠侯。至是以年老乞歸。願生入玉門關。上許之。任尙代爲都護。
請敎超曰。君性嚴急。水清無大魚。宜蕩佚簡易。尙私謂人曰。我以班君
當有奇策。今所言平々耳。尙後果失邊和。如超言。

字解

投筆云々。班超は家貧しくして官の爲めに傭書す。嘗て筆を投じて嘆じ
て曰はく、大夫當さに功を異域に立て、以て封侯を取るべし、安んぞよく久しく筆墨
の間を事とせんやと。班超は家貧しくして官の爲めに傭書す。嘗て筆を投じて嘆じ
領は下顎超の下顎は燕に似、其の相に似て居ると云々。生。君の意。燕頷虎頭

能く空中を飛行する相、虎に似て居るは勇猛の相で、共に立身出世する相。
蕩は寛大、佚は緩和。水清無大魚。孔子家語に、孔子曰く、水至清なれば則ち魚無く
人至察なれば則ち徒無しとあり。これは政治は餘り嚴重にすると民心離散し、失
敗を招くといふ意である。

解釋

班超を西域から呼び寄せて京師に還らせたが、超は歸來幾何もなくして死
んだ。さて班超は書生から起つた人であるが、その始めに當り、斷然筆を投じ、萬里
の異域に行き、偉勳を奏して封侯と爲らんとの大望を起した。此の時人相を見る
人があり、超を見て、超に謂つて曰ふに、君の領は燕の如く、君の頭は虎の如くである
から、君は燕の如く飛び上り、虎の如く猛烈に突進する、即ち君は將來萬里の外に侯
たるべき相を備へて居ると。超は之を聞いて益々自信の念を高めた。かくて超
は假司馬の役に任せられて、始めて西域に入つた章帝の時、西域將兵の長史と爲つ
た。而して孝和帝は、特に超を以て西域都護騎都尉の官に任じた。是より超は西域
諸國を平定し、西域に居ること三十年の久しい間、遂に功を以て定遠侯に封
れ、年來の目的を達した。此の時に當つて、超は既に老年になつたから、京
んことを請願して曰ふに、臣願はくば、生きて再び玉門關に入ることを

あると。蓋し玉門關は西域の境上にある漢の關所で、超が再び此の請うたのは、漢が戀しくなつたからである。孝和皇帝は超の願を許可し還らせ、任尙を以て其の後任とした。さて任尙は西域統治策に就いて超に問超が曰ふのに君の性質は嚴にして且つ早急であるが、之は大に注意すべきことである。由來水の清冽な所には大魚は住まず、苛政の下には人和の無き者である。故に君はこの性を矯め、宜しく寛厚の徳を以て之に臨むとが必要であると戒めた。尙は退いて私に人に話して曰ふに、我は班君が必ず西域策につき、奇策妙計を持つて居ると信じて居たが、今の言ふ所を見れば、平々凡々すべて取るに足らぬ愚論である。かくて尙は西域に赴任したが、餘り嚴酷にした爲めに、超の言ふ如く、果して邊境の人和を害し、民望を失つた。

90
太尉楊震自殺。震關西人。時人稱之曰關西孔子楊伯起。教授生徒。堂下得三鱸。都講以爲有三公之象。取以進曰。先生自此升矣。後嘗爲郡守。屬邑令有懷金遺之者。曰。暮夜無知者。震曰。天知。地知。子知。我知。何謂無知。令慚而退。及爲三公。時宦者及上乳母王聖用事。皆有請託。震不從。又數以近習爲言。共構之。策收印綬。遂死。葬之日。名士皆來會。有大鳥高丈餘。至墓前。俯仰流涕而去。

字解 楊伯起。伯起は震の字。三鱸。鱸は蛇に似た魚で、全身黄色にして黒の斑點あるもの、此の三鱸は鶴雀が口に啣んで震が講堂の前に持つて來たものである。都講。學舎の長。即ち塾長。三公之象。蛇鱸は卿大夫の服象で、それが三尾であるから三公の象である。郡守。楊震嘗て東萊郡の大守となつた。屬邑令。昌邑縣の令王密、昌邑縣は東萊郡の管下に屬す。遺。贈る。請託。親族故舊の縁に託し、竊かに役人に採用せらるることを頼むこと。數。屢。策收印綬。策は大臣を任免する辭令書、收はとりあげる、印綬は官印とその印紐で、以つて夫々の官職を示すもの、ここにては大尉の官を指す。

解釋 太尉楊震が自殺した。その謂れを聞くに楊震は關西の産で、學徳の高い人であつたから、當時の人は、關西の孔子は楊伯起であるといつて之を褒めた。従來楊震は生徒を集めて教授して居た。嘗て一羽の鳥が三鱸を啣へて校堂の前に下つた怪事があつた。塾長は之を見て、師楊震が三公となる瑞兆であると爲し、之

楊震に進めて曰ふに、先生は是から高官に昇るならんと。その後震は東萊郡の大守と爲つた。管下に昌邑縣あり、その縣令王密といふ者、深夜金を懐にして震の邸に至り、之を震に贈賄して曰ふのに、深夜誰も知る者が無いから受け取られよと。震が曰ふに否、天之を知り、地之を知り、君も知り、我も知つて居る、何んぞ知る者無しと曰はれようぞと。斷乎として退けたから、令は大に耻ぢて退出した。その後震は三鱣の兆の如く、大尉と爲つて三公の位に列した。此の時宦官及び皇帝の乳母王聖といふ者等が專横を極め、且つ震に請託して仕官を求めたが、震は雷に之を謝絶せしのみならず、屢々親狎の宦官を屏棄せんことを上奏した。宦官等は之を見て大に震を怨み、相共に事を捏造して震を讒した。帝はその讒を信じ、策書を與へて震が大尉の官を免じた。是に於て震は自殺したのである。さて震の葬式の日には、天下の名士畢く會葬し、又大さ一丈餘の鳥があつて墓前に飛び來り、俯仰徘徊涕泣して去つた。これは震の徳が獨り人間のみならず、禽獸迄及んだからである。

劉備嘗於劉表坐起至厠還慨然流涕表怪問之備曰常時身不離鞍

髀肉皆消今不復騎髀裏肉生日月如流老將至功業不建是以悲耳

瑯琊諸葛亮萬居襄陽隆中每自比管仲樂毅備訪士於司馬徽徽曰識時務者在俊傑此間自有伏龍鳳雛諸葛孔明龐士元也徐庶亦謂備曰諸葛孔明臥龍也備三往乃得見亮問策亮曰操擁百萬之衆挾天子令諸侯此誠不可與爭鋒孫權據有江東國險而民附可與爲援而不可圖荆州用武之國也益州險塞沃野千里天府之土若跨有荆益保其巖阻天下有變荆州之軍向宛洛益州之衆出秦川孰不箠食壺漿以迎將軍乎備曰善與亮情好日密曰孤之有孔明猶魚之有水也士元名統龐德公從子也德公素有重名亮每至其家獨拜床下

字解 厠。便所。髀肉。股の肉。訪。問ふ。伏龍。臥龍に同じ、未だ風雲を得ず

して深淵に潜んで居る龍、孔明に比す。鳳雛。鳳凰の孔子、能く成長すれば善く、禽を服するに足る鳥、士元に比す。險塞。四方皆險阻を以て圍まれて居る。沃野。五穀がよく實る土地。天府之土。沃饒にして物産豊富なる天與の土地。秦川。川の名。箠食。箠は竹で造つた器、食は飯。壺漿。壺はツボ、漿は飲み物。孤。王

自ら謙稱して孤と曰ふ。從子。兄弟姉妹の子男を甥と云ひ、女を姪と云ふ。

解釋 劉備は嘗て劉表と室を同うして談話して居たが、座を起つて便所に行つた。そして坐に還つてから、慨然として涙を流した。劉表は怪んでその理由を尋ねた。備が曰ふに、余は常に鞍を離れずして戰場を驅逐した時には、股の肉が皆消えて居たが、只今廁に行き計らずも股の肉が太つたのを見た。これは復た馬に乗つて三軍を指揮せぬからである。あゝ日月の過ぎ行くことは恰も水の流るゝが如し、余も亦將に老境に入らんとして居る。然るに顧みて我が功業を見れば、尙ほ未だ建たず、轉痛嘆に堪へず、是を以て泣いたのであると。さて又瑯琊郡に、姓は諸葛、名は亮、字は孔明といふ英雄あり、郡下襄陽縣の隆中といふ所に寓居し、常に自ら昔の偉人管仲や樂毅を氣取り、超然として一世を睥睨して居た。或る日劉備は司馬徽に向ひ當代の名士は誰なりやと問うた。徽が曰ふに、凡そ時勢に對する務を知る者は、俊傑の士である。即ち俊傑の士は時勢に對して執るべき策を知つて居るのである。而して此の附近に、自ら伏龍鳳鵠の如き偉人があるが、若し名君があつて之を用ゐたならば、彼等は震天動地の偉業を建てることは疑ひない。而してその人は諸葛孔明と龐士元であると。蓋し龍は九淵に潜むも、一旦風雲を得ば天に朝するの勢を有し、鳳雛は成長すれば、群禽を壓する威力があるものであるから、共に時務を知る俊傑に喩へたのである。徐庶も亦劉備に謂つて曰ふに、諸葛孔明は臥龍であるから、起てば必ず世を驚かすの事業を爲すであらうと。そこで劉備は亮が草廬を訪問すること三度にして、漸く面會することが出來、遂に亮に天下統一の策を問うた。亮が曰ふに、今や彼の曹操は百萬の軍を擁し、天子を奉戴して諸侯に號令して居る、故に此の人を敵として戰爭するのは不得策である。又吳の孫權は江東に割據し、その國は險阻で要害よく、その人民はよく心服して居り、誠に堂々たる豪傑であるから、此の人は互に味方として決して之が侵略を企圖してはならぬ。又荊州は軍を動かすに適當な國であり、益州は天險を以て四方を取り圍まれ、且つ沃野は千里に連り、實に天府の地である。故に將軍は先づ此の荊益二州を併有し、その峻險を保ち、ここを根據地とする方が善い。而して若し天下に戰爭が起つたならば、荊州の軍を宛縣洛縣に向け、益州の兵は秦川に出で、次で天下に號令したば、天下の人民は、誰か箠食壺漿の用意をして、將軍を歓迎せぬ者があらうで將軍を迎へるであらうと。劉備が曰ふに、君の策は誠に我が意を得かくて劉備は亮と意氣投合し、交情は日に／＼親密になつた。

の孔明あるは、猶魚の水あるが如く、離るることが出来ないの
元は名を統と曰ひ、龐徳公が甥である。而して此の徳公は固より名望
を歴するの偉人であつたから、亮は之を景慕し、獨り牀下に拜して之を尊
獨拜するとは主人が答禮せぬからである。

曹操擊劉表。表卒。子琮舉荊州降操。劉備奔江陵。操追之。備走夏口。操
進軍江陵。遂東下。亮謂備曰。請求救於孫將軍。亮見權。說之。權大悅。操
遣權書曰。今治水軍八十萬衆。與將軍會獵於吳。權以示群下。莫不
失色。張昭請迎之。魯肅以爲不可。勸權召周瑜。瑜至。曰。請得數萬精兵。進
往夏口。保爲將軍破之。權拔刀斫前奏案曰。諸將吏敢言迎操者。與此
案同。遂以瑜督三萬人。與備並力逆操。進遇於赤壁。瑜部將黃蓋曰。操
軍方連船艦。首尾相接。可燒而走也。乃取蒙衝鬪艦十艘。載燥荻枯柴。
灌油其中。裹帷幔。上建旌旗。豫備走舸。繫於其尾。先以書遺操。詐爲欲
降。時東南風急。蓋以十艘最著前。中江舉帆。餘船以次俱進。操軍皆指
言。蓋降。去二里餘。同時發火。火烈風猛。船往如箭。燒盡北船。烟焰漲天。
人馬溺燒死者甚衆。瑜等率輕銳。雷鼓大進。北軍大壞。操走還。後屢加
兵於權。不得志。操歎息曰。生子當如孫仲謀。向者劉景昇兒子豚犬耳。

字解

治。統御監督する。會獵。これは言を獵に託したので、會戰の意。斫。斬。

奏案。表奏の書を陳べる机。逆。迎に同じ、迎撃。蒙衝。狭くして長い船。帷幔。

共に幕。走舸。飛ぶが如く走ることの早い船。此の船には勇氣絶倫の兵を載す。

雷鼓。激しく大鼓を叩くこと。輕銳。舉動敏捷して勇猛なる兵。仲謀。孫權の

字。景昇。劉表の字。

解釋

曹操は劉表を撃つた。此の時劉表は病死し、その子劉琮が代つて軍を指揮
したが、何等の抵抗もせず、荊州の地全部を舉げて操に降服した。當時劉備は劉
の許に寄寓して居たが、琮が曹操に降つた爲めに、逃げて江陵府に走つた。操は之
を追撃した。備は更らに夏口に走つた。操は益々軍を江陵に進め、遂に江に沿
て東に下り、あく迄備を攻めた。此に於て諸葛亮は備に向ひ、救を孫將軍に求めた
いと請うた。備は之を然りとした。依て亮は自ら使者と爲つて孫權の軍に至

權に見えて備さに利害を説き、劉備を救援せられんことを頼んだ。權は大に善バ之を快諾した。たま／＼曹操は書を孫權に送つて曰ふに、我は今水軍八十萬の兵を統率して居るから、之を以て將軍と吳に會戦し、一擧に雌雄を決せんと欲すと。權は之を群臣に示した。群臣皆大に驚き、一人として色を失はない者は無かつた。而して張昭の如きは尤も軟論を唱へ、操の軍を歓迎すべきことを主張した。魯肅は獨り之を不可とし、且つ權に勧め、謀臣周瑜を召して策を圖らせた。權之を許し瑜を召した。瑜は權の軍門に至つて曰ふのに、臣に數萬の兵を與へられたならば臣は直に夏口に行き、將軍の爲めに曹操を破ることを保證すると。權之を聞いて斷乎として決意し、刀を抜いて前に在りたる奏案を斬つて曰ふのには、諸々の將吏にして、苟も敢て曹操を迎へようと曰ふ者は、此の几案キアの如く、一刀兩斷の刑に處すと宣し、周瑜に三萬人を與へた。そこで瑜は之を督し、劉備と力を併せて曹操を迎へ撃ち、進んで赤壁に於て大會戦を試みた。此の時瑜の一部將に黃蓋といふ者あり、周瑜に謂つて曰ふに、臣今操が軍を見るに、その船艦は首尾相連り、進退の自由を缺いて居る。故に火攻の計を取つたならば、一擧に焼き盡し、之を敗走させることが出来る。瑜は之を是とした。そこで蓋は蒙衝と戰艦と併せて十艘を連結し、それに乾いた荻と枯れた薪とを積み、且つ油を注いで燃え易くし、又各船とも繩を以てその上部を包み、且つ旗を其上に建てた。又豫め走舸を備へてその最尾に繋ぎ、攻撃の準備を整へた。そこで先づ書を曹操に送り、詐つて降服すると申し込んだ。此の時東南の風激しく起り、攻撃には絶好の日であつた。蓋は彼の荻薪を装置してある十艘を以て最も前に着け、江の中程に至つて帆を擧げ、他の諸船は次第／＼に進んだ。操が軍之を見て皆指示し、黃蓋が降服すると曰うて狂喜した。かくて蓋は敵に充分の油斷を與へ、敵船を去ること二里の近距離に進んだ時、一時に彼の十艘の船に火を放つたから、火は焰々として燃え上り、且つ風も猛烈であつたから、船は矢の如く走り、火は見る／＼敵船に延焼し、盡く之を焼き、煙焔は高く天に漲り、人馬の溺死する者甚だ多かつた。此の機に乗じ、周瑜自ら輕銳を率ゐてその後、鼓聲雷の如く、盛に突撃した。北軍は大に壞れ、流石の曹操も遂に敗走した。その後操は屢々兵を以て權を攻めたが、いつも撃退されて、目的を達することが出来なかつた。そこで操は嘆息して曰ふに、子を生むならば、まさに孫權の如き英雄を生みたいものである。彼の劉表が子琮の如き徒は、豚犬に類する馬鹿息子であると。これは有名なる赤壁の戦である。

劉備狗荆州江南諸郡。周瑜上疏於權曰。備有梟雄之姿。而有關羽張飛熊虎之將。聚此三人在疆場。恐蛟龍得雲雨。終非池中物也。宜徒備置吳。權不從。瑜方議圖北方。會病卒。魯肅代領其兵。肅勸權以荆州借劉備。權從之。權將呂蒙初不學。權勸蒙讀書。魯肅後與蒙論議。大驚曰。卿非復吳下阿蒙。蒙曰。士別三日。即當刮目相待。

字解

狗。兵を以て攻略すること。上疏。上書に同じ。梟雄之姿。姿は資なり。天資勇武にして姦智あること。疆場。邊境。蛟龍。龍の屬にして角なきもの。劉備に比す。阿蒙。阿は親狎の稱。蒙は呂蒙。吳下。吳國。刮目。目を拭ふに同じ。

解釋

劉備は兵を以て荆州及び江南の諸郡を攻略した。周瑜は之を忌み、孫權に上書して曰ふのに、彼の劉備は天資梟雄で、且つ臣下に關羽張飛の如き熊や虎に比すべき猛將がある。而して今君は此の三人を聚めて邊境に在らせて居る。臣の愚考に彼の蛟龍は雲雨を得ると直ちに上天して終に池中の物にあらざるが如く、劉備も亦一朝時運を得て奮起せば、遂に制することが出来なくなると思ふ。故に今の内に、之を近き吳に徙し、以て之を監視するがよいと。然し權は此の説には従

はなかつた。其後周瑜は此の方中原を攻撃する計謀を凝らしたが、不幸にして病を得て死んだ。依て魯肅といふ者が代つてその軍兵を統領した。此の魯肅は曾て孫權に勧め、荆州を以て劉備に貸し、共に同盟して曹操を防がんことを以てした。權は之に従つた。さて孫權の將に呂蒙といふ者があつたが、初め學問しなかつたから、權は之に書を讀むことを勧めた。その後魯肅は呂蒙と議論したが、蒙の學問識見の高きに驚き、蒙に謂つて曰ふのに、君は復昔の吳下の阿蒙で無く、天下の偉人であると思じた。蒙が曰ふのに、凡そ士たるものは、別れて後三日を経ば、當に刮目して之を待つて居るべき筈である。何となれば必ず發展して舊觀を改むるからである。故に余の今日あるは、敢て怪むに足らぬのであると、大氣焔を吐いた。

帝耻關羽之没。自將伐孫權。權求和不許。權遣使於魏。魏封權爲吳王。魏主問吳使超咨曰。吳王頗知學乎。咨曰。吳王任賢使能。志存經略。雖有餘閑。博覽書史。不效書生尋章摘句。魏主曰。吳難魏乎。咨曰。帶甲百萬。江漢爲池。何難之有。曰。吳如大夫者幾人。咨曰。聰明特達者八九十人。如臣之比。車載斗量。不可勝數。

字解 帝。昭烈皇帝、即ち劉備。經略。天下を經理し、他國を攻略する。難。憚なり、畏れはばかる。帶甲。甲冑を帯びた兵。大夫。趙啓を指す。特達。英達に同じ、人物性質などの遙に人に優れたること。比。タダヒ、儔。車載斗量。餘り人の多いことを形容して曰ふ詞、即ち人が多から、一人づゝ數へることが出來ぬ、例へば十人を一組として之を車に載せて、その車の數を算へ、或は一柁に五人を入れ、その柁の數を算へ、かくして總人數を數へても、尙數へきれぬ程澤山あると曰ふ意。

解釋 帝は關羽が、吳の爲めに襲撃されて死んだのを耻ぢ、且つ憤り、自ら將として孫權を伐つた。權大に敗れ、和を求めたけれども、帝は許さなかつた。此に於て權は使者を魏に送り、臣と稱して魏の應援を求めた。依て魏は權を封じて吳王と爲したから、權は又中大夫趙咨を答禮使として魏に遣し、以て謝せしめた。此の時魏主は趙咨に問うて曰ふのに、吳王は學問が好きであるかと。咨が曰ふのに、吳王は事を賢者に任せ、能士を用ゐ、適材を適所に置いて政務を勵み、その志望は天下を經略するに在る。然し餘閑があると、博く古今の書史を讀むが、彼の書生が一章の意味を尋求し、一句の解釋を摘取するが如きに、效はず、唯大義に通ずるを主とし、區々たる小節に拘泥しないと。魏主又問うて曰ふのに、吳王は魏を畏れて居るか。

咨が曰ふのに、我が吳國には、百萬の精兵があり、加ふるに江水漢水を以て城池と爲し、要害堅固にして、兵備亦整つて居る。故にどうして魏を畏れようぞ、決して畏れて居ないと。魏主が曰ふのに、吳國には君の如き賢士は幾人あるかと。咨が曰ふのに、聰明にして俊達の士だけでも八九十人はある。特に臣の如き儔の者は、車に載せて數へ、柁を以て量つても、數へきれぬ程澤山あると。かく壯語して魏主の膽を驚かした。

後皇帝名禪。字公嗣。昭烈皇帝子也。年十七卽位。改元建興。丞相諸葛亮受遺詔輔政。昭烈臨終謂亮曰。君才十倍曹丕。必能安國家。終定大事。嗣子可輔。輔之如其不可。君可自取。亮涕泣曰。臣敢不竭股肱之力。效忠貞之節。繼之以死。亮乃約官職。修法制。下教曰。夫參署者。集衆思。廣忠益也。若遠小嫌。難相違覆。曠闕損矣。亮乃遣鄧芝使吳。修好。芝見吳王曰。蜀有重險之固。吳有三江之阻。共爲唇齒。進可兼并天下。退可鼎足而立。吳遂絕魏專與漢和。

字解 竭。盡す。效。致す。下教。教は令なり、訓令を發すること。參署。官の

名。遠小嫌。嫌は疑なり。遠は忌なり。難。肯せざる事。遠覆。遠は辨問。覆は反覆警告。重險之固。外には針谷、銘谷、子午谷の險あり、内には劍閣の險あり、内外二重の要害あり、故に重險と云ふ。三江之阻。婁江、東江、松江の三江の險阻。唇齒。親密の意。諺に、唇破るれば齒寒しとあり。唇と齒とは互に相依てその用を爲すものであるから之を親密に喩へたのである。鼎足。鼎は三足のある器、カナへ。三人若は三國對立するに喩ふ。漢。蜀帝昭烈は漢の裔、故に蜀を漢と謂ふ。

解釋 漢の後皇帝名は禪、字は公嗣、昭烈皇帝の子である。年十七にして皇帝の位に即き、建興と改元した。而して丞相諸葛亮は、昭烈皇帝の遺詔を受けて政務を輔佐した。初め昭烈皇帝は、その臨終に際し、亮に謂うて曰ふのに、君の才能は魏主曹丕より十倍も勝れて居るから、必ずよく我が國家を安んじ、終に天下統一の大業を定めることが出来るかと信ずる。而して朕が嗣子禪は、之を輔けて輔け甲斐があれ、ば、輔けてくれよ。若し輔けても、その甲斐が無ければ、君自ら帝位に即き、我が遺業を繼がれよと。亮之を聞いて感激し、涙を流して曰ふのに、臣は陛下の信任を辱して居る以上は、此の知遇に報ゆる爲めに、股肱の力を盡し、忠義貞節の誠を致し、之に繼ぐに死を以て勤勞し、誓つて遺託に背かざらんことを期す、願くは宸襟を安せられよと。かくて亮は後皇帝を輔導し、先づ官職を省約して冗費を省き、法律制度を改廢して冗員を淘汰し、所謂行政整理を斷行し、且つ訓令を發して曰ふのに、凡そ參署の官は、衆人の心思を聚めて之を參酌し、衆民を忠義に誘導し、公益を廣むるを以てその職責と爲す者である。故に各員とも、苟も阿諛すること無く、常に正義を持し、しかも協心同力せざるべからず。然るに同僚相和せざるの小疑惑に迷ひ、互に辯問反覆して相警告することを憚つたならば、天下の政務は曠廢闕失し、國家損あつて益が無い。故に各員とも、各々その所見を吐露し、相與に朝政を輔翼せられたしと。かくて亮は銳意内政の振興を謀り、一面外交にも焦心した。即ち鄧芝を吳に遣して好を修めた。此の時、芝は吳王に見えて曰ふのに、我が蜀には重險の固めがあり、貴國には三江の固がある。而して此の兩國互に相倚りて唇齒の親みを結んだならば、進では天下を兼併することが出来、退では貴國と弊國と魏と對立し、以て鼎足の勢を爲すことが出来ると。吳王はその説に従ひ、魏と絶交して専ら漢と連和した。

亮數挑懿戰。懿不出。乃遣以巾幗婦人之服。亮使者至懿軍。懿問其寢食及事煩簡。而不及戎事。使者曰。諸葛公夙興夜寐。罰二十以上。皆親

覽所噉食不至數升。懿告人曰。食少事煩。其能久乎。亮病篤。有大星赤而芒墜亮營中。未幾亮卒。長史楊儀整軍還。百姓奔告懿。懿追之。姜維令儀反旗鳴鼓。若將向懿。懿不敢逼。百姓爲之諺曰。死諸葛走生仲達。懿笑曰。吾能料生。不能料死。亮嘗推演兵法。作八陣圖。於是懿案行其營壘。歎曰。天下奇材也。

字解

遺。贈。巾幘。幘は婦人の首飾。戎事。軍戰の事。噉食。食すること。升。日本の約九勺に當る。芒。光芒光の尾。墜。落。仲達。懿の字。料。推量。推演。推し廣める。營壘。陣營。

解釋

諸葛亮は屢々司馬懿に戰を挑んだが懿は畏れて出で、應戰しなかつた。そこで亮は懿に婦人の用ゐる巾幘を贈つた。これは懿に大丈夫の勇無きを諷して之を辱め、その心を怒らして挑戰せんとしたのである。此の時亮の使者が懿の軍に至つた。懿は使者に、亮が平生の寢食の模様を問ひ、又事務の繁多か、閑散かを問ひ、毫も軍戰の事を問はなかつた。使者が曰ふのに、諸葛公は朝は早く起き、夜は遅く寝ね、而して罰杖刑二十以上に當るものは、皆自ら判決する、又毎日の食料は數

升に過ぎないと。懿之を聞いて人に謂つて曰ふのに、孔明は食事少くして事務が多い、それでは身體がつづかないから、必ず長生しないであらうと。心中大に喜んだ。果してその豫言の如く、亮は病氣に罹り、危篤に陥つた。此の時天に赤くして光りある大星が現はれ、俄に亮の陣中に落ちた。その後幾日も経ぬ内に、亮は死んだ。依て長史の揚儀が代つて軍を統べ、之を整へて蜀へ歸つた。或る百姓が走つて懿の軍に至り、懿に亮が死んだことを告げた。懿は急に之を追撃した。姜維といふ者が、揚儀をして旗を反して鼓を鳴らし、將に懿に向つて應戰する如く見せかけさせた。懿は大に畏れて敢て迫らなかつた。依て百姓は懿の怯を笑ひ、諺を爲つて曰ふのに、死んだ諸葛が、生きて居る仲達を走らせた。懿之を聞いて笑つて曰ふのに、我は彼れが生きて居る間は之を料り知ることが出来たが、死んだ後迄は、料り知ることが出来ないと、苦しい辯解をした。亮は嘗て兵法を推演して、八陣圖といふ者を案出した。これは戰地に於て、天地風雲を以て四正と爲し、龍虎鳥蛇を四奇となし、所謂八門に陣立を作り、變化を自在ならしめ、敵をして窺ふことが出来ぬ様にする陣法である。而して司馬懿は、今や亮の死により、その陣跡を占領した爲めに、その陣營壘壁を巡視し、痛くその功妙に驚き、眞に天下の奇材であると讚嘆

亮爲政無私。馬謖素爲亮所知。及敗軍流涕斬之。而卹其後。李平廖立皆爲亮所廢。及聞亮之喪。皆歎息流涕。卒至發病死。史稱亮開誠心。布公道。刑政雖峻。而無怨者。眞識治之良材也。而謂其材長於治國。將略非所長。則非也。初丞相亮嘗表於帝曰。臣成都有桑八百株。薄田十五頃。子孫衣食自有餘。不別治生。以長尺寸。臣死之日。不使內有餘帛。外有贏財。以負陛下。於是卒。如其言。謚忠武。

字解

史。陳壽が著した蜀志。十五頃。百畝を一頃と爲す。薄田。瘠田。餘帛。澤山の衣服。贏財。残れる財産。負陛下。家に餘帛選財あるは私欲を謀つて公務を盡さないからである。而して私欲を謀つて公務を盡さぬのは主君依託の明に背く不忠の臣であるといふ意。

解釋

諸葛亮は政治を爲すに當り公平にして私心を挾まない。馬謖といふ者は素より亮の知遇を辱うした者であるか。嘗て亮の節度に違ひ敗軍した爲めに亮は之を軍律に照らし、斷然私情を去り、涙を流して之を斬つたが、一面その子を卹んで

厚く世話をした。又李平廖立の二人は皆亮の爲めに廢せられたが、毫も怨みず、亮の死を聞くに及び、反て歎息して涙を流し、特に李平の如きは、悲痛の極、病を起して死んだ程であつた。これを見ても、亮が如何に德望があつたかが分る。陳壽はその著蜀志に評して曰ふのに、亮は誠心を開いて事に當り、以て公平に政道を布いた。而してその刑罰政令は峻嚴であつたけれども、一人として之を怨む者は無かつた。眞に國家統治の術を知つた偉人である。然かも亮の材は、國家を治むに長じ、將帥の智略は、その長ずる所で無いと謂ふのは當らない。亮は實に文武兼備の英傑であつた。初め丞相亮は帝に上奏して曰ふのに、臣は成都に桑八百株と、薄田十五頃あるから、子弟の衣食には自ら餘りがある。故に臣は別に生産を治め、子孫の爲めに尺寸の富、即ち僅かの財を殖すことをしない。従て臣が死するの日に於ても、決して家に餘帛あり、外に餘財を貯へ、以て陛下寄託の明に背く様なことは無い。かく上奏して固く私利を營まないことを誓つた。此の稀世の英傑も、今や陣中に歿したが、嘗て上奏せし如く、家に餘帛餘財は無かつた。忠武と謚した。阮咸之子瞻見王戎。戎問曰。聖人貴名教。老莊明自然。其旨異同。瞻曰。將無同。戎咨嗟良久。遂辟之。時號三語掾。是時王衍樂廣皆善清談。衍

神情明秀。少時山濤見之曰。何物老嫗生寧馨兒。然誤天下蒼生者。未
 必非此人。也。衍弟澄。及阮咸。咸從子修。胡母輔之。謝鯤。畢卓等。皆以任
 放爲達。醉裸不以爲非。比舍郎釀熟。卓夜至。甕間盜飲。爲守者所縛。旦
 視之。畢吏部也。樂廣聞而笑之曰。名教中自有樂地。何必乃爾。初魏時
 何晏等立論。以天地萬物皆以無爲本。衍等愛重之。裴頠著崇有論。不
 能救。

字解

名教。聖人の教は皆必ず名を立つ。即ち君臣父子仁義禮智の如き類。各名ありて亂るべからず。故に名教と曰ふ。老莊。老子と莊子。明自然。老莊の道は皆清澹にして虚無無爲を貴ぶ。故に自然と曰ふ。將無同。猶同じと曰ふが如し。三語。掾は屬官の稱。三語は將無同の三語。瞻將無同の三語に依つて掾と爲る。故に云ふ。寧馨兒。寧は猶此と謂ふが如し。馨は香なり。即ち此の如きの香好兒といふ意。香好兒とは猶ほ才子と謂ふが如し。蒼生。人民。任放。縦意放誕。即ち勝手氣儘。比舍。隣の家。釀。酒。乃爾。猶ほ乃ち此の如しと謂ふが如し。

解釋

阮咸の子の瞻は嘗て王戎に面會した。戎が問うて曰ふのに。聖人は名教を

貴び之が實行を期し。老莊は自然を貴び無爲を主とする。此の二説の旨趣は異なりや同じきやと。瞻が曰ふのに。同じであると。戎はその才に驚き感嘆すること久うし。遂に之を召して屬官とした。時人之を見て。瞻を三語掾と號した。此の時。王衍や樂廣は皆老莊の學に心醉し。清澹に耽つた。特に王衍は精神思想聰明にして俊秀であつた。衍の若き時。山濤といふ人が。衍を見て嘆じて曰ふのに。何物の老婆が此の才子を生んだのか。實に稀代の俊才である。然し天下の人民を誤り。之を邪道に陥るものは必ず此の人であらうと。王衍の弟澄。及び阮咸や阮咸の甥阮修。胡母輔之。謝鯤。畢卓等は。皆任放の行を以て闊達であると主張した。故に酒に酔ひて裸體になつても。それが非禮でなく。闊達の間に行であると信じた。又畢卓は隣家の郎官某の家の酒が熟したのを見。夜竊かにかめの間に忍び入り。盗んで飲んだ。ところが番人に見付けられて縛られたが。翌朝に至りその盗人は史部の官の畢卓であつたから。郎官も大に驚きあきれた。かく畢卓等は極端に任放を爲したから。流石の同志の樂廣も。之を聞いて笑つて曰ふのに。名教中には自ら樂むべきものがある。何も此の様に。酒を盗んで飲む様なことをせぬともよからうと。初め魏の時に。何晏等は天地萬物は皆無を以て根本とすると立論した。王衍等は此の説を愛重し

て、盛んに鼓吹した。然し裴頠は之に反し、崇有論即ち有を崇ぶといふ論を唱へて之を反駁した。然し遂に王衍等任放の弊を救ふことが出来なかつた。因に山濤嵇康、阮籍、阮咸、向秀、王戎、劉伶等は、老莊虛無の學を崇拜し、禮法を輕蔑し、縱酒昏酣して世事を賤んだ。世之を竹林の七賢と號した。

懷帝時、睿爲安東將軍、都督揚州諸軍、鎮建業。睿以王導爲謀主。每事咨焉。睿名論素輕。吳人初不附。導勸用諸名勝。顧榮、賀循、紀瞻等爲掾屬。撫綏新舊。江東歸心焉。後又得庾亮、卞壺等百餘人。謂之百六掾。桓彝避亂過江。見睿微弱。憂之。既而見導。退謂周顛曰。江左有管夷吾。吾無憂矣。諸名士遊宴新亭。顛中坐而歎曰。風景不殊。舉目有江河之異。因相視流涕。導曰。當勦力王室。共復神州。何至作楚囚對泣邪。愍帝以睿爲左丞相。洛陽祖逖少有大志。嘗與劉琨同寢。中夜聞鷄聲。蹴琨起曰。此非惡聲也。因起舞。及是南渡。請兵於睿。睿素無北伐之志。以逖爲豫州刺史。與兵千人。不給鎧仗。逖渡江。中流擊楫而誓曰。祖逖不能清

中原而復濟者。有如此江。愍帝又以睿爲丞相。都督中外諸軍事。長安陷。睿出師露次。移檄北征。實不行。群臣勸即晉王位。明年遂即皇帝位。

字解

建業。古へ吳の都した所。謀主。相談がしら。即ち參謀長。名論。名望と

物論。物論とは評判の意。吳人。建業の人。建業は古へ吳の地。故に吳人と曰ふ。

名勝。名譽優勝にして群を出づる人。即ち俊傑の士。撫綏。なで安んずる。江東。

楚江の東にて即ち建業の地を指す。過江。江東に來たこと。江左。江の左即ち

江東。管夷吾。古へ齊の桓公を輔けて諸侯の霸王とした名臣。新亭。建業にあ

る樓の名。此の亭は江渚に臨み、風景佳絶の所。中坐。坐中の意。風景不殊。舉目有

江河之異。晉は武帝より懷帝に至る迄三世は、洛陽に都せしが、洛陽は漢主劉聰の

爲めに攻略せられたる故。愍帝に至りて長安に遷れり、而して長安亦劉聰の爲めに

陥れられし故。元帝即ち睿は建業に都した。今此の風景不殊云々は、周顛が新亭の風

景を見て、故都洛陽の已に陥りしを傷んだのである。即ち昔諸名士が洛陽に在つた

時、遊宴せし所は、多く江濱山水の景を恣にした所であつた。而して今江東の遊宴に

於ても亦其日例に倣ひ、江渚の景に富む新亭に於て催されたから、其江渚風景の大

極は特に洛陽の江濱と異なる所が無い。然し既に土地異なる爲めに、密に觀察す

ると、江河の形態は自ら洛陽のそれと異つて居るといふ意で、眼前の風景を見て、
 く舊都の陥落したのを傷み歎いたのである。涕。涙。勦。合なり、併なり。王室、
 晋を指す。神州。中國を指す、中國は王者の居る所の吉土なり、故に神州と曰ふ。
 復。恢復すること、今や中國は夷狄劉聰等に占領せられ、晋帝は建業に蒙塵せり、故
 に復と曰ふ。楚囚。捕虜の意。これは楚の鍾儀の故事で、左傳に晋侯觀於軍府、見
 鍾儀、問之曰、南冠而摯者誰也、有司答曰、鄭人所獻楚囚也とある、今之を借用したので
 ある。中夜。夜半に同じ、夜中。北伐之志。洛陽は建業の北に當る、而して洛陽に
 は劉聰等割據せり。故に北伐之志とは劉聰等を討伐する志のこと。鎧仗。鎧は
 甲冑、仗は劍戟。中流。川の中程。中原。中國に同じ。清。平定の意。濟。渡る。
 露次。露は猶ほ暴露の如く、次は猶ほ止舎の如し、言ふは軍を原野に駐め、露營せし
 むること。移檄。檄は回文なり、即ち檄文を飛ばして士卒を募集すること。

解釋

西晋の懷帝の時に、容は安東將軍と爲つて揚州の諸軍を都督し、且つ建業を
 鎮撫して之を治めた。此の時容は王導を以て相談相手と爲し、萬事之に問うて後
 決行した。さて此の容は晋の瑯琊王の孫であるが、その名望と評判とは固より甚
 だ軽くあつて、餘り尊重されなかつたから、吳人即ち建業の人は、初めは親附しなかつた。

依て王導は容に勧めて多くの俊傑を任用させた。これは導は容が俊傑の
 士の輔佐によつて善政を施し、吳人の人望を得させ様としたのである。そこで容
 は顧榮、賀循、紀瞻等の名士を用ゐて豫や屬の官と爲し、以て新附の人や舊來より附
 從せし人を撫で安せしめたから、江東の人は漸く容に心服する様になつた。その
 後又庾亮、卞壺等百六人の名士を登用して豫屬と爲したから、當時の人は之を百六
 掾と謂うて歓迎した。此の時桓彝は兵亂を避けて江東に來り、容の勢力の微弱な
 るを見て之を憂へた。後王導に面會してその人物に服し、退いて周顛に謂うて曰
 ふのには、我が江左には、管夷吾の如き人傑があつて、容を輔佐して居るから、我は毫
 も憂ふることは無いと。此の頃多くの名士、即ち容の諸臣は、新亭で宴を張り、一日
 の歡を盡したが、宴酣なる頃に顛は慨然として歎じて曰ふのには、此の新亭の風光
 は、我が舊都洛陽の江濱と同じであるが、目を舉げてよく見ると、江河の形は自ら異
 なる所があると。これは舊都の山河は空しく夷虜の蹂躪する所と爲つて居るの
 を慨したのである。依て諸臣は相見て涙を流し、共に悲憤の袖をしぼつた。時に
 王導が曰ふのに、今我等の任務は、互に力を併せて王室に盡し、醜虜を平定し、以て神
 州を回復すべき一事である、どうして捕虜と爲つて敵國に送られ、相對して泣き悲

むが如き醜を演じようか、我等は斷々乎として戎虜を征服せねばならぬ。かく曰うて諸名士を勵ました。其の後晋の愍帝は睿を以て左丞相と爲した。此の頃洛陽の人に祖逖といふ者があつたが、此の人は壯年の時から大志を懷き、天下に功名を立てんと希望して居た。嘗て劉琨と共に同じ夜具の中で寢たが、夜半に鶏の鳴き聲を聞き、琨を蹴つてその眠を覺し、起つて琨に謂うて曰ふのには、彼の鶏の聲は、世人の所謂惡聲では無いか、然し此の惡聲は我等に取りては吉聲である、我等は平生の希望を達する時機が到來したのであると。因て喜の餘り起つて舞うた。これは當時の人は鶏が夜半に鳴くと、事變が起る前兆であるとして之を惡んだのである、然し事變は英雄が功名を立つるよい機會であるから、逖は之を以て平生の望を遂ぐる事が出来ると思ひ、さて喜んで舞うたのである。さて祖逖はひたすら變亂の起るのを待つて居たが、今晋は劉聰等に攻められ、晋帝は睿を以て左丞相と爲して軍事を都督させたのを聞き、南の方楚江を渡つて建業に來り、睿に見えて兵を請ひ、北伐せんことを申し込んだ。然し睿は初めから北伐の心が無かつたから、逖を以て豫州の刺史と爲し、僅に千人の兵を與へ、且つ戰爭に必要な鎧仗は給與しなかつた。然し逖は楚江を渡つて北伐の途に就いた。そして江の中流

に至つた時、船をやる楫を撃つて將士に誓つて曰ふのには、若し此の祖逖が不幸にして中原を平定することが出来ずして再び此の江を渡る様な場合に至つたならば、我は此の江の水が流れて再び返らざるが如く唯死するのみである、決して再び渡らないと。これは逖が決死の覺悟を示して將士を勵ましたのである。晋の愍帝は又睿を丞相と爲して中外の諸軍を都督させた。かゝる内に愍帝の都した長安は賊の爲めに攻められて陥落した。睿は之を聞き、兵を出して露營し、檄を四方に飛ばして將士を募集し、以て北征の師を起した。然しこれは表面だけで、實は北征しなかつたのである。かくて睿の群臣は睿に勸めて晋王の位に即かせた。そこで睿はその翌年に皇帝の位に建業に即いた。これが即ち東晋の元皇帝である。

肅宗明皇帝名紹。幼而聰慧。嘗有使者從長安來。元帝問紹曰。長安近歟。日近歟。紹曰。長安近。但聞人從長安來。不聞人從日邊來。元帝奇其對。一日與群臣語。及之。復以問紹。紹曰。日近。元帝愕然曰。何異問者之言邪。紹曰。舉頭見日。不見長安。元帝益奇之。及長仁孝。喜文辭。善武藝。好賢禮士。受規諫。與庾亮溫嶠等爲布衣之交。敦在石頭。以其有勇略。

欲誣以不孝而廢之。賴嶠等衆論沮其謀。至是卽位。敦謀篡位。移屯姑熟。自領揚州牧。

字解 聰慧。聰明にして敏慧。愕然。驚く貌。聞者。コノゴロと訓む、先日之意。喜。コノムと訓む、好むこと。規諫。規は戒なり、身の戒となるべき諫言。布衣之交。布衣は無位無官の者の着る衣服、紹は皇太子であるが、臣下との交情は至極親密なる結果、上下の禮節を棄て、己れも亦無位無官の者として交つた。卽ち高貴の人が、その身分に拘泥せず卑賤な者と交るを爲布衣之交と謂ふのである。誣。無きを有りとし、有るを無しとし、僞り構ふること。沮。ハバムと訓む、拒ぎて爲さしめず、その氣勢を摧くこと。領。統治する。牧。長官。

解釋 肅宗明皇帝は名を紹と曰ひ、幼少の時から聰慧であつた。その一例を挙げると、嘗て使者が長安から來た時に、元帝は紹に向ひ、長安と日輪と何れが近いかと問うた。紹が對へて曰ふのには、それは長安の方が近い、何せなれば、唯人が長安から來たことを聞いたが、まだ人が日輪の邊から來たことを聞かないからであると。元帝はこの對を奇とした。その後元帝は群臣と閑談した序に、此紹と問答した事を話した。そして又紹に日輪と長安と何れが近いかを問うた。紹が對へて曰ふ

のに、それは日輪の方が近いと。元帝は愕然として驚いて曰ふのには、汝が今日の答は先日之の答と異つて居るでは無いかと。紹が曰ふのには、今頭を擧げて上を見るに、日輪は見えるが長安は見えない、故に日輪が近いのであると。元帝は益々その答を奇として之を愛した。此の如く紹は幼少の時から智惠があつた。而して成長するに従つて仁慈にして孝行であつた。且つ文學を好み、武藝にも上達した。特に賢者を好み、材能の士を尊び、又臣下の諫言は喜んで之を受けた。かく聰明の人であつたから、庾亮、溫嶠等の如き賢士と布衣の交を爲した。此時王敦は石頭城に在つたが、紹の勇武にして大略あるを忌み、紹の太子の位を廢せんと欲し、不孝者であるを謂うて之を誣ひた。然し嶠を始め衆人の反對により、その姦計は沮止された。かくて紹は王敦の姦計を沮止することが出來たから、遂に皇帝の位に卽いた。然るに王敦は、あく迄紹の皇位を奪はんと謀り、屯所を姑熟といふ所に移し、且つ自ら揚州の長官と爲つて之を統治し、ひたすら時機の到來を待つて居た。

以陶侃都督荆湘等州諸軍事。初侃自江夏太守爲荆州刺史。王敦疾之。左遷廣州刺史。侃在州。朝運百甓於齋外。暮運於齋內。人問其故。答曰。吾方致力中原。故習勞耳。至是復鎮荆州。士女相慶。侃性聰敏恭勤。

嘗曰大禹聖人乃惜寸陰衆人當惜分陰取諸參佐酒器蒲博具悉投於江曰樗蒲者牧猪奴戲耳嘗造船籍竹頭木屑而掌之後正會雪霽地濕以木屑布地及後有征蜀之師得侃竹頭作釘裝船其綜理微密類此

字解 左遷。凡そ朝列は右を貴ぶ故に官位を貶して下官と爲し、遠方に遷すを左遷と謂ふ。百。璧。璧は甄にて、シキガハラより、百は大數をいふ。齋。歐陽修が文に、即其東偏之室治爲私之居。名曰晝舫齋とあり、然しこゝは刺史の官舎の意に用ゐたのである。至是。初の以陶侃都督荆湘等州軍事の事を指す。復。侃初め荆州の刺史と爲る、今又荆州の軍事を都督す、故に復と云ふ。寸陰。一寸の光陰なり、淮南子に、聖人不貴尺之璧而重寸之陰とある。衆人。凡人。參佐。署事を參佐する人、即ち州の屬官。蒲博。蒲は賭具、錢物を賭けて勝負を争ふ具、賽。博は博局、即ちごばん。樗蒲。賽を以て勝負を争ふ戯で、即ちばくち、或は賭博、博奕。牧猪奴。猪は豚なり、豚を牧畜する者は下賤の奴輩なり、以て博打する者に譬ふ。竹頭。竹の切り屑。木屑。鋸の木屑。掌。保管させること。正會。正月元日の朝會、朝會

は役人が朝廷に參内することであるが、こゝは刺史の役所の意に用ふ。装。修繕する。綜理。綜はスブル、統理はオサメル、治、事物を綿密に統べ治むること。

解釋 睿帝は陶侃を以て荆州湘州の諸軍事を都督することを命じた。さて陶侃は初め江夏郡の太守と爲り、尋いで荆州の刺史と爲つた。然るに王敦は之を惡んで侃を廣州の刺史に左遷した。侃は任地廣州に在つて毎朝多くの璧を官舎の外に運び出し、晩に又之を官舎の内へ運び入れた。或る人が之を見てその理由を問うた。侃が曰ふのには、我は方に力を中原に致し、劉聰等の賊を討滅し、以て中原を回復せんと欲するのである。それには多大の苦勞を要するから、今この準備としてかく練習するのであると。侃はかく忠誠の心があつたから、今度晋帝は侃を荆州湘州の諸軍事を都督させたのである。依て侃は再び荆州を統治することになつた。そこで荆州の士女等は前から侃の徳に服して居たから、相慶して良吏を得たことを喜んだ。侃は天性聰明で敏捷で、恭謙で勤勉で、何事にも多大の注意を拂つた。嘗て曰ふのには、昔の大禹は大聖人でありながら、猶一寸の光陰を惜んで勉強した。故に我々の如き凡人は、當さに一分の光陰を惜み、奮勵せねばならぬと。而して屬官等の中で、空談戲技に耽る者があつたから、侃はその飲器や博奕の賽や

ごばんなどを取つて、悉く江水に投棄して曰ふには、凡そ博奕は牧猪奴の如き下賤の徒のする戯であつて、斷じて士大夫の爲すべきもので無いと。又嘗て船を造つたが、その用材の残りの竹頭や木屑は、屬官に命じて明細に之を帳面に記入して保管せさせた。その後正會の節に、雪が晴れて廳前の泥濘甚しかつたから、侃は前に保管させて置いた木屑を以て、之を地上に布いたので、路がすつたり直つた。その後又蜀郡を征する軍が起つたが、その時侃が保管して置いた竹頭を以て釘を作り、その釘を用ゐて船を修繕した。さて陶侃の用意周到なることは此の通りで、此の例を以て見ても、その萬事を推察することが出来る。

後趙石勒稱天王。尋稱帝。嘗大饗群臣。問曰。朕可方古何主。或曰。過於漢高。勒笑曰。人豈不自知。卿言太過。若遇高帝。當北面事之。與韓彭比肩耳。若遇光武。當並驅中原。未知鹿死誰手。大丈夫行事。當礪礪落落。如日月皎然。終不效曹孟德。司馬仲達等欺人孤兒寡婦。狐媚以取天下也。勒雖不學。好使人讀書而聽之。時以其意論得失。聞者悅服。嘗聽讀漢書。至酈食其勸立六國後。驚曰。此法當失。何以遂得天下。及聞張

良諫。乃曰。賴有此耳。

字解

後趙。晋の世、天下漸く亂れ、匈奴、鮮卑、羯などの種族等、中國に侵入して、各方隅に割據し、以て國を建てたもの十六の多きに及んだ。而して後趙もその一で、羯人石勒が建設したのである。卿。汝の意。北面。凡そ君主は南方に面して、朝政を聽き、臣下は北に面して、君主に仕へるものである。故に北面は臣下の意。鹿。帝位に喩ふ。礪々。礪は磊に通ず、心が明白にして細事に拘泥せざると。落落。礪々と同じ意。皎然。明白なる貌。孤兒。みなしご、幼にして父母なきもの。寡婦。ごけ、夫の無き婦。狐媚。老狐は能く變化して人を惑はす。故に欺き惑はすを狐媚と云ふ。漢書。本の名。後漢の班固之を選す。賴。サイハヒと訓む、幸なり。

解釋

後趙の石勒は自ら天王と稱し、尋いで帝と稱した。嘗て大に群臣を集めて之を饗應した。その時群臣に問うて曰ふのには、朕は古の何れの君主に比べてよからうかと。一人の臣が阿諛して曰ふのには、陛下は前漢の高祖よりも優れて居ると。石勒は笑つて曰ふのには、凡そ人たるものは、豈どうして自ら自分の力量を知らぬものがあらうか、大概は知つて居るのである。故に今汝が朕を以て高祖以上の人となすのは甚だ譽め過ぎて當らない。朕が若し高祖の如き大人物に出遇

うたならば、必ず臣下の禮を取り、北面して之に臣事しなければならぬのである。故に朕は高祖とは比較することが出来ない、反てその臣下の韓信や彭越の輩と肩を比ぶべきものである。然も又後漢の光武帝に出遇うたならば、朕は當さに彼と馬を並べて中原を馳け廻はり、共に天下を争ふのであつて、未だ帝位が誰の手に歸するか分らぬので、恐くは帝位は朕の有に歸したかも知れぬ、故に朕は光武と同等の人物であると思ふ。兎に角大丈夫たるものが事を行ふ場合には當さに確々落々として彼の日月の皎然たるが如く、公明正大でなければならぬ、彼の魏の曹孟徳や晋の司馬仲達等が如く、人の孤兒や寡婦を欺き、狐媚して天下を取つた様なのは、實に卑怯醜劣の極で、朕は斷じて此の輩の行に效ふことを欲しないと、かく曰うてその抱負を示した。さて勅は學問をしなかつたけれども、好んで人をして書物を讀ませて之を聽き、時々その書中の事に就き、利害得失を評論した。而してこの評論が正鵠を得て居たから、之を聞く人は、皆其卓識に感服した。嘗て人に漢書を讀ませて之を聽いて居た。而して書中酈食其が漢王に齊楚燕韓魏趙の六國の後を立てよと勧めた條に至り、大に驚いて曰ふのに、此の酈生が説く所の法に従へば、漢王は當さに天下を失ふべき筈である、然るに高祖はどうして遂に天下を得たのであらうかと。それから又讀み來つて、張良が漢王に謁して酈生の説を駁し、その採用すべからざるを極諫した條を聽くに及び、乃ち喜んで曰ふのには、幸に此の諫あるにより、高祖は遂に天下を得たのであると。石勒はかく卓越せる見識を有して居た。

晋丞相王導卒。初成帝即位。冲幼。每見導。必拜。既冠。猶然。委政於導。導以門地。王述爲掾。述未知名。人謂之痴。既見問。江東米價。述張目不答。導曰。王掾不痴。導每發言。一坐莫不贊歎。述正色曰。人非堯舜。何得每事盡善。導改容謝之。導性寬厚。所委任。諸將多不奉法。大臣患之。庾亮欲起兵廢導。或勸導密備。導曰。吾與元規休戚是同。元規若來。吾便角巾歸第。復何懼哉。亮雖居外鎮。而遙執朝權。據上流。擁強兵。趨勢者多歸之。導內不能平。嘗遇西風塵起。舉扇自蔽。徐曰。元規塵汚人。導簡素寡欲。善因事就功。雖無日用之益。而歲計有餘。輔相三世。倉無儲穀。衣不重帛。

字解 冲。冲も幼に同じ兒供。冠。年十五になつて元服すること。門地。門
閤或は家柄。痴。馬鹿者。王掾。王は王述、掾は官の名、王述は掾と爲れり故に
ふ。元規。庾亮の字。休戚。休は慶、戚は憂。角巾歸第。角巾は隱者の被る頭巾
第は屋敷邸宅、即ち官を辭して邸内に隱居する意。外鎮。朝廷の外に在つて州群
を鎮撫すること、時に亮は武昌城の鎮撫使であつた。上流。武昌城を指す、此の城
は江水の上流に在り、故に云ふ。趨勢。勢力ある人に阿諛すること。簡素。簡易
質素。三世。元帝、明帝、成帝の三代。儲穀。貯藏の米穀。帛。蠶の絲で織つた織
物、絹。

解釋 晋の宰相の王導が死んだ。初め成帝は位に即いた時は、まだ幼少であつた
から、王導を見るごとに、必ず拜して敬意を表した。而して既に冠して後も尙拜し
て居た。かく成帝は王導を尊敬して居たから、政事は一切王導に委任した。さて
王導は王述が門閤家である所から、之を屬官に任じた。此の述は當時まだその名
が世間に知られなかつたから、世人は之を馬鹿者であると思つて居た。依て王導
は述の賢愚を試みんと欲し、述が來て面會した時に、突然述に江東の米の相場を尋
ねた。然るに述は只眼を張つて導を見つめて居るばかりで、之に對して一言も答
へなかつた。これは述の志が遠大で、米價を知るが如き俗吏でなかつたからであ
る。そこで導は述の賢なるを知つて喜んで曰ふのに、世人は述を馬鹿者と曰ふが、
彼は決して愚者で無いと。當時の勢力は上下を壓し、その一言一句は善惡に係ら
ず、之れを聞いた列座の人々は、唯々として賛歎したのであつた。然るに獨り述は
顔色を正して導に曰ふのには、凡そ人は堯舜の如き大聖で無い以上は、總ての事に
於て、善を盡し美を盡し、完全無缺といふことは出來ない、必ず過失があるものであ
る、故に座中の人が皆讚賞したからとて、それを以て満足することは出來ないと。
導は此の忠言を聽き、亦容を改めて之を謝した。かくの如く述は直言を好む賢士
で、導も亦人言を容るゝ寛厚の君子であつた。さて導は寛大温厚の長者であつた
が、その政務を委任した諸將は、皆導の德に狎れ、法令規律を守らない者が多くなつ
た。依て大臣等は、大に之を心配した。その結果庾亮といふ將は、兵を起して導を
攻め、その官職を奪はんと謀つた。或る人が竊かに之を導に告げ、之に對する準備
をすることを勧めた。導が曰ふのに、我は庾亮と國家の休戚を共にし、共に國事に
盡力して居るのである、之に若し庾亮が、我を以て國家に不忠なりとして攻めて來
たならば、我はいさぎよく官を辭して家に歸り、閑雲野鶴を友とするばかりである。

何も彼を懼れることは無いと、自若として懼れる色が無かつた。此の庾亮は、城に居り、強兵を擁して居たから、その勢力は旺盛で、外鎮に居るに係はらず、濫かに朝政に干渉した。故に勢權に阿る輩は、多く亮に歸した。依て流石温厚の導も不平であつた。嘗て外出し、西風が起つて塵灰面を吹くに出遇うた時、自ら扇を以て顔を蔽うた。そして徐に曰ふのには、庾亮が塵は實に人を汚すことがあると。これは風塵に託して、亮の横暴を嘲けつたのである。さて王導は性簡易を貴び、且つ清廉で慾心が無かつた。又事件に遇ふも、よく之を處理し、勳功を建てた。而してその財務を處置するに於ては、簡易を貴ぶ所から、毎日〳〵の利益を計り考へなかつたが、然かもその歳計には餘裕があつた。かくて王導は三代の朝に事へ、丞相と爲つて王事に盡した。而して自らの倉には貯藏した米が無く、又平日は絹を着なかつた。これ等を見ても、導の清廉と質素とを知ることが出来る。

都督荆江等州軍事庾翼爲人慷慨喜功名不尙浮華殷浩才名冠世翼弗之重曰此輩宜束之高閣俟天下太平徐議其任耳時人擬浩管葛伺其出處以卜興亡曰淵源不出當如蒼生何翼請浩爲司馬不應

翼以王夷甫嘲之瑯琊內史桓温豪爽有風槩翼嘗薦之曰英雄之才宜委以方召之任至是翼以滅胡取蜀爲己任欲悉衆北伐移鎮襄陽詔翼都督征討諸軍翼以温爲前鋒督

字解 浮華。浮は輕浮、華は華奢、これは老子莊子の學を尊び、玄虚を談ずることを指す。束。一たばに束ねる。高閣。高い棚。俟。マツと訓む。待つ。擬。比較する。淵源。殷浩の字。蒼生。黎民に同じ、天下の人民。王夷甫。夷甫は衍の字、王衍の事は既に講せり。豪爽。豪邁にして雄爽。風槩。氣概に同じ。薦。人を官に推薦すること。方召。方叔と召伯、此の二人は周の宣王を佐けて中興の偉業を爲した賢臣。

解釋 荆州江州等の諸軍事に都督たる庾翼は、庾亮の弟である。その人と爲りは、慷慨にして功業名聲を立てることを好み、老莊浮華の談を爲すことを好まなかつた。此の頃殷浩といふ人があつたが、その才名は一世に冠絶し、何人も之に及ぶ者が無かつた。然し庾翼は獨り之を尊重せずして曰ふのに、此の殷浩等の如き徒は、宜しく之を一束として高い棚の上に載せて置き、天下の太平に治まるを待つて、

ろく、とその任官の事を議すべきもので、現今の時局に於ては、何等用ゐる所がない人物であると、痛く之れを排斥した。然し當時の人は、反て殷浩を重じ、之を管仲や諸葛孔明に比し、浩が出で、官に就くか、退いて家に居るか、即ちその出所進退を見て、晋室の興亡を卜するといふ有様であつた。従て淵源が出て官に仕へなければ、當さに我々蒼生を如何にしてくれる積であるかと曰うて居た。これは百姓が深く殷浩に信頼して居たからである。そこで庾翼も民望に従ひ、晋帝に請うて浩を司馬の官に任じた。然るに浩は高く自ら標して應じなかつたから、翼は浩を王夷甫に比して之を嘲り、清談の雄は無用の長物で、遂に王夷甫の如く非命に斃れるというて之を譏つた。此の時に、瑯琊郡人で、内史の官をして居る桓温といふ者があつたが、此の人は豪爽にして氣概があつた。庾翼は嘗て之を朝廷に推薦して曰ふのには、桓温は英雄の才があるから、宜しく之に委任するに、方叔召伯等が、周の宣王を佐けて中興の業を建てた任務を以てしてもらひたいものであると。かくて翼は胡即ち後趙の石勒を滅し、蜀即ち李壽を攻略するを以て己の任務と爲し、悉く衆兵を出して北伐せんと欲した。依て便宜上襄陽に移つて之を鎮撫した。後晋帝は庾翼に詔して征討の諸軍を都督せしめ、桓温を以て前鋒の都督となした。

秦遣兵分道寇晋。陷諸郡。執襄陽刺史朱序。以還。已而議大舉。或謂晋有長江之險。堅曰。以吾之衆。投鞭於江。可斷其流。時中外皆諫。惟慕容垂姚萇欲乘其釁。勸之南伐。堅遂發長安戍卒六十餘萬。騎二十七萬。晋以謝安爲征討大都督。謝玄爲前鋒都督。督衆八萬。拒之。劉牢之帥精兵五千趨洛澗。直渡水。擊秦前鋒梁成。斬之。石等水陸繼進。堅登壽陽城望見晋兵部陣嚴整。又望見八公山草木皆以爲晋兵。慙然有懼色。秦兵逼肥水而陣。玄使人謂曰。移陣小卻。使我兵得渡。以決勝負。何乎。堅欲聽。晋兵半渡。蹙之。麾兵使卻。秦兵退。不可復止。朱序在陣後呼曰。秦兵敗矣。遂潰。玄等乘勝追擊。秦兵大敗。走者聞風聲鶴唳。皆以爲晋兵至。堅狼狽還長安。

【字解】

秦。十六國の一始祖を苻洪といひ、苻の種族長安に都す。執。捕へる。以。キテと訓む、共に連れて行く。堅。秦王の名。拒。フセグと訓む、防ぐ。帥。率ゐる。八公山。山の名。慙然。憂愁の貌。卻。退く。聽。承諾する。蹙。急に攻